# 貴方の願いを叶えますっ♪

かるびーえーる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
貴方の願いを叶えますっ♪

【Ｎコード】
Ｎ２１６４Ｆ

【作者名】
かるびーえーる

【あらすじ】
変人の主人公、直人はよく夢を見る。その夢は決まって金髪の魔法少女が願い事は何か問うというもの。それがまさか現実になるとは……一応、ラブコメです。

# 僕、人間やめます。

『貴方の願いはなんですかっ！？（／／／）』
顔が林檎の様に真っ赤に染める少女……もとい魔法少女は僕にそう問いかけた。いや、魔法少女といっても別に僕は彼女の不思議な力を見たわけでも体感したわけでもない。……傍から見ればそういう魔法少女っぽい格好をした危ない少女と言えるかもしれない。けれど、勘違いしないで欲しい事は決して僕は魔法少女の存在を否定しているわけでも肯定しているわけでもない。見たまんまの感想をありのままに伝えただけだ。
『……』
『あ、あのぅ……そこで無言になられると余計恥ずかしいんですけど……（泣）』
そして僕は彼女を上から下まで舌で舐め回す様に見続ける。いわゆるインストール（？）という奴だな。
『あ、あのぅ……』
まずは……顔。髪は金髪の長髪。鼻は決して高い方ではないが、かといって低いわけでもない。肌はもちろん綺麗。むにゅってつまんでみたい。血色の良い唇。心なしかぷるぷる震えているような気がするがかわいいではないか。典型的な可愛い系の顔だな。
『あ、あのあのっ！』
そして次に目線を下に下ろし、次は体系。細い。しかし、それは引き立て役に過ぎない……そう、おっぱいの。でかい、でかすぎる。Gカップはあるんじゃないか？きっと食べた分の栄養がそこに溜まったのだろうな。それに加えくびれがこうなんともキュ～っと……ふむ、実にエロイ体系をしているな。けしからん！けしからん！
『あなたの願いはなんですかっ！？（／／／）』
そして魔法少女は再び僕に問いかける。先ほどより弱冠、声が大きいような気がする。照れ隠しのためなんだろうが余計顔が赤くなっ

ている、逆効果だ。
『……僕の願い』
『そ、そうですっ！！！！それですっ！！！！さ、さぁ！！！！言って下さい！！！！』
しかし変だ、どのくらい変かというとダイナマイト四〇がエス〇ル〇マンと最終ラウンドまでもつれこんだ時と同じくらい変だ。……なぜなら僕にはそのような夢のような事をされる覚えは無かったのだ。しかし……
『僕の願い……それは』
『な、なんでしょうかっ！？』
ゴク……

『君の……そう、今履いているパンティを頂くことだ……』
『は、はぁ！？ななななな何言っているんですかぁ～～～！？あなたはぁあああああ～～～！？（／／／）』
『？聞こえなかったかね？もう一度言うよ……？君の……そう、今履いているパンティを頂くことだ……』
『そ、そういう意味ではなくてですねぇ……！？って！？何、私のスカートを上げてるんですかぁあああああ～～～！？（／／／）』
『ほう……これはこれは。クマさんパンティか……んふっ、くまタンかぁいいね（／／／）』
『ちょっ……気持ち悪っ！！！ちょっとぉ！？や、やめてくださいよぉおおお……って！？今度はなに私のぱぱぱぱぱパンツを下ろそうとしてるんですかぁあああああ～～～～！？』
『パン……ツ？……美しくないな、正しくはパンティだ。訂正したまへ』

『ど、どうでもいいですよっ！？そんな事っ！！！（／／／）や、やめてください！！！』
『むんっ！！！！！』
ズルーーーーー！！！！！
『きゃっ、きゃあああああああああああああああああああーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！』
そして僕は一瞬の内に彼女のパンティを脱がせ、そしてそれを堪能するために……
『クンクン』
『な、何してるんですかぁあああああ～～～～～！？か、返してください！！！！！！～～～～～（／／／）』
そしてよりパンティと一体化するために……
『……ジャストフィット（／／／）』
『な、何、人のパンツ被って悦に浸ってるんですかぁあああああ～～～～～！？最高に気持ち悪いんですけどぉおおおおお～～～～～～！！！！！』
『あぁ……心が洗われる……これが……小さな小さな天使の贈り物……ふふっ（／／／）』
『何が小さな天使の贈り物ですかぁあああああ！！！！！この下着泥棒！！！！！死んでください！！！！！（／／／）』
パチーーーーーン！！！！！
『あぁうっ！！！！！気持ちいいっ！！！！！（／／／）』

チュンチュン……
「兄、起きる」
ゆっさゆっさ
「……ん？」
目をゆっくり開ける……そこに居たのは
「……」
「朝、ご飯、食べる、下、行く」
僕のかぁいいかぁいい妹、まちるだった。まちるは背が低くて顔はまだあどけなさが残っている。髪は黒の長髪。うむ……我が妹ながら今すぐ召し上がりたい……
「まちる……（／／／）」
「？何」
「おっぱい……触っても……いいかな？（／／／）」
「……いい、よ」
「……いいのかい？」
「……兄、なら、いい……」
「……ふふっ、なーんてね。これは困ったちゃんだ。いいかい？まちる？異性に誘われて簡単に肌を触れさせるなんて行為は今後一切しちゃ、だ・め・だ・ゾ♪♪♪」
「……こん、なの、兄、しか、言わ、ない……」
「あはははッ、こいつめぇ～～～♪♪♪ポコチン♪」
軽くまちるの頭を小突く。
「……っ（／／／）」
恥ずかしくなったのかまちるは駆け足で下に下りていった。
「ははは……本当にまちるはかぁいいんだからなぁ……」
思わずにやけてしまう、僕にこんなかぁいい妹がいて……
「……」
そして背後に人の気配がする……やれやれ。

「美菜？そこに隠れているのは分かってるんだよ？出てきなさい？」

「……あんたね」

僕の部屋の窓から侵入してきたのは七瀬美菜（ななせみな）。僕の家の隣の家に住んでいる。窓から侵入できたのは僕の部屋と彼女の部屋のベランダがほんの数メートルのおかげで飛び移ることができるからだ。彼女はいわゆる僕の幼馴染でなぜか僕を毎朝起こしに来る。といっても、彼女より僕のほうが朝は早いので全く持って意味が無いのだが。容姿は赤の長髪でその鋭い眼光は僕をいつも悦ばせてくれる。あぁ……思い出しただけでも堪らない、とめられない、やめられない……（／／／）

「なんだい？貧乳？」

「誰が貧乳よっ！！！」

バキッ

「うん！気持ちいいッ！サイコーーーーー！！！！！」

「うわっ……なんかコイツ喜んでるし……キモッ（汗）」

「違う……違うぞ、美菜……喜んでるんじゃないんだ……僕は悦んでいるんだッ！！！！！」

「アップになるんじゃないわよ！！！！！キモイッ！！！！！」

バキッ

「いいねっ！！！それッ！！！」

「はぁ……なんであたしはこんな変態の幼馴染なのかしら……昔はもっと素直だったのに……死のうかしら……」

なんか酷い事を言われているような気がするがこれもいいね。言葉責めって奴？

「うん！僕は昔も今も身体は素直だよ！」

「うるさいっ！！！」
バキッ
「あひーーーーッ！！！！！（／／／）」

「それはそうと……あんた朝っぱらから自分の妹に何してんのよ！！！！！」
「何……？いや、愛でようと……」
「……ッ！この犯罪者ッ！！！！！」
パチーーーーン！！！！！
「うん！もう少しきつくてもいいですッ！！！」
そして一通り僕を殴り終えた美菜はなぜかカンカンに怒りながら自分の部屋に帰っていった。
……はて？カルシウムが足りないのかな？あとで牛乳でも持っていってあげようか……あっ、もち低脂肪の奴ね。

そして、下に降りると……
僕の席の目の前の机にドッグフードが置かれていた。
母さん、僕の性癖分かってるね。いいとこついてるよ。

そして今日も騒がしい一日が始まる……

## 口は災いの元

僕、藤本直人（ふじもとなおと）は家を出て、ふと空を見上げると曇り１つも無き快晴だった。とりあえず、家の前でまちると美菜が出てくるのを待つのが日課だ。

「おはよう、直人君。あら、もう学校？いつも早いわね」

そんな天候に見合った背が高くモデル並みのスタイルを誇った金髪美女、美村友恵（みむらともえ）さんに声をかけられた。ちなみに友恵さんは僕の家の隣に住んでいる。つまり、僕の家は美菜の家と友恵さんの家に挟まれている。つまり、サンドイッチプレイ（？）が楽しめると言う訳だ。

「おはようございます友恵さん。えぇ、僕は早漏れですから」

「でも、今日は降水確率８０％らしいわ。一応傘は持って行っておいた方がいいんじゃないかしら？」

普通にスルーされた。

「僕の朝の傘は大きいですよ？」

でも、粘る僕。ちょっと苦しいような気もするけど。

「あら？そう？あなたにはぴったりのサイズのような気がするけど？」

なるほど……僕にぴったりなサイズなのか。いや、これはどっちの意味で取ればいいんだ？もう少しストレートに言ってみるとしよう。

「ところで友恵さん、傘の柄は何がお好きですか？」

「傘の柄？蛇柄かしら？」

蛇柄……随分と悪趣味だね、友恵さん。

「蛇ですか……僕も立派な蛇を飼っていますよ、主に下半身に」

「あら、そうなの？良かったら今度、見せてもらえるかしら？楽しみだわ」

見るのが楽しみなのか……いや、これもどっちの意味で取ればいいんだ？もっとストレートに言ってみるとしよう。

「できれば舐めてもらえると嬉しいんですけど……（／／／）」
「ムツ〇ロウさん見たいにかしら？いやぁね、そこまで蛇を愛していないわよ」
しまった、リアル蛇の方か。しかし、嘘をついてしまった、謝らないと。
「ごめんなさい、嘘です」

「嘘？」
「はい」
パチン
「嘘はいけないでしょ？」
「ごめんなさ…」
パチンパチン
「ダメでしょ？」
「ごめんな…」
パチンパチンパチン
「ごめんなさいは？」
「ごめん…」
パチンパチンパチンパチン
「返事は？」
「ごめ…」
パチンパチンパチンパチンパチン
「ね？」
「ご…」
パチンパチンパチンパチンパチンパチン

バキッドガッガスッメキッ

「兄、学校、行く」
「……って、あんたその顔どうしたのよ？（汗）」
「すごく気持ちよかった」
「……はぁ？」

## 楼流タンといっしょ

僕と美菜とまちるが通っている中学校は家から少し離れた海沿いにある。なので校舎からは海が見渡せる。といっても、僕らの住む町が海沿いに面しているからなのだが。

「兄、美菜姉、行って、来る」

まちるは僕と美菜とでは学年が違うため、クラスは新校舎にある。

（ちなみに僕らは旧校舎にクラスがある）そのため、学校の敷地内に入ったら別れることになる。

「ああ、いってらっしゃい。くれぐれも変質者には気をつけるんだよ？」

「ここにその反面教師がいるけどね」

「褒めないでよ、美菜。もっと僕を虐めてくれよぉ…例えば『良い声で泣きなっ！！！この汚らわしい子豚めっ！！！ハァハァ……最高ね、あんたのその苦しそうな顔……げぎゃ！げぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃ！！！』とか言って僕を悦ばせてくれよぉ……いかん、想像したらまた勃ってきた」

「褒めてないわよっ！！！ていうか、私まで変態に貶めるなっ！！！」

バキッガスッメキッ！

「キターーーーー！！！！！！」

僕と美菜は我がクラスに入った。

「あっ♪おっは～♪直ちゃん♪美菜ちゃん♪」

爽やかで愛くるしい笑顔で僕らに朝の挨拶をしてきたのは僕の大親

友もとい愛人である堂島楼流君（♂）だ。あぁ……楼タン、君を一刻も早くお召し上がりたい……（／／／）うん？なに？オ……ス？そんな些細な問題、僕と楼タンの間では何の障害でも無いよ、むしろそれがソソラレル。ハァハァ……それにしても今日は一段とかぁいいなぁ……楼タン（／／／）

「ああ、おはよう、楼タン。今日も一段とかぁいいね。主にその太ももらへんが」

「やぁン♪直ちゃんのえっちすけっちわんたっち♪（／／／）」

「あんたね……いい加減その格好をやめなさいよ……あんたのその言葉遣いも動作も全てにおいて気持ち悪いとしか言いようが無いんだけど？（汗）」

楼タンの格好は女子の制服を着ている。すなわちスカートを履いているのだ。まったく、美菜は何も分かって無いね。むしろそれがいいというのに……あぁ、涎が垂れてきた……ハァハァ（／／／）

「あぁん！美菜ちゃんひっど～～～い！！今日はお化粧ばっちり決めて毛まで剃ってきたのにぃ！！！どぉしてそんなひどいこと言うのぉ～～～！！！」

「うるさいっ！！！このオカマ！！！！！」

ポカッ

「やぁん！！！いった～～～い！！！直ちゃ～～～ん！！！ひどいよぉ！！！美菜ちゃんがボクを虐めてくるよぉ～～～！！！！！ふえぇぇぇん……」

そしてそれを聞いた僕は楼タンを庇うようにして美菜の前に立った。

「美菜……だめじゃあないか……こんなちっちゃい女の子を泣かしちゃあいけないよ？見なさい……こんなに怖がっているじゃあないか……」

「ぷるぷる、ぷるぷる」

あぁ……楼タンが僕の背中でぷるぷるしてる……ぷっちんプリンプレイ（？）をぜひ所望する……（／／／）

「いや、だから男よね？ソイツ？（汗）」

「男で何が悪いっ！！！かぁいければそれで全てよし！！！そんな些細な障害僕が打ち破ってみせるっ！！！
何人たりとも僕の楼タンを汚す奴は許さないっ！！！」
「あ……直ちゃん……（／／／）」
「フフフ、楼タン」
「直ちゃん（／／／）」
「楼タン（／／／）」
「直ちゃん（／／／）」
「楼タン（／／／）」
「直ちゃん（／／／）」
「楼タン（／／／）」
「何だ……コイツら気持ち悪っ……（汗）」

「あぁ！！！だめだっ！！！もう我慢できない！！！！！楼タン！！！！」
我慢できなくなった僕はいきなり楼タンを押し倒した。
「あ……直…ちゃん？ど、どうして……（／／／）」
「……楼タン、怖いかい……？けどね……今から行為をしようとしている僕も怖いんだ……ほぉら、こ・こ、触ってごらんよ……」
「あ……ぴくぴくしてる……直ちゃんも怖いんだね……（／／／）」
「っ……そうさ……だから、ね？一緒に気持ち良くなろう、楼タン……（／／／）」
「う、うん……直ちゃんがボクの身体で気持ち良くなってくれるなら……いいよ（／／／）」
「っ、楼ターーーーン！！！！！」

「な、直ちゃーーーーーん！！！！！」

「やめなさいっ！！！見ていて鳥肌立ってきたわ！！！！！」
バキッポカッ
「ぎゃう！！！しびれるぅ！！！だがそれがいぃ！！！！！！！」
「やぁん！！！いたいぃぃぃ～～～！！！」

## ブルマがいっぱい

「やっぱりブルマはいいね。あのお肉の食い込みが何とも……あぁ、素晴らしいの一言に尽きる……」
現在、僕の目の前で我がクラスの女生徒諸君が肢体という肢体……主にオッパイを揺らせながらバスケットボールを楽しんでいる。僕は僕でこの体育の授業を風邪という名目で見学している。な……ぜ？そんなの決まっているじゃあないか、ブルマを身に纏った美しき女生徒を視姦するために決まっている……あぁ、やっぱりブルマは最高だね。むしろ僕が彼女らの体操服……いや、ブルマになりたいね、ムッハー。
「ヘイ！由美ちゃん！パス！パス！」
「うん！」
おっぱい♪プルプル♪おっぱい♪プルプル♪
「か、香苗ちゃん！？ご、ゴール下！！！ゴール下！！！」
「！？しまっ……！！！」
ブルマがいっぱい♪ブルマがいっぱい♪ハミパンサイコー♪ハミパンサイコー♪
「えいっ！！！」
パス……それはシュートが決まった瞬間だった！！！
「ナイシュー♪」
「ナイ……！？」
ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！
「ナイスぶるまぁあああああああああーーーーーーーーーーー！！！！！！！」
「ひっ！？（汗）」
僕はこの気持ちを抑え切れなかった……そして僕は彼女らのブルマをこの手で掴み……

「やめなさいっ！！！この変質者！！！」
バキッメキッグチャリッ！！！！！
「ブルマサイコーーーーー！！！！！！！！！！！！！」
……とる前に美菜に殴られた。やっぱり美菜の局部への蹴りもサイコーだった。

「……なるほど、放置プレイと束縛プレイの二重プレイときたか、美菜」
美菜に死ぬほど殴られた後、僕は縄で縛られて体育館の隅っこの方で放置プレイを強要された。
「こんな……こんな二重プレイを強要されたら……僕はすぐに達してしまうではないか……ん、ふ……ぷ…ぷぴぴぴぴ……（／／／）」
「ひっ……な、何なのこの人……気持ち悪い……（汗）」
そしてブルマの天使達は変なものをみるような目で僕を見るのだ……や、やめてくれ……そんな視姦プレイ最高じゃないか……ぼ、僕の汚れをもっと見てくれ……ブルマの天使達……ん、んっはぁふ（／／／）
「あの……？」
「ハァハァ……？ん……？」
そんな中、僕に声を掛けて来るブルマの天使がいた。そしてその天使は見覚えのある顔だった。
「直人さん……今日は体育見学なんですね？お体大丈夫ですか……？」
「やぁ……水鳥（みどり）ちゃん……きょうも一段とかわいいね、オッパイ（／／／）」

「……～～～っ（／／／）あ、や……あ、ありがとうございまふ……（／／／）」
ウフフ……その初々しい反応……実にかぁいいなぁ……そうそう、紹介しておこう。今僕に声を掛けてきたブルマの天使ちゃんは日向水鳥（ひなたみどり）ちゃんだ。僕より大分身長は低く、茶色のショートヘアーでその誰に対しても控えめな態度は学園内の男子生徒にも大いに人気がある。ちなみに僕や美菜の２つ下の後輩に当たる子だ。なぜ僕が水鳥ちゃんと知り合いかというと妹のまちると同級生でかつ親友同士であるためごく自然に水鳥ちゃんがまちるの兄である僕によく声を掛けてきてくれるのだ……あぁ、お持ち帰りしたい……（／／／）
「そ、それより！あ、あんまり無理しないで下さいね……？ま、まちるちゃん心配してますから……」
……うーむ、心配かけていたのか……風邪は嘘なので少し罪悪感が……ど、どうしよう……
「なぁ……水鳥ちゃん？」
「は、はぇ！？な、なんですかっ！？（／／／）」
「僕はどうすればいいんだろう……？」
「は、はぇ？（／／／）」
「僕は……僕はなんてことを……くぅっ！」
思わず涙が出てきた。こんな……こんな最低な兄である僕にまちるは満足できてきるのであろうか？
「お、お兄さん……？」
「うぁあああ……僕は……僕は……」
「……お兄さん」
ピタ……
冷たくて柔らかい感触が僕の頬で感じ取れた……それは水鳥ちゃんの小さな小さな手……
「水、鳥……ちゃん」
「……」

水鳥ちゃんは何も言わず柔らかな笑顔を僕に向けていた。
それはどんな言葉で返されるよりも温かな……そう、そんな気持ちでいっぱいにさせるような何か……
「……水鳥ちゃん」
「わっ……えっ？えっ？お、お兄さん？」
そして思わず僕は彼女を抱きしめていた……そして耳元で囁いた。

「僕は……満足させてあげているのだろうか？」
「は、はぃいっ！？（／／／）あ、あわわわわ……そ、それはっ！！！」
「僕は……いつも不安で不安で仕方ないんだ……いつか愛想を尽かされて僕の元から離れていかないか……すごく不安なんだ」
まちるにとって僕はどうしようもない兄かもしれない……でも、それでも僕は……
「そ、そんなわけ……無いですっ！！！（／／／）」
「？そうなのか……じゃあ、どうすればいいと思う？」
「あ……そのぅ……」
「……？」
彼女の目線は下の方へと向かう……なるほど、そういうことか……
「ちょっと……恥ずかしいから少しの間、目を瞑っててくれないか……？」
「あ……ハイ（／／／）」
そして僕は自分のズボンに手を掛け……そして下ろした。
「……本当にこれでいいのかい？」
「あ……う（／／／）」

頬を染めた水鳥ちゃんはまだ何か物足りない目をしていたような気がする……そうか……仕方ない、これも我が妹のためだ……すごく恥ずかしいが……頑張ろう。
そして覚悟を決めた僕はトランクスにも手を掛け……

「体育館でしかも女子の居る前でいきなりストリップショーおっ始めてんじゃあないわよっ！！！！！この犯罪者っ！！！いっぺん死ねっ！！！！（／／／）」
バキッメキッゴキッ
「ぐぁあああああーーーーー気持ちE－－－！！！！！あんたの蹴りで萌死ねますぅーーーーー！！！！！」
「お、お兄さんっ！？（汗）」

「…！水鳥、兄、様子、どう、だった？」
「……えっと、その……お、おっきかったよ（／／／）」
「……？」

## 君に捧げる

「あぁ、ここはね、この値をこの式に代入して後はこの二次方程式を解の公式で解けば求まるよ」
「あ～…そっかぁ～～……藤本君サンキュー♪」
数学の授業後、クラスのかぁい子ちゃんが僕に数学のある問題を教えて欲しいと言われたので丁重に解法を伝授した。まぁ、数学の教師はやたら厳しい人なので僕に尋ねて来たのだろう。
「いやいや……お礼なんてそんな……ただ、僕は君に伝えたい事があるんだ……」
「？なぁに？」
「あぁ……僕のこの熱いハート（モノ）を君の穴に代入したい……なーんてね、ウフフ（／／／）」
「じゃあね～～～♪藤本君♪」
彼女は去っていった。あはは、照れちゃって……ウフフ（／／／）
「……何、ニヤニヤしてんのよ……あんた……（汗）」
美菜が突然声を掛けてきた。
「やぁ、貧乳。どうしたい？」
「誰が貧乳よっ！！！」
バキッ
例のごとくまた美菜に殴られた、しかしなんだか攻撃力がダウンしたような気がする。…はて？アレかな？
「生理は酷いのかい？」
バキッ
また殴られた。理不尽だ。横暴だ。でも気持ちいいから気にしない。むしろ嬉しい。あぁ、快感。
「美菜……別に貧乳の事は気にしなくていいよ？むしろ掴みやすいほうがいいしね。…あ、でもそれだとパイ○リはできないか、ウフフ残念（／／／）」

バキッ
真顔で殴られた。
「ところで用件はなんだい？美菜？」
「茜さんがあんたを呼んでるわよ、音楽室に来てだってさ」
「美菜……そこはヒロインとして『よ、用がなかったら声をかけちゃだめなの？（／／／）』と涙目でかわいらしく舌を出しながら僕に御奉仕……」
「じゃあ、確かに伝えたわよ」
彼女は去っていった。

僕達の学校の音楽室は旧校舎３Ｆ東側の１番端に存在する。
僕が音楽室に近づいていくとピアノの美しき旋律が聞こえてくる。
ポロン……ポロン
「茜さん、今日もやってるね……」
……いや茜さんはまだヤッテない。処女…のはず。今の僕の台詞はピアノをやってるという意味でヨロシク。
しかし、茜さんの弾くピアノの旋律はいつ聴いても不思議だな……うまい……のは確かなんだけど、なんていうかな……？こう……聞いているとまるで異世界に放り込まれていくような……静かなんだけどなんだか力強くて人をグイグイ不思議ワールドへ送っていく……そんな感覚になるんだ。
ガララ……
ポロン……ポロロ……ロロン
「……」
僕が音楽室に入ると案の定、茜さんはピアノの前で目を閉じて美しき旋律を描いていた。彼女の作る『世界』

に思わず僕は聞き入っていた。……細くて簡単に壊れそうな指先、肌白い顔、あまり血色の良くない唇、肩先ぐらいまで伸びている短い黒髪、まるで栄養失調のように細い身体、それは今、彼女が奏でているどこか切なくて悲しき曲にマッチしていて……でも、茜さんがまるで僕の前から消えていくような……そんな不思議で奇妙な感覚に囚われた。これも彼女が作る『世界』の力なのだろう。

「……」

ポロン……ポロン……

……

そして、彼女の指先が止まった。曲が終わったのだろう。

「……やぁ、こんにちは直人君。私の演奏はどうだったい？」

彼女……藤崎茜（ふじさきあかね）さんが僕に曲の感想を求めた。ちなみに彼女は僕と美菜の同級生だが違うクラスにいる。一年前は同じクラスだったんだけどね。

「とても……とても悲しい……いや、儚い曲ですね」

僕は本音を言った。

「そうかい、……うんうん、とても参考になったよ、ありがとう、直人君」

僕の感想を聞くと茜さんは何やら小さなノートに筆記し始めた。茜さんは新曲が出来上がると放課後に僕を音楽室に呼び出して曲を演奏して僕に感想を尋ねる。まぁ、今日みたいに既に曲を演奏し始めていることもあるけどね。

「……茜さん、前からすごく気になっていたんですけどそのノートって中身何書いているんですか？」

「……君は乙女の秘密を何だと思ってるんだい？」

……そんな真顔で言われても全然興奮しない。せめて羞恥の感情ぐらい顔に出して欲しいものだ。

「汚すためにあると思っています」

「君は最低だね、フフッ」

最低だとか言いながら笑いながら適当に対応する茜さん。せめて頬

を染めて僕に食いかかってきて欲しいものだ。でも、そんな簡単に僕も負けていられない。（美菜）『何の勝負よ……（汗）』
「えぇ、最低ですよ僕は。毎日、脳内で女の子達を陵辱していますよ……もちろん貴方も……ね？（／／／）」
「ふーん……腐ってるね、君の脳は、フフッ」
「……（汗）」
な、なぜだ……なぜ、そんな爽やかな笑顔で笑っていられるんだ……茜さん。ここまで言われて羞恥の感情が沸かないなんて……も、もうこれは直接やっちゃうしかないのか？？？（汗）
「……茜さん」
「なんだい？」
「いただきますっ！！！」
そして僕は彼女に飛び掛った。全ては押し倒して……羞恥という名の甘い誘惑で屈服させるため。

ーーーけれど僕はうっかり失念していた。
彼女が柔道で黒帯（初段～五段）を持っているということを。

ーーードスンッ……
「いったぁーーーーでも、苦痛が快感へと昇華するッ！！！（／／／）」
「ほう、それは面白い技だね。今度、ぜひ私にも教えてくれるかな

？」
それはそれはにっこりと微笑んで僕を上から見下ろす茜さん。あぁ、怖いな。けれど同時に心地よい視線。あぁ……この屈服プレイなんか……いぃ（／／／）
「そりゃあもう……手取り足取り尻取り胸取りなんなりと教えますよ、茜さん」
「うん、頼むよ♪」
そして決め手は腕ひしぎ十字固めだった。
ちょっと茜さんの感触を楽しめてちょっぴり幸せ気分を堪能できた。

「ん…？もう、こんな時間か？いいのかい？直人君？妹さんや美菜さんが校門で待っているぞ？」
音楽室からは校門の様子を見ることができる。……まちるは落ち着いた様子で待っているが……美菜は……鬼のような形相でこちら、音楽室の方を睨みながら立っている。
「あぁ……そうですね、じゃあ今日はこの辺で」
「あぁ、またね、直人君」
「……あぁ、ちょっと1つ聞きそびれていましたがいいですか？茜さん」
「なんだい？」
「曲の題名ってなんですか？」
「あぁ、言い忘れていたね……『君に捧げる』だよ」
……茜さんにしてはちょっぴりエロかった。

## 置き手紙と魔法少女

「「「……」」」

「すー…す…ん……はぁ……はぁ……はぁ、だ、ダメですよぉ……そんなところに指入れちゃ…あっ」

……ふむ、とりあえず今の状況を説明しようか。まず、音楽室で茜さんと別れた僕は校門で待つ美菜とまちるの元へ行き、一緒に下校した。その際、美菜の蹴りが飛んできたのは言うまでもないが。もちろんすごく気持ち良かったです、ハイ。と、まぁ我が家に着いた僕、美菜、まちるの3人はとりあえず夕食の準備のためにキッチンに通じるリビングに入ったわけです。そしてそのリビングのソファーに☆以下略☆

「コラコラ、1番大事なところを以下略ってんじゃないわよ」

「ほぉ……美菜、僕のナカを読めるようになったんだね？フフフ……なんだか気恥ずかしいような、嬉しいような……そうか、美菜、君のナカを覗けるようになるのもそう先じゃあないのかもしれないね、ウフフ」

「……」

……本気で引かれた。僕ちょっぴりさみしい。刺激的なあの蹴り……もう1度入れてくれないのかい？

「……兄、コレ、見て」

まちるはテーブルに置いてあった1枚の紙を僕に手渡した。

「ん？……コレは」

『やぁ、愛する僕のミルクと母さんの愛液から生まれた息子、娘よ。

いきなり話が変わるが直人君よ？１つ聞いてもいいかい？車輪の灯花ちゃんルートがどぉしても攻略できず、ＢＡＤＥＮＤになってしまうんだ。一体どうすりゃいいんだい？ところで灯花ちゃんかぁいいよね？父さんあの『ぶっこぉすぞ！』ていう台詞に萌えちゃってね。今でもあの台詞を思い浮かべる度に勃起しちゃうんだ。まちるもいつか父さんや直人を罵ってくれると嬉しいよね？『お父様！ぶ、ぶっこぉすんだからね！！！（／／／）』とか言われた日にゃあ……父さん、我慢できないね。さて、いきなりだが父さん女の子を誘か…預かったんだ。その子海外で拾っ…預かってね。かぁいいだろう？まぁ、仲良くしてやってよ。まぁ、そういうことで父さんと母さんはしばらくお家を空けますんでヨロシクネ♪Ｐ．Ｓ．ところで直人。美菜ちゃんのサイズとパンティの色、こっそり聞いておいてよ』

「……ねぇ、色々突っ込みたいことがあるんだけど……（汗）」

「ん？突っ込むのは僕の専売特許だろう？」

「……」

さっきより引かれた。

「ところで美菜。サイズとパンティの色教えてくれないかい？」

バキッ

「はぁ……で？どうすんのよ？そこで寝ている魔法少女のコスプレした女の子……」

「僕が責任持って飼うよ」

バキッ

「ほんと、蛙の子は蛙ね……いきなり手紙の前置きがエロゲーの話なんて痛すぎるわね、あの人。しかも自分の娘に対してセクハラ

まがいなこと書いてるし……しかも前置きと要点の割合が明らかにおかしいでしょ、この手紙。しかも最後には私へのセクハラも書いてるしね。あのエロオヤジ今度会ったら一発ぶん殴ってやろうかしら」
「美菜は突っ込み上手だね。本当は逆じゃないといけないのに……」
バキッ
そろそろエレクトしてしまいそうだ。

「さて、今日は何にしようかな？」
夕食作りのためにエプロンをつけた僕はとりあえず冷蔵庫を漁った。今日は僕が夕食当番だ。というより、母さんが不在なので必然的にこれから毎日、僕が作らないといけない。なぜなら美菜もまちるも料理はからっきしダメだからだ。
「ふむ……今日は椎茸の炊き込みご飯と豆腐の味噌汁……鮭、ひじきってところでいいだろう」
とりあえず、ある程度準備した僕は美菜に声をかける。
「美菜、魔法少女の様子はどうだい？」
「んー？……ソファーでぐっすり眠ってるわよ」
「ふむ……」
しかし……まさか、あの夢が現実になるとわね。しかも女の子の容姿もあの夢と同じだ。何か強烈な運命を感じるね。
「ウフ、フフフ……」
トントントントン……
「ほ、包丁持ちながら笑ってんじゃないわよ……ぶ、不気味よアンタ（汗）」

「……兄」
「ん？なんだい？まちる？」
振り向くとまちるが立っていた。心なしか少し顔が赤い。
「……お腹、すいた」
「……ちょっと待っててね」

とりあえずそれが、僕と彼女……魔法少女との最初の出会いだった。

## 危険な香りがします

「さて……最初に何から聞こうかな……？とりあえず、君の履いているおぱんちゅの柄は何かな？」
「はむはむ……森のクマさんです……もぐもぐ……」
「ほぅ……なるほど、王道だねそれは。では……身体のサイズは？」
バキッ
そして僕は美菜に殴られた。痛かったもとい気持ちよかった。
「もぐもぐ…えっと、ですねぇ……上から、●●、■■、▲▲です……もぐもぐ……」
「いや……あんたも素直に答えてんじゃないわよ……（汗）」
「いいじゃあないか、美菜。僕は妥協する子（＝抵抗しない子）は大好物だよ。あっ、でも少しは妥協しない子（＝抵抗してくれる子）も大好物だなぁ……ちょっぴり興奮するしね、ウフ、ウフフ……」
「……なんでかしら？なんかすんごい最低な事言ってるような気がするのはあたしだけかしら？」
とりあえず状況を説明しておこう。あれから、ソファーで眠っていた魔法少女（？）は僕の作った夕食の匂いに釣られてか、起きた。そしてとりあえず現在、僕と美菜とまちると謎の魔法少女（？）で夕食を食べている
。……さっきから、魔法少女（？）の箸の動きが止まらない。よっぽどお腹が空いていたんだろう。
「？兄、どう、したの？さっき、から、お箸、止まって、る……」
どこか心配した様子で僕に聞くまちる。
「あぁ、いや、お兄ちゃんもうお腹いっぱいおっぱいなんだよ、ウフフご馳走様（／／／）」
「…そう？」

本当にお腹いっぱいだった。彼女のおっぱいを眺めるだけでご飯3杯はいけちゃうね。
「ねぇ、ここは殴るべきなのかしら？ねぇ？」
「ぜひ…きつめにお願いしますぅ……（／／／）」
バキッ

「ご馳走様でした♪」
謎の魔法少女（？）は食事を終えて満足そうな顔を浮かべた。僕もおっぱいご馳走様でした。
「とりあえず、聞くことがあるんじゃないの？直人」
美菜が僕に言った。
「あぁ…そうだね……とりあえず、君、僕と一緒にお風呂に入らないかい？」
バキッドスッメキッ
「きゃう！！！」
「誰がそんな事聞けって言ったのよ！！！この変態っ！！！ていうか気持ち悪い奇声上げてんじゃないわよっ！！！」
「い、いや……と、とりあえず彼女と身体のお付き合いから始めようかと……」
「あんたが言うとものすごく犯罪っぽいから止めなさいっ！！！！！」
バキッ
「きゃうん！！！」
「あ、あのぅ……（汗）」
僕らのやり取りを聞いていた謎の魔法少女は控えめな様子で声を掛けてきた。

「とりあえず、あなた誰？」
いきなり彼女に問う美菜。もう少し優しく言ってあげたらどうだい……？美菜……
「えっと……私、魔法の国ミスリエルから来ました、魔法少女ルルーナ・バチカン・チュパカタラナアゲイントリコラステイン・アークラインです。よろしくお願いしますね♪あっ、でも長いのでルルーって呼んでくださいね♪」
「「……」」
「あ、あれ？お2人ともどうなされたのですか？（汗）」
美菜は彼女の肩を軽く叩き……
「え？え？え？あ、あのぅ？」
そして微笑み……
「とりあえず、病院行こうね♪」

「だだだだだからぁ～～～！！！！！私、本当に魔法少女なんですってぇ～～～！！！！！信じてくださいいいいいいいいい～～～～～！！！！！（泣）」
「ねぇ、直人。今の時間帯、精神病院開いているかしら？」
美菜は僕に聞く。顔が真顔だった。
「まぁまぁ……いいじゃあないか、美菜」
「っ！し、信じてくれるんですね！？直人さん！！！」
「夢見る魔法少女……素敵じゃあないか……ウフフ……」
「全然信じてないですっ！？（泣）」
……ん？
「あれ？僕、君に名前教えたっけ？」
「……！え、えっとさっきから何度も会話の中で聞こえてくるので

そうじゃないかと……」
「……そうか。でもまぁ、とりあえず自己紹介しておこうか。僕は藤本直人、大好きなものはオッパイとおぱんちゅで趣味はおぱんちゅ鑑賞と目の前にいる女の子の陵辱シーンを脳内でイメージすることです……ちなみに今、君の陵辱シーンを脳内でイメージ中です、結構エロイ身体ですね、ウフフ……（／／／）」
「あ、アハハハ……（汗）」
彼女は若干引いていた。
「はぁ……気にしなくてもいいわよ。コイツの変態っぷりは今に始まったことじゃないし。とりあえず、蹴っときゃ少しの間黙るから。まぁ、私は七瀬美菜。よろしくね、ルルー」
「はい♪よろしくです♪美菜さん♪」
「おっと、もう一人紹介しないとね。そこのソファーで座っているのが僕の妹、まちるだよ、ほら、まちる、未来のお姉ちゃんに挨拶しなさい」
「な、何かものすごく誤解を受けそうな紹介ですね……ソレ（汗）」
「……」
そしてまちるはルルーの方を一瞬見……
「……ぷいっ」
拗ねた。
「あっははは、もぅ♪拗ねちゃってぇ～～～かぁいいなぁ……でも大丈夫！僕は一人の女の子だけに愛情注がないから！ちゃんとまちるにも注ぐからね！」
「ホント……？」
「あぁ！ホントさ！」
「……うれしい」
「僕もうれしい！」
……
「美菜さぁ～～～ん～～～どうすればいいですかぁ？（泣）」

「……とりあえず蹴っときゃいいんじゃないの？」

「で、話を戻すがとりあえず君は魔法少女（自称）なんだね？」

「自称じゃないです！！！れっきとした魔法少女ですっ！！！（泣）」

「いや、勘違いしないでくれ。僕は別に魔法少女の事を否定しているわけでも肯定しているわけでもないんだ」

「なんだか曖昧ですね………（汗）」

「じゃあ、その証拠を見せなさいよ」

美菜が言う、それはいいアイデアだ。

「そうだね、じゃあとりあえずおぱんちゅを魔法の力でいっぱい出してくれ、あっ、使用済みのね」

「そんなしょうもないことじゃなくてその魔法とやらの力でお金とか出せる？ルルー」

「美菜は現実的だなぁ………夢がないね、夢が」

「う、うるさいわねっ！！！文句ある！？」

「えっと、お金ですか？それくらいなら出せますけど………えいっ！」

ルルーは少しビビリ気味に言う。そして指を鳴らし………

「………嘘でしょ？」

何も無かったテーブルの上にはいつの間にかお札の山が出来ていた。

「ハァハァ……ど、どうですか………？」

彼女は少し疲れているようだ。そして僕は興奮せずにはいられなった。

「ふぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああああああああーーーーーーー

ーーんたじぃぃぃぃぃぃぃぃぃいいいいいいいいいいいい！
！！！！！！！！バァアアアアアアアアア！！！！！！！！！！
！」
「ひっ！？」
「うるさい！！！この変態！！！」
バキッ
「あふっ！！！」
「………あ、あんたこのお金……どっから出したの……？（汗）」
「だから〜〜〜魔法ですってばぁ〜〜〜〜〜いい加減信じてくださいよぉ〜〜〜〜〜！！！！！（泣）」
「………ん？よく見るとコレ………子供銀行券じゃないの！！！！！」
「うぅ……すみません、私、今、魔法の力弱くなってるんです………そのせいで中途半端な魔法に…（泣）」
「えっと……よくわかんないけど、私の夢を返して………（泣）」
「うぅ……ごめんなさい（泣）」

「で？あんた直人（コイツ）のお父さんとどこで知り合ったの？」
そういえば……彼女はどうして僕の家に居たんだろう。
「……え？えっと……全然知りませんけど………」
「「…………」」
僕は美菜と顔を見合わせた。………なんだかすごく嫌な予感がする。
「えっと………じゃあ、あんたはなんでここに来たの？」
「え……？あの……お外が気持ちよかったので私の家の近所の公園のベンチでお昼寝して……それで気がついたらここにいたんですけど………」

「「……」」
再度、僕は美菜と顔を見合わせた。……なんかこれ以上聞いたらやばい気がする……
「ま、まぁ……そうなの、あは、あははは……」
「？はぁ……」
……わが父よ、次帰ってくるまでに世界のどこかで捕まりませんように……

「はぁ……とりあえず、私は帰るわよ。もう疲れたし」
美菜の両親も現在家にはいない。外国で仕事をしているらしい。なので家では1人だ。いや、たまに美菜の１０歳年上のお姉さんが帰ってくるらしいが……僕は1度も会ったことが無い。
「あれ？もう帰るのかい？美菜？」
「はぁ？なんでよ」
「今から皆でお風呂に入ろうとしていたのに……ハーレムごっこ……したい、な（／／／）」
にっこり
「氏ね」
ドガスッ！！！！！
「きゃいん！！！」

## 牛は願いから鼻を通す（前書き）

今回のサブタイトルはことわざです。

## 牛は願いから鼻を通す

「……む、ぬっ……あぁ、もう朝か……」
寝起きのせいかなぜか身体の節々が痛い……
「……ん？あれ？なんで僕はこんなところで寝ているんだ？」
周りを見るとそこは我が家の庭だった。……それに昨日の夜の記憶がなんだか朧気だ……まぁ、いいか。
「やぁ、ピー子おはよう。今日も素敵な朝だね」
とりあえずリビングに上がり、我が家の愛鳥（ペット）、ピー子に朝の挨拶をした。
「……」
普通に無視された。
「ふぁあ……」
そして、なぜか我が家の2階からまだ眠たそうな顔をした美菜が降りてきた。きっと、また僕の部屋の窓から入ってきたのだろう。もう昔からの家族ぐるみの付き合いなので慣れっこだ。
「やぁ、おはよう、美菜」
「……朝ごはん」
せめて挨拶しましょう美菜さん。
「……あら、ピー子、おはよう」
「ピー！ピピー！ピー！！！」
……放置プレイ最高です、はぁはぁ。

「んぐんぐ……ところでどうすんのよあの子」
いつもの3人で朝食を摂っていると美菜がそんなこと尋ねてきた。

「あ……の……子……？美菜、僕は今でも真剣なんだ。そんな……
『君とはほんの遊びだったんだ……ごめんね』みたいなことをする男だと思っているのかい？悲しいなぁ……」
「何の話をしてんのよ……（汗）昨日、ここにいた魔法少女（自称）の子のことよ。２階のあんたの部屋でぐっすり寝てたからまだ寝かせてるけど……あんたこれからどうする気？」
「……」
スタスタ……バキッ！
「イタッじゃなくて気持ちいぃ！み、美菜？なんでこんな奉仕プレイをするんだい？ありがとうございます」
「うるさい、今どこに行こうとしてたのよ」
「いや……制服を取りに部屋に行こうと」
「下心丸見えなのよ、ていうか行ったらコロス」
「イッテも？」
バキッ
「うん、コロス♪」
「……ごめんなさい」
うふふ、殴られちった♪
「……兄、美菜姉、そろそろ、時間……」
「……まぁ、その話は保留ってことで……じゃあ僕は家の前で待ってるよ」
「……そうね」

いつもどうり家の前で美菜とまちるを待つ。あぁ、今日もいい天気だな……
「あら？直人君？今日も早いわね。おはよう」

友恵さんに声を掛けられた。家の前でほうきで掃除していた。
「おはようございます。今日も精が出ますね、あっ、もちろん性的な意味で」
「ウフフ、ありがとう。でも毎日やってることだしね」
しまった、前半の方しか耳に入ってないコノヒト。仕方ない……少々、強引だが……
「へぇ、毎日ヤッテるんですか？疲れませんか？身体？」
「いやあねぇ……私、そんなまだ若いのに……そんなオバサンっぽく見えるかしら？ねぇ？な・お・と・君？」
……しまった、何か変な地雷踏んだようだ。ここは褒めなくては。
「いやいやそんな……まだまだお若いじゃないですか……３０代の女性とは思えないほどの体つき……思わず舌で味わいたくなりますね、ペロリ……とね」
「私まだ２０代なんだけどね♪」

バキッドガッガスッメキッ

そしていつもの通り3人で学校に登校し、まちると別れ、美菜と我がクラスに到着した。
「あっ♪直ちゃん♪美菜ちゃん♪おっは～♪」
そして、我が愛人、楼タンが声を掛けてきた。
「おはよう、楼タン。今日もおいしそうだね、太もも」

「やぁん♪直ちゃんのメガエッチぃ～～～～♪（／／／）」
「……あんた何その格好……（汗）」
今日の楼タンの格好はチャイナ娘だった。素晴らしい……ちらりと見える生足が。
「えへへ……♪今日は大胆なの選んできたのぉ～～～どう？どう？似合う？似合うぅ？（／／／）」
「キモイ」
「いいじゃあないか……かわいいよ、楼タン」
「やぁぁん♪ちょ～うれしぃ～～～お礼にボクを使ってどんなプレイしてもいいよ♪直ちゃん♪」
「ふむ……では『人差し指プレイ』を試してみるとするか」
「え？え？ソレって……いやん♪」
「本当にいろんな意味で大丈夫なの……？この小説？（汗）」
僕は右手の人差し指を楼タンのちょうどくるぶしあたり置き……そこからゆっくり上へ人差し指を焦らすように動かしていった……
……あぁ、もちろん見える足の部分だけだからそこはよろしく。
「は、はうぅぅぅぅぅう……ん（／／／）き、気持ちいいよぉ……直ちゃん、もっとやってぇ……（／／／）」
「あぁ……楼タン……君の桃色吐息はいつ聞いても素敵だね……
……もっと…もっと僕に聞かせておくれ、はぁぁぁ……いっ、いい……ね、うふふ、うふ、ウフフ（／／／）」
「な、なんかいちゃつき出した……キモッ（汗）」

（直人が桃色世界へ旅立ったのでここから視点は美菜に切り替わります）
「やぁ、僕の美菜、おはよう」

教室の中心で悶えている変態馬鹿2人を放置して私は自分に席に座ると……またややこしい奴が出てきた……

「？どうしたんだい？僕の美菜？今日は顔が優れないね？僕の美菜？…ハッ！また、あいつだね！？藤本の奴が何かしたんだね！？僕の美菜！？いい加減奴とは別れるんだ！！！僕の美菜！！！そして僕と結婚しよう！！！僕の美…ぶぎゃぷ！！！」

とりあえずウザイので殴っておいた。…あっ、めんどくさいけど一応コレが初登場だし紹介しといてやるか……今、私の目の前で花束（？）を持ち、タキシードを着て悶えてうずくまっている野郎は同級生の五十嵐幸太郎（いがらしこうたろう）だ、以上。

「僕の美菜！！！なんで僕を殴るんだっ！！！気持ち良かった！！！もっとやってくれ！！！僕の美菜！！」

そしてコイツも直人に負けず劣らず変態の塊だ。

「うるさい！！！さっきから『僕の美菜』って連呼してんじゃないわよ！！！何か周りに誤解されちゃったらどうするのよ！！！それになんであんな変態（なおと）野郎と付き合わなくちゃいけないのよ！！！」

「ひどいじゃないか！！！僕の美菜！！！藤本にはあんなに殴るのに！！！僕にはあまりしてくれないじゃないかっ！！！」

そこで切れるのかこの男！！！

「あぁ～、もぉ！うるさい！少し黙れっ！！！」

バキッドスッメキッ

「サイコーォォォォオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！！」

バタ……

奴はその場で大の字に倒れ、ようやく静寂が訪れる……さて、最初の授業が始まるまで寝とこうかしら。

## 賽は投げられた

あれから楼流タンとひとしきり戯れた後、いつもの担任による朝のHRルームが始まった。ちなみに僕のクラスの担任の世渡邦彦先生は来年で定年退職されるそうだ。因みにあだ名は親しみを込めて『よっぴー』と呼ばれている。親しみというよりも僕には悪意が込められているとしか思えない。

「おいっ！！！藤本直人！！！」

突然、怒号が教室に響いた。その声の主は僕の机の前で仁王立ちしていた……

「……？なんだい大きな声で……おや……？君は確か……五十嵐…幸太郎君だったね？僕に何の用だい？もしかしてラブレター……かい？すまない……僕には既に楼流タンという愛人がいるんだ……君の期待には添えられそうにも無い……ごめんね？」

ヒソヒソ

「（やだぁ～～～ひとりの男を巡って争奪戦？三角関係？キモーーイ！）」（女子A）

ヒソヒソ

「（俺達は今、愛に飢えた醜い漢共の修羅場を目の当たりにしている……）」（男子A）

「ちっ、違うわっ！？（汗）今日こそこの僕、五十嵐幸太郎が貴様に引導を渡してやる！！！」

「済まない……君の陰毛を渡されてもこの僕の心の奥に潜んだこのピュアな気持ちは覆らない……」

ヒソヒソ

「（お、男が男に陰毛を渡すって……何？コイツラ一体どういう関係なの！？ど、どこまでイッタのかしら……？）」（女子B）

ヒソヒソ

「（俺達は今、生々しい漢同士のカップリングを目の当たりにして

いる……）」（男子Ａ）
「い、引導だ！！！引導！！！（汗）誰が陰毛なんぞ渡すか！？」
「？じゃあ、僕に何の用だい？幸太郎君？」
「気安く僕の名前を呼ぶなっ！！！用件はただ１つ！！！僕の恋人（自称）、七瀬美菜と今すぐ別れろっ！」
……ピクッ
その時、僕の中で何かが切れた……
「な……に？それは聞き捨てならないな……美菜は僕の恋人（モノ）。悪いけれど君に渡すわけにはいかないな……幸太郎君」
「ほぉ……この僕の言う事が聞けないと？いいだろう……では、七瀬美菜を賭けて今から勝負といこうではないか……藤本直人ぉ！！！」
「あの……わしのＨＲ……」

『七瀬美菜争奪戦！！！愛の奴隷、藤本直人ＶＳ水の滴るいいＯＴＯＫＯ、五十嵐幸太郎！！！』

（美菜視点）
ざわざわ……ざわざわ……
「ちょっと……何よ、コレ……（汗）」
そして舞台はここ、家庭科室に移り、美菜が気付いたときには面白がって群がる野次馬、さらに審査員らしき人物、そしてクラスの顔

見知りの男2人が何やら向かい合って対峙していた。
『さぁさぁさぁ！！！！！いよいよ始まろうとしています！！！！！！『七瀬美菜争奪戦！！！愛の奴隷、藤本直人ＶＳ水の滴るいいＯＴＯＫＯ、五十嵐幸太郎！！！』第1回戦は……『料理対決』ですっ！！！男というものこれからの時代女に食わせてあげないといけない……そこで！まず、どちらが七瀬美菜に食わせてあげるだけの料理の技術があるのかっ……！？それを競い合いますっ！！！……あ、ちなみに私、本日司会・進行を勤めさせていただく町田風菜（まちだふうな）でございますっ！！！そして審査員には……ご本人、七瀬美菜はじめ、魔法少女ルルー！藤本まちる！美村友恵！日向水鳥！藤崎茜！の計6名に審査して頂きます！！！……ちなみに本日審査員として出席予定だった堂島楼流さんは『直ちゃん！こんなのひっどぉ～～～い！浮気者～！』と謎のメッセージを残したまま行方不明になりました。あしからず』

「って！？あんたら何してんのよ！？」
「あはは……それが私にも何がなんだがさっぱりでして……（汗）いつの間にかこんなところにいたんですよ……ね、ねぇ？まちるちゃん？（汗）」
「……うん」
水鳥ちゃんはどこかよそよそしくしていた。まちるは相変わらずね……周りの野次馬の熱気にビビッて居るのだろうか？
「だってだってだって～～～直人さんのお家にいてもすごくすっごく暇なんですよぉ～～～こんな面白そうなイベント逃すわけには行かないじゃないですか！！！」
「ルルー……あんたさっき司会が魔法少女って言ってたけど……

モロバレじゃない」
「？別にいいですよ～～～～♪別に私が魔法少女ってばれた所でどうにもなりませんから♪」
周りにはコスプレだと思われていると思うけどね……ていうか、普通にいきなり馴染み過ぎ（汗）
「うふふ、こんな面白いところ見逃せるわけ無いわ……ウフ、ウフフフフ……」
友恵さんは怪しい笑みを浮かべて笑っていた。不気味だ（汗）
「あれ？嘘……茜さんまで……（汗）」
「や、美菜さん、こんにちわ。偶々、家庭科室の前を通った時、面白そうな知り合いを見つけてね。寄ってみたら……こうなってしまったというわけだ」
……とりあえず。

「あの2人は死刑ね」

そして、今、戦いの火蓋は切って落とされようとしていたっ……！（つづく）

## ラブ・ハンターズ（仮）

『さぁ！始まりました！！！一回戦は『料理対決』！！！お題は『漢の料理』！！！さぁさぁさぁさぁ！！！！！ちゃっちゃと煮るなり焼くなり舐めるなりしちゃって下さい！！！私、町田風菜は腹ペコで死にそうです！！！』

お題を聞くなり、手際よく料理を始める直人と五十嵐君。……なんか手際が良すぎてあらゆる動作が機械的になっていて不気味だ……

「わ、わぁ～～～せ、先輩方すごいですぅ～～～」

「……兄、すごい」

私の右隣に座っているまちると水鳥ちゃんは目を輝かせながら感心して見物している……

「まぁ……直人（あいつ）は昔から料理だけは得意だったからね……料理『だけ』は」

他はダメダメだけど。

「ふふっ、まぁ美菜さんそう言ってやるな。ああ見えてもあの子は普段何事に対しても本気になってるんだよ。ただ、その本気になっている方向性に問題があるだけであの子自身の根っこの部分はとても純粋なんだ」

私の左隣に座っている茜さんは少し微笑みながら私に言う。いや…茜さん、それは褒めているようで微妙に貶している気が……この人の考えは読めないなぁ……色々と謎のお人だ。

「直人く～ん♪料理クソまずかったら、ち●ぽ削ぎ落としますよ～～～♪」

笑顔でこの人（友恵さん）はとんでもない事を言うな……（汗）

「はぁ～～～～い♪」

いや、あんたも笑顔で返してんじゃないわよ。

そして2人の料理は無事（？）完成し、試食タイム。まずは直人からだ。直人が作った漢の料理とは……

「……」

「？おや？どうしたんだい？美菜？食べないのかい？……はっ！そうか！僕を食べたいんだ…ぐべっ！」

……オムライスだった。しかも……ケチャップで大きく『愛』という文字が描かれていた……

「この料理のコンセプトは『愛』です……情熱の赤をモチーフとした中の『チキンライス』は『男』を意味し、そしてその『男』を柔らかく優しく包み込む『ふっくらとした卵』は『女』を意味し、後で考えるとそれはまるで男と女が行為に及んでいるようで僕、少し興奮しました、ウフッ（／／／）」

「いや、解説いらないし」

グリグリ

「残念……って、あぁ！！！僕の『愛』っ！！！（泣）」

そして何か目の前で嘆いている直人をスルーし、オムライスを口に運んだ……

「「「お、おいしいですっ！！！」」」

ルルー、まちる、水鳥ちゃんは感激していた。茜さんはうんうんと頷いており、友恵さんは『あらあら…残念』とか言いながらおいしそうに口に運んでいた。何が残念なんだろう……（汗）

次は五十嵐君の作った漢の料理は……

「……何コレ？他人丼？」
「あぁ！そうさ！！！僕の美菜！！！」
「……何故？」
「ふふふ……それはね、僕の美菜！親子丼は親の鶏肉と子の卵をかけて……」
「あー、何となくオチ見えたから少し黙ってて」
「ショッキングッ！！！」
何か目の前で『うぐぉぁぁぁ……』とか言いながらブリッジし始めた五十嵐君をとりあえずスルーして他人丼を口に運んだ……
「「「……」」」
……微妙だった。卵はパサパサ、牛肉は少し生っぽい、ご飯はしんが残っている。不味いとまでは言わないが何か色んなものが足りない。人間的にも。
「うぁぁぁぁーーーーー！！！！！何か言ってくれぇえええええーーーーー！！！！！もっと！もっと！もっとぉおおおおおーーーーー！！！！！オラにパワーをぉおおおおおーーーーー！！！！！」
「うるさい黙れ」

「と、いうわけで直人の勝利ね」
「ふふ……当然だね、僕がどこぞの馬の骨に負けるわけが無い。特に……美菜、君の為なら、ね……？ウフフ……（／／／）」
「く、くそぉぉぉ……」
直人と熱血君の反応は対照的だった。ていうか、あの直人の幸せそうなツラ何かムカつくわね……

『さぁ！次は2回戦を始めますっ！！！2回戦は『エロくない決め台詞しりとり』！！！甘い台詞で女の子達をメロメロにしちゃって下さい！！！』
2回戦の舞台は舞台は家庭科室から教室に移り、教室の中心で直人と五十嵐君は互いに睨み合っていた。
「な、なんだと……え、エロくない決め台詞だとっ……！なんと難解な……！」
「へへ……いきなり厄介なヤマがきやがったぜ……瀬戸際がポイントだなっ！！！」
直人は頭を抱えうずくまっており、五十嵐君はなぜか活き活きとした様子で興奮していた。コイツラの脳は腐ってるわね。ていうか、何？このイベント？
『では、藤本君から始めちゃってくださいー』
「ぬぅ……では、『ぼ、僕と一緒にスルメを食べないかい……？（／／／）』」
『アウトー！』
「な、なんだと！？」
『なんか『スルメ』が身体のある特定の部分を喩えているようで何か卑猥と感じたのでアウトです♪』
「ふ、深読みし過ぎじゃないかね！？それは！？そんな捉え方をする君の脳内がピンク色だよ！？」
珍しく直人がツッコミ役に回っている。なんか直人がまともに見えて気持ち悪い……（汗）ていうか、何？コレ？司会・進行の人が審査するの？私らいらないじゃない。
『では次は五十嵐君！藤本君がミスったので次は『く』から始めちゃってください～♪』
「脈絡も無しにいきなりウェイト高くなった！？く…く…！『くち

ゅくちゅにしてやんよ！！！』」
『アウトー！ていうか存在がアウトー』
「ば、馬鹿なっ！？」
『じゃあ、次は藤本君始めちゃってくださーい。次は『よ』からでーす』
「ふっ……『夜……君、寂しいんだね？』」
『アウトー！ていうか完全にセクハラー』
「な、なに！？」
「……」
……こうして。
いつまでも終わる気配の無いセクハラしりとりを続ける馬鹿二人をそのまま放置して私達は帰宅した。

次の日
朝学校に登校し、自分の席に着くと机の上にスルメで『アナタノコトガスキダカラ』という怪文を発見した。
さて、棺桶２つ用意しておくか。

## バイトと魔法少女

「バイトをしたいと思うんです！！！」
休日の朝食時、私、ルルーは直人さんと美菜さんとまちるさんの前でそんな提案を持ちかけた。
「な……に……？バ……イになりたい……と？」
「バ、バイトですよ！？バイト！？（汗）」
「おめでとう……」
直人さんにいきなり両手をぎゅっと握られました……
「あの……美菜さん？なんでこの人は泣いてるんでしょうか……？（汗）」
「ほっときなさい、そんな爬虫類」
「すでに美菜さんの中では直人さんは人間ですら無いんですね……（汗）」
「美菜さんのナカ……あぁ、なんと卑猥なひ・び・き（／／／）」
バキッ
直人さんの鳩尾に美菜さんの拳が叩き込まれた。あの……話、進まないんですけど……（汗）
「…で？なんで急にバイトなのよ？」
ボロボロになった直人さんの胸倉を掴みながら美菜さんは私に尋ねてきました。……なんで直人さんはちょっと嬉しそうなんでしょうか……？
「あの……えっと、非常に申し上げにくい事なんですけど……」
「なに？遠慮なく言いなさいよ」
「あの……私、無一文で……その、しかも居候の身ですよね？せめて、宿泊代と食事代ぐらいは自分で稼いで払いたいなと思いまして……？あれ？あのー……？なんでいきなりお2人はそんな微妙な顔をされているんですか？」
「いや、別にいいんじゃないか？僕はそんなの気にしないし……」

「まぁ、免罪符……みたいなものだしね……」
なぜかお2人はどこかよそよそしい感じがするんですが……？私の気のせいでしょうか？
「で、でもでも！！！やっぱりこういうのはきっちりしないといけないと思うんですっ！！！」
「ふ、ふむ……そこまでいうのなら……じゃあ、ルルー？僕のバイト先で働いてみないかな？」
「は、はい！！！ふ、不束者ですがどうぞよろしくお願いします！！！」
「なんかその返事はおかしいわよ、ルルー（汗）」

直人さんと美菜さんに案内されたお店は商店街の中にある小さな喫茶店でした。喫茶店の中は随分狭いですが少し薄暗くコーヒーのいい香りで満たされていてすごく落ち着く感じのお店です。喫茶店の中に入ると直人さんがオーナーらしき人に話しかけ、そして今に至ったわけです。
「は、はい！私、ルルーと申します！よ、よろしくお願いします！！！」
「というわけで店長、この子をバイトで雇ってあげてくれないかな？」
「ふむ……ルルーちゃんか。僕がこの店のオーナーの下村透（しもむらとおる）だよ。気軽に『テクニシャン透』って呼んでくれたまへ」
「え、えっと……かなり嫌なんですけど……（汗）」
「そうかい？じゃあ『ゴッドフィンガー透』でもいいよ」
根本的な問題が何も変わっていないような気がするんですけど……（汗）

「オーナー、馬鹿な事言ってないで早くどんな仕事するか教えてあげなさいよ」
「えぇ～？でも、コミュニケーションって結構重要なんだよぉ？こんな風にすると親近感が沸くんだよ？」
下村さんは美菜さんの元へ近づきそして……
「み、な、ちゅ、あぁん、んはぁ……（／／／）」
耳元で囁いていた！！！
「ひぃ！何すんのよ！！！気色悪い！！！」
「…と、いう風にね？呼び名だけで2人の間に深い絆が結ばれるようになるんだよ」
むしろ2人の間に大きな溝が出来たようなような気がするんですけど……（汗）
「じゃ、じゃあ『オーナー』で……？」
「だぁめ」
「えっと……『下村さん』で……？」
「だぁあめ」
「……『透さん』……？」
「だぁぁぁぁめぇぇぇぇぇぇ、うんやっぱおっけー」
う、うざ……（汗）

パリーン！パリーン！パリーン！

「あっ！また！あっ！あー！！！また割っちゃったですーーー！！！！！」
「ははっ、ルルーはあわてんぼうさんだなぁ……そんなところがかぁいいんだけどね（／／／）」
「僕もその意見には同意するよ、直人君。というわけでお皿の弁償代、直人君のお給料から引いとくからヨロシクね♪」
「ば、馬鹿な……」

# ウサ耳幼女と魔法少女（前書き）

みゅーん

## ウサ耳幼女と魔法少女

今日も刺激的な一日を送った僕は疲れを癒すために風呂場に向かった。
脱衣所に入り、服を脱ぎ、洗濯機の中に入れる。
「ふむ……やはり毛糸のパンティは最高だね、冬場は暖かいし、肌のフィット感がいいし、何より……」
ちなみに今日の僕が履いていたパンティは毛糸のパンティだが、一味違う。
パンティの中央にクマたん（♀）を毛糸で編みこんだその名も『毛糸のクマたんパンティ』だ。
ちなみに非売品だ。なぜ？自作だからだ。こう言っちゃあ自慢しているようでなんだが、自分でも結構かぁいい具合にクマたんを描けていると思う。
「今日もご苦労様……クマたん……ん、ちゅっ」
今日一日、お世話になったクマたんに僕は軽いキスをし、名残惜しかったが洗濯機の中に入れ、浴室に入った……が。
「……っ！？」
浴室に入った僕の目の前に信じられないような光景が広がっていた。

「みゅーん」
「……」
「みゅ、みゅーん」
「……」
……素っ裸の幼女が勃って…立っていた。

まず、容姿。
ふむ……顔は悪くない、というよりまだ幼気の残ったかわいらしい顔、だがそれがいい。
青い短髪のツインテール……な、なにぃ！？ウサ耳だとっ！？だがそれがいい。
おっぱいは小ブリ、ふっ、美菜と同類か、だがそれがいい。
そして、お肌は白くてつるっつる、色んなところもつるっつるだがそれがいい、というかブサ面以外だったらもう何でもいいです。抱いてもいいですか？
「……はっ！？」
いかん、またトリップしてしまった。
「だ、誰だね！？君は！？」
「みゅーん」
しかし、目の前のウサ耳幼女は僕の問いに答えようとせず、ただ僕の顔をじっと見つめながら不思議ワードを発するだけだった。
「こ、答えてくれないと……も、揉んじゃうぞ？（／／／）」
僕は手をワキワキさせながらウサ耳幼女に近づいていく……
「みゅーん」
「ほ、ほんとに揉んじゃうぞ！？う、嘘なんかじゃないんだからねっ！？ふ、ふんっ！」
いかん、ついツンデレ口調になってしまった。
「みゅーん」
「……」
モミモミ
「……や、やわらかいんだね？（／／／）」
「みゅーん」
しかし、オッパイを揉まれた彼女の様子は変わらなかった。
「ふっ！不潔！不潔よ！不潔ぅーーー！！！け、汚らわしいっ！汚らわしいっ！な、なんであなた自分のお、おっぱい揉まれて抵抗しないのよぉおおおおおーーーー！！！！！ま、まさか揉まれて悦

んでいるの！？なんてエッチな女っ！信じられないっ！なんて痴女っ！！！！！この犯罪者ーーーーーーーーーー！！！！！！！おまわりさーーーん！！！！！！おまわりさーーーーーーーーーー！！！！！！！」
「みゅーん？」
「犯罪者はお前だっ！！！！」
バキッ！！！！
「はぁん！！！！」
そして背後から何者かに殴打された僕の意識は深い闇に沈んでいった……

（※ルルー視点）
「い、一体、な、なんなんですかこの状況？（汗）」
お風呂場から美菜さんの怒声と直人さんのちょっと色気の入った悲鳴を聞きつけた私がお風呂場に入ってみると……なんか四つん這いになった素っ裸の直人さんの上に鬼のような形相をしている美菜さんがイスのように足を組んで腰掛けていた……お、おプレイ真っ最中？（汗）
「あっ……す、すみません……お、おじゃましました……（汗）」
「待ちなさいよルルー、何を勘違いしているの？」
「えっ……そ、その？Ｓ、ＳＭ？（汗）」
「はぁ？」
どうやら違ったようです……はぁ。って、なぜかちょっぴりがっかりしている私がここにいる（汗）
「直人（コイツ）がその子にふざけた真似（セクハラ）をしてね。それでお仕置きってわけ」

「お、お仕置きプレイ……はっ、は、うひゃっ（／／／）」
……なんで直人さんはちょっぴり嬉しそうなのか（汗）
「その子……？」
美菜さんが指を指した方向に視界を移すと……
「みゅーん」
「……え、えっ？貴方は……なんでここに？」
「何？ルルー、その子と知り合い？」
「え、えっと……そうですね……とりあえず、ここじゃあ目のやり場に困りますしリビングルームに行きませんか？」
「そうね……ほら、豚、いつまでも寝てないでさっさと起きなさい」
「く、くぅん……（／／／）」
……く、首輪まで付いてる……（汗）
「ふむ、よし、じゃあとりあえずリビングで続きを話そうか？ルルー？」
「その前にとりあえず直人さんはちゃんと服に着替えてくださいね？（汗）」
少しぐらい隠してください……（泣）

「で？ルルー、この子と一体どういう関係なのかしら？」
リビングに着くと美菜さんは真っ先に私に尋ねてきました。どうやら、美菜さんはさっきの事で気が立っているようです……
「え、えっと……言いにくいんですけど……？」
「何？言ってみなさい」
「えっと……その、その子というかなんと言うか……実は私のペットなんです」
「ペ、ペットぉ！？な、何よソレ！？（汗）」

「今の僕（ペット）と美菜（ごしゅじんさま）のような素敵な関係だね」
バキッ
「で、でもこの子……正真正銘の人間よ……？ま、まさか奴隷じゃ……？」
「みゅ、みゅーん？」
「ち、違いますよぉ！？ひ、人聞きの悪い！？」
「じゃ、じゃあ……じ、人身売買？（汗）」
「違いますっ！！！なんでそんな悪いイメージばっかりなんですか！？そんなに腹黒い女に見えますっ！？私！？（汗）」
とりあえず……あんまり言いたくなかったんですけど仕方ないですね……
「実はその子、『動物人間（ハーフ）』なんです」
「は、ハーフ？な、何それ？（汗）」
「もともと動物だったんですけど……ちょっと色々ありまして私の中途半端な魔法のせいで動物と人間が半分ずつ混在し合った姿になったのがこの子です……」
「じゃ、じゃあこの耳はまさか……」
「はい……お察しの通り、元々この子はうさぎちゃんなんです……その名残がそのウサ耳です。ちなみにその子の名前は『ミュー』ちゃんです」
「みゅーん？」
不思議そうな顔で私と美菜さんを交互に見るミュー……ううっ、ごめんね、半人前の魔法使いの私のせいで…
「ふーん……でもこの顔のつくりや容姿はどっからどう見ても人間の女の子よね……」
ぷにぷにぐにぐに
「みゅ～、みゅーーーん！？」
美菜さんがミューの白い頬を摘んでは伸ばし、摘んでは伸ばしていた。
「ねぇ？ルルー？この子、言葉話せないの？」

「え、えっと……できますよ？」
「え？ホントなの？」
「はい……コレを使って」

「ほん○ゃくこん○ゃく～～～」
「ちょっと待て（汗）」

## 何故、君が怒るのか？

「直人君。掌を出してみるといい」
「はい」
僕は茜さんの言うとおり掌を茜さんの方に向ける。
「そう、じゃあ君の指は何本あるかな？」
「5本です」
「うん、君が珍種の生物じゃない限り、普通はそうだね。それじゃあ、5－4は？」
「1です」
「正解。じゃあ、親指から順に4本指を折ってくれるかな？」
「はい」
親指、人差し指、中指、薬指……残り、立てている指は小指だけとなった。
ま、まさか……茜さん、ぼ、僕と……こういう関係になりたい……と？ハァハァ
「す、末永くよろしくお願いします……（／／／）」
「何、くねくねモジモジしてんのよ……気色悪っ」
傍に居た美菜が僕を軽蔑の眼差しで見つめる……フフ、美菜、なんて心地いい視線を送るんだ。
あぁ、しかしたまらないな。心地よすぎてエレクトしてしまいそうだ、ウフフ……
「やっぱり残りは1になったね」
茜さんは華麗にスルー。やっぱりこの人はこういうキャラでなくちゃね、ウフフ……
「これが何か……？」
僕には茜さんが何を言いたいのかさっぱりだった。
「計算上では『5－4』は『1』は当たり前、それは普遍で変わり続けないモノ。でもね、直人君。現実では必ずしもこんな風にある

決まった値……そう、普遍的な変化が起こるとは限らないものなんだよ。私の言ってる意味はわかるかな？」
「はぁ……何となく」
茜さんの言っている事は少し抽象的な事だったがかろうじで何となく理解できた。
「『５－４』がある時は『０』……またある時は『５』になる時だってあるんだ。さぁ、これは計算上では『起こりえない』事象。でも、現実ではありうる。では、今の君はまさにどんな状況かな？」
「幸せです」
「つまり……こういうこと、よっ！！！」
ぐきっ！！！
「あぴゃっ！？」
立てていた小指が美菜の手によって曲がっちゃいけない方に曲げられた。
「美菜、何をするんだ。痛いぞ、いや気持ちいいぞ、もっとやれ」
「うるさい！！！あんた一体コレはどういうつもり！？」
美菜が指した方向には……

「……みゅーん」
スク水ウサ耳幼女、ミューたんがいた。
「ミューたんがどうかしたのかい？美菜？ところで、ミューたん。かぁいいね。ちょっと触ってもいい？」
「どうかしたのかい？じゃないわよ！！！何でこの子が学校の教室にいんのよ！！！しかも、何よこの格好！！！」
「僕の趣味です……（／／／）」
にっこり
「……っ、この！」

「うん、その辺でやめときなよ、美菜さん。これじゃあ、イタチごっこだ。……うん、じゃあ直人君。私からもう1つ質問があるんだけどいいかな？」
「よいです」
「そのかぁいい子に自分の趣味の服を押し付けるのはよく分かるんだ。はぁはぁしたくなる気持ちだってよく分かる」
「分かちゃうんですか……茜さん……（汗）」
「でもね……直人君。私にはどうしてもよく分からない事が1つあるんだ。コスプレイは自分が目で見て楽しむもの。目で見て愛でるもの。目で見て犯すもの。……私は今までそう思っていたんだけどね」
「なんだか私、今まで茜さんのキャラを勘違いしていたような気が……（汗）」
「……なんで君も同じ格好をしているのかな？」
茜さんが真剣な目で僕を見つめる……本気で分からないようだ。美菜は口をぽかーんと開けたまま呆然としている。
「ふっ……茜さん、あなたはまだド素人だ。全然わかっちゃあいない、否、分かっていないことが分かっていない！！！まさに『無知の無知』！！！」
「なっ……！？」
茜さんは虚を突かれたような顔になった。
「コスプレイを第三者の視点から楽しもうなど持ってのほか、その自分は蚊帳の外みたいな考え方が僕は許せない。目で楽しむ？愛でる？犯す？コスプレイを馬鹿にするなっ！！！そんなもんで満たせるわけがない！！
！コスプレイはコスチュームすることで初めて体感することができるプレイだ……無論、一般的に『プレイ』というものは1人でやるんじゃあ成立しない。最低2人以上必要だ。なぜなら、その『プレイ』を『共感』し合う相手がいなければならないからだ。まぁ、しかし例外的に1人で楽しむプレイも存在するといえば存在する。

いわゆる『縄プレイ』という奴だな。このプレイは共感する対象が人間ではない。縄という道具だ。自分の身体を締め付け食い込みがたまらない、アッーいやっ！いやぁ！と話がそれたね……一方、縄の方は縄の方で『締め付けてやんよぉ！！！ぐへへへ！！！』とそう思っているに違いないだろう……まさにこれぞ『共感』！！！『コスプレイ』も『共感』の上で成り立っている！！！それなのに一方的にかぁいい子に自分の趣味を押し付けるなど……言語道断っ！！！まるで昼間にやってくるセールスマンのような振る舞いっ！！！そんなもの『コスプレイ』とはいわないっ！！！『コスプレイ』とは……目で見るのではなく……なりきるんだっ！！！知れっ！！！世界を！！！宇宙を！！！神を！！！……そうすれば茜さん、あなたにも『コスプレイ』を体感できる日がいつか来る……僕は切にそれを願っている」

「あ、あぁ……そうだったのか……」

茜さんは僕の話を一通り聞き終わるとがくっとうなだれた。

「みゅーん、ど素人はお前なのです、おちん〇野郎ー、みゅみゅーん」

「んなっ……！」

すかさず僕の持論を真っ向から否定してきたのは予想外の人物、ミューたんだった。

「みゅーん、さっきから散々ベラベラベロベロペロペロとご自分の持論を語ってくれましたが、貴方のはただの独り善がりな持論です。ご自分の身の程とナニを知りやがれですー、みゅーん」

「な、なんだと！？僕の……独り善がりだとっ……馬鹿なっ！？」

「……え？え？え？この子ってそんな喋れる設定だったっけ？」

美菜はおろおろと困惑している様子……ちょっとかわいいじゃないか。

「みゅーん、ひとりよがりー、みゅーん」

「独り善がり……だとぉ……ふざけるなっ！！！」

「みゅーん、ふざけているのはお前の存在です、おとといきやがれ

この皮むくれ三太夫が。みゅみゅーん」
「こ……このぉ……」
「こ、こら！ミュー！……な、直人さん……す、すいません……この子、普通に喋ると言葉遣いが汚くて……」
「……ろ」
「って、直人さん？（汗）」
「もっと僕を虐めろぉっ！！！！！ふーふーふーふー……ウフッ、うふふ……（／／／）」
「もうダメですこの人……（泣）」

事の始まりは昨日に遡るーーー
ルルーが取り出したほん○ゃくこん○ゃくなるものをミューたんが口にした瞬間……
『みゅーん、何ですかこの妙にイカ臭い家は、みゅーん』
僕と美菜は呆然としていた……何に対して？決まっている、今まで『みゅーん』って鳴いていたロリたんがコンニャクを食べた途端、流暢な日本語で喋り始めるからだ……
『こ、こらっ！！！ミュー！！！す、すいません……直人さん、美菜さん……この子、口は悪いですけど本当は優しい子なんですけど……』
『みゅーん……ルルー、何かティッシュ踏んでる……みゅーん……』
『えっ……？わっ、わわっ！……え、えっと……このティッシュ、妙に粘着性がいいんですけど……（汗）』
足にくっついているティッシュを見ながら僕に尋ねるルルー……
『……ポッ、し・よ・う・ず・み（／／／）』

つい、頬を染める僕……
『……』
『……わかってたけど……げ、下衆野郎ね、あんた……（汗）』
ルルーは顔を真っ赤にさせながら俯いている。それに対し、美菜は軽蔑の眼差しで僕を睨みつける……ふふ、いいぞ、美菜、その刺激的な視線が僕の明日への活力となる。
『くんくん……みゅーん、あの机からもイカ臭い匂いがほのかにします、みゅーん……』
いつも、皆で食事をしている机を指差すミューたん……
『『……』』
『今月は……寂しかったから……つい……ウフフ、お恥ずかしい……（／／／）』
美菜とルルーは僕らから2mほど距離を開けた……ふふ、寂しいな。
『みゅーん……とんだ、お盛んなモンキー野郎ですね、このホー○ー野郎』
『いやぁ、それほどでも、ウフフッ』
『褒めてないですよ、みゅーん』
『で？あなた、ミュー……だったっけ？これからどうするつもり？』
『みゅーん……私は……』
『……ミュー？』
『……私は学校というものに行ってみたいです……みゅーん』
少し、不自然な日本語をだったが、その発言がきっかけとなった……

「……というわけなんだよ」
「……直人、あんた誰に向かって喋ってんのよ……？」
キーンコーンカーンコーン……気付くと、もう既に放課後になっていた……外を眺めると茜色の空が広がっていた……
「さぁ、それじゃあ、帰ろうか、み……」
「直ちゃんの浮気者ーーーーー！！！！！」
パチーーーーン！！！！！
「ふむんぐっ！？」
帰ろうとした瞬間、突然頬に鋭い痛みが走った……
「ろ、楼たん……」
僕の頬を打ったのは赤い目をした楼タンだった……
「これはどういうことなのっ！？説明してっ！？」
僕の胸元を掴み上げようとする楼タン……だが、非力な楼タンは胸元を弱々しい力で掴むのみ……
「待ってくれ、違うんだ……これはその……」
「何が違うのぉ！？この間もそこのアバズレババァに手を出して……っ！！！」
美菜を指差し訴える楼タン……
「あ、アバッ！？ババァ！？……な、何ですってぇ～～～～……」
邪鬼のような顔で僕を睨む美菜……なぜ……僕……？
「あ、あの～～～……？これは一体どういう状況なんでしょうか……？」
「みゅーん、どうした、美菜」
見かねておそるおそる美菜に尋ねるルルーとミュー……
「あんた達は先に家に帰ってなさいっ！！！！！」
ドスの利いた声でルルーとミューに八つ当たりする美菜……怖い……
「ひきっ！？は、はぃ～～～～！！！！！」
「みゅ、みゅん！！！！！」
ダッシュでこの場から離れるルルーとミュー……

「さて……と」
黒い殺気を放ちにっこりと僕と楼タンに微笑みかける美菜……まぁ、何はともあれ……

僕は罪な男……ってことなのかな？ウフフ……

## マイネームイズプリン

今日は僕と美菜、そして水鳥ちゃんの3人で屋上でのランチタイム……ふむ、両手に花……というやつだね。しかし、まだ春を迎えていないこの冬の終盤は微妙に寒い……『3人でくっついて食べれば問題ないね』ーーーそんな僕の提案は美菜の拳によって却下された。ウフフ……このツンデレさんめ♪……しかし、メガネにヒビが入ってしまったな……また新しいのを新調しないと、ウフフ……

「「「ごちそうさまでした」」」

そして、ランチタイムが終わり、僕は懐から食後のデザート、スペシャル（？）プリンを取り出し……

「水鳥ちゃん……お1つどうぞ……」

「わっ、直人先輩っ！ありがとうございますっ！」

大変嬉しそうに水鳥は僕からの贈り物ーーースペシャルプリンを受け取る……あぁ、プリンもおいしそうだが君もおいしそうだ……君を今すぐお召し上がれないのが残念だ……なんてことは美菜の前では言えない。

「それでは改めまして……」

「「いただきます（♪）」」

「……ちょっと」

「……？なんだい、美菜？……あぁ！すまない……美菜にもあげないとね……君には特別に僕の特製『かぼちゃプリン』を進呈します……」

「……」

美菜は怪訝な顔で僕のお手製の『かぼちゃプリン』を受け取る……フフッ、女の子は甘いものには目がないって言うからね……好感度＋2ってとこかな……ウフフッ

「ん～～～直人先輩のプリンはデリシャスですぅ～～～♪おいひぃ

でふぅ～～～♪」

「あぁ、水鳥ちゃん、ダメだよ……そんなお召し上がり方ではスペシャルプリンの真の味を引き出せない……正しいお召し上がり方はこうだ……」

「？」

僕は不思議そうに見つめる水鳥ちゃんに向けて口を開き、スプーンで適量のプリンをすくい自分の舌の上に置く……これで準備完了だ……

「いいかい？水鳥ちゃん？プリンは生き物なんだ……生き物だからこそ、壊れやすく脆い……歯で噛むなどもってのほか……ましてや、ほとんど味が伝わらぬ『飲み込む』行為などプリンに対する冒涜……そう、本来極刑に値する……水鳥ちゃんそれを踏まえて僕のプリンのお召し上がり方を参考にして自分流の最大限プリンを敬愛するお召し上がり方を獲得してもらいたい……いいかい？よく見ておくんだよ？」

「は、はい！！！よろしくお願いします！！！プリン閣下！！！」

……プリン閣下？

「こう……舌でプリンを弄ぶ様に……レロレロレロレロレロレロレロレロレロレロレロレロレロレロレロ」

「お、おぉぉぉーーーー！！！！す、凄いですっ直人先輩っ！！！！まるで、プリンが舌の上で踊って……いや！！犯されているよう……！！！その姿にキモ過ぎて思わず引いちゃうくらい凄いです！！！」

「うふっ……それほどでも……（／／／）レロレロレロレロレロレロレロレロレロレロレロレロレロレロ」

「やめなさい！！！おぞましいわっ！！！」

バキィッ！！！！

「おげレロレロァーーーー！？」

ブッシャアーーーー！！！！

「わわっ！！！先輩、ばっちぃですっ！！！！」

美菜が僕の鳩尾にストレートを決めたせいでその衝動で僕はプリンを霧状に吐き出してしまった……

「ウフ……うふふ……今日の美菜は手荒いね……でも僕はそんな手荒い美菜が大好きだよ……はぁん、プリン最高……で、す（／／／）」

僕は感極まって思わずコンクリの地面の上で身体をクネクネさせる……あっ、屋上の地面ってこんなに冷たい……だ、ね（／／／）

「直人先輩、そろそろ本気で糞キモいんでやめてもらえます？ぶっ殺しますよ♪」

「あっ、ハイ……ごめんなさい」

「水鳥……あんたそんなキャラだったっけ？（汗）」

翌日ーーー

「では……今日はプリン講座2日目です……では、今日は我が校名物、糞不味い食堂で糞不味いプリンを食してみようか、水鳥ちゃん」

「はいです♪まずまずー♪」

「……あの、直人さん……目の前にいる食堂のおばちゃんがピクピク震えていらっしゃるんですけど（汗）」

今日は水鳥ちゃんと魔法少女ルルーを引き連れて食堂にやって来た。そして、僕と水鳥ちゃんとルルーは迷わずお目当てのプリンを3個注文した。

「お目当てじゃないですっ！無理矢理ですっ！！！しかも何故、私だけ大盛りなんですかっ！？（泣）」

「そりゃあ、君……ねぇ？」

「ねー♪です♪」

「何ですか！？その意思疎通っ！？私、そんな大食いキャラに見えますっ！？見えるんですねっ！？」
「うるさい♪黙って食え、乳オバケ♪」
「乳オバっ…！？」
「ルルー、ここは黙って食べたほうがいい。彼女どうやらSに覚醒してしまったようだから……」
「コラ♪何ごちゃごちゃ言ってるんですか♪せ～んぱい♪てめぇも食え♪」
「……はい」
「うぅ……今日はお米が食べたかったのに……なんで……プリン……ぐすっ」
ルルーは涙を流しながらプリンをスプーンですくい、口に運ぶ……
「……微妙ですね」
「あぁ、微妙だな、ていうか率直に言おう。まずいなコレは」
「フフ、その『微妙な』味……がいいんじゃないか、直人君」
「だ、誰だっ！？」
声が方向に振り向くと……
「あ、茜さん？」
「や、奇遇だね。と言っても私はこの食堂のリピーターだからね。君達と出会っても不思議じゃないか」
茜さんは僕の真後ろの席で優雅に素うどんを食していた。しかし、この人に素うどんは最高に似合わないな……どちらかと言うとフランス料理とかの方が似合ってそうだ。
「あー、あれは周りにお付きの人とか大勢いて落ち着かないからね。私にはこっちのが性に合ってるよ、直人君」
「やん♪僕の心（ハート）を読んじゃいやん♪」
クネクネ
「直人先輩、すこぶるキモイです♪」
「あの……」
「なんだい？ルルー君」

「さっきの話ですが……なんで『微妙な』味がいいんですか……？やっぱり、お料理はおいしい方がいいじゃないですか……？」
何かさっきから食堂のオバちゃんが遠くからこちらを凝視しているような気がする……
「『微妙な』味ーーーそう、『未完成な』味が……ソソラレルんじゃあないかな？」
「は、はぁ？あの……」
ルルーは戸惑った様子で僕と茜さんを交互に見る……
「そう、直人君、よく分かっているじゃないか。未完成……なんと甘美な響きなんだろう……（／／／）未完成な料理を口に運び……そして、自らの舌で楽しむ……うん、なんてまずいんだろうーーーー未知のジャングルに迷い込んだような気分になって最高だね……フフ（／／／）」
「そうですそうです、茜さんこそ素晴らしいですね。もう、快感ですよね……あぁ、もう最高（／／／）」
直人は食堂のテーブルの上で悶えている……
「分からない……この人達の言っている意味が何一つわからないです……」
「ルルー先輩♪分からないのが正常ですよ♪この人達が異常なんです♪」
「……水鳥さん、結構キツイですね……（汗）」

さらに翌日ーーー
「な、何だ！？お前らは！？な、何で僕を取り囲む！？っていうか、昼飯食わせろ！！！」
昼休み、今日は水鳥ちゃんとミューたんとまちるのロリっ子ロリロ

リトリオを引き連れて五十嵐幸太郎君の席を４人で包囲してみた……

「昼食……幸太郎君、君のお昼のお弁当は没収です……では、これはミューたんに進呈」

「もぐもぐ……みゅーん、何かこの弁当、足の裏みたいな匂いがしてまずいですね、げろげろ～～～」

「うぉーーーい！？勝手に進呈してんじゃねぇ！？ていうか、人の昼飯食っておいて吐くとか酷すぎない！？ていうか、僕の昼飯返せぇ！？（泣）」

「……コレ、返します。臭っ、みゅーん……」

「いるか！？コレ、お前の食いかけじゃねぇか！？そして臭いのはお前が吐いたからだっ！！！（泣）」

「まぁまぁ、幸太郎君、落ち着いて……君のお弁当の代わりに食堂のプリンをあげようじゃないか……」

「……おいしい、と、思う」

「感謝しろよ豚、です♪」

「ガツガツとプリンを獣のようにむしゃぶり喰うといいー、みゅーん」

「何で僕のお弁当が一瞬にして食堂のプリンに置き換わるんだよっ！？何か納得いかねぇ！？（泣）」

そして、幸太郎君は諦めたのかしぶしぶプリンを食べ……

「……って、おい藤本直人、スプーンを僕に寄越せ。これじゃあ、食えん」

「どうぞ……」

そして、心優しい僕は幸太郎君に割り箸を手渡す……

「ってコラァ！！！スプーンだっつっただろうが！？何で割り箸を渡す！？食いにくいわっ！？（汗）」

「あぁ……す、すまない。はい……改めてどうぞ……（／／／）」

「……」

「あ……幸太郎君？怒って……る？ごめんなさい……わざとじ

ゃないの……直人、わざとじゃないの……グスン」
「ど、ドキッ……（／／／）あ、べ、別に怒ってねぇよ……その、ありがとな、な、直人……（／／／）」
「あ……幸太郎……く、ん（／／／）」
「そこの先輩方、糞キモイです♪糞死んでください♪」

またまた翌日ーーー
ある程度プリンの良さを布教した僕と水鳥ちゃんは屋上にいた……
「あぁ……やっぱりプリンは最高だね……あの柔らかな食感が溜まらない……」
「はい♪直人先輩は最低です♪」
「ふふ、これは手厳しい……ところで水鳥ちゃん、僕のスペシャルプリン……食べるかい？」
僕は水鳥ちゃんにスペシャルプリンを手渡す……すると彼女はにっこりと笑顔でプリンを受け取り……
「えーーーい♪」
ベチャ！！！
僕の顔面にスペシャルプリンを投げつけ、見事に僕の視界はプリン色になった……
そして、去り際に一言……
「死ねばいいのに♪」

そのまま彼女は屋上を去っていった……ウフフ……女心は複雑だなぁ……

## おませな千夏たん

「千夏～お弁当とテッシュ、それにハンカチは持ったの～？」
「もぅ～大丈夫だよぉ、千夏もう子供じゃないんだし。それじゃあ、行ってきまーす」
何処か不安そうな顔で私を見つめるお母さんだったけど、私は意を決して表を出た。
今日から私、美影千夏（みかげちなつ）は小学六年生。つまり、今日は始業式の日なのです。
でも……だからと言ってドキドキもワクワクもしない。かといって、気落ちしているわけでもないけれど……あ～、もう最高学年かー、ふへぇ～……そんな感じだ。何か……何か、足らないような気がする。
「ふへぇ～～～～……」
家の前のコンクリートの塀に体重を預け、小学生らしからぬ溜息を吐く。
別に今の小学校が楽しくないわけではないけれど……何か平和、平和、平和すぎる。
お友達とお喋りしていても……ありきたりな昨日のテレビの話やら、恋バナやら、旬くん好きスキ～やら、その他うんたらかんたら……友達の付き合いだからある程度は話を合わせる様にしているけれど。
正直言って、ありきたりで、平和で、平凡で、退屈で、ノンセンス。これから、ふっつうに生きて、食べて、大きくなって、中学校行って、高校行って、大学行って、働いて、結婚して、子供を授かって、歳喰って、老いて、死ぬ……こんな平々凡々な一生嫌だ、嫌……とは言ってもそれに逆らえない自分もいる。ＯＨ、何て世知辛い世の中なのだろう、ふへぇ～……
「ふへぇ～～～～……」

ゆとり教育じゃないけど、心にもゆとりが欲しい。
いや、多分これが世間様々にとってゆとりある生活なのだと思うけど。おっと、いけない。そろそろ低学年のお子様達がゾロゾロ私に群がってくる時間帯だ。いわゆる集団登校という奴だ。こんな辛気臭い顔してるとオチビちゃんが『おねぇちゃ～ん、どうしてそんなへんなおかおしてるのぉ？』と無邪気な笑顔で素でそんでもって真面目な顔して聞いてくる……こういうのは正直対応に困る。無理矢理、笑顔作って『なっ、なんでもないよぉ～？』ニヤリ、するとチルドレンは私に指差して『キャハハハハハハ、へんなかおへんなかおへんなかおー』……正直殺意が沸いたね、あれは、人に向けて指差すな、常識だよ？チミ達？ちなみにコレ、マイ実話。ネガティブシンキングな私だが、それでも唯一、1日の内でこんなちっぽけな私にも楽しみがある。おっと、そろそろな頃合かな？私は顔を上げて、目の前の、向かいの一軒家に視線を移した。

「ほらっ！とっとと学校行くわよっ！直人っ！」
真っ先に出てきたのは腰まで伸びた赤色のロングのお姉さん。確か……美菜さん、だっけ。
「う、うむんっ……す、すまないが美菜、僕の耳元で野獣のような大声で叫ばないでくれないか、えへへ」
次いで美菜さんにアイアンクローをかけられながら引きずられていくメガネで長身の男、コノヒトは1番印象深い、直人さんだ。なぜか、直人さんの格好は寝間着……チン○ル仕様の。すこぶる趣味が悪い。
「うっ、う～……ま、まだ眠いですよぉ～～～……スカー」
さらにこちらは目を擦りながらのそり、のそりと……カバのような

動きで出てくる……え、この人は新顔、新たなヒロイン？とりあえず、金髪のロング、おっぱいバズーカな人。
「ちょっ、ルルー！立ったまんまで寝るなっ！……ったくあんたら春だからってダラケ過ぎじゃないの？」
ルルー、おっぱいでいっぱいなあの人はルルーって人らしい、メモメモ。
「みゅーん、それは仕方ないですよ美菜。正直、私も眠いです……みゅーん、そこの変態さんのおかげで」
さらに……新たなヒロイン登場、おっぱいの次はロリでウサっ娘か。ロリでウサっ娘はチン○ル仕様の直人さんの方を向き睨む……萌えぇ～。ついでにチン○ル萌えぇ～。
「うむ……すまないね、ルルー、ミューたん。つい……彼女の背中が恋しくなってね、ウフフ」
「みゅーん、何を言ってるんですか貴方は」
「……」
おっ、最後に出てきたのは確かあれは妹さんだ。えと……まちるさんだったね。黒のロングのロリちゃん。
何？ここはハーレムランドですか？いや、ハーレムホームと言った方がいいのかな？
「いや……何、昨夜、とあるラブゲームにハマリにハマッてしまってね」
「みゅーん、エロゲーですね、それがどうした犯罪者」
犯罪者はキツイと思うな。
「朝からエロゲーの話とか引きますよ……スカー」
寝ぼけているはずのルルーさん……涎、鼻ちょうちん、夢心地ってとこかな。
「その名も……『ときめきＨｅａｒｔ☆』」
あ……それ知ってる、ていうかやったことある。こっそりと……ね、体験版ダウンロードしてだけど。
「めくるめくモエモエ～なヒロイン達に囲まれた超鈍感でヘタレな

主人公は学園生活をのらりくらりと過ごしていく。ヒロイン達や悪友と日々過ごしていく内に主人公は己の内なる魂、いや汚れ＝欲情を知ってしまった。そしてドンドン己の黒い感情が湧き上がってくる……主人公は良心と葛藤する……しかし、時、既に遅し。準備は整った、世界は秩序に対して曖昧になった、よし、まずはあの勝気なツンデレ女からだ、存分に舐め舐めへコへコしてやる。待っていろ……メス豚共。こうして、狂気を身に纏った主人公はこの学園を舞台に惨劇を繰り広げていく……おしまい、ってあれ？みんな？あれー？おーい？みんなー？」

あらすじを語る直人さん……ん、あれ？これって萌えゲーじゃなくて陵辱ゲー？

いつの間にか直人さんの周りにいたヒロインｓは消え失せていた、きっと引いたんだろう。そりゃ引くわー。

そんな光景を見学しているとゾロゾロと黄帽のチルドレンが集まってくる。

何か生きるのって楽しーなー、ふへぇ～～～……

## ノーパン幽霊幼女

『ちょっと！そこのアンタ！』
登校中、僕を呼ぶ甲高い幼女の声が聞こえてきた。
その声の方向は確かに前方から発信されているのだがその肝心の声の発信源もとい幼女の姿が見当たらない。
「美菜、前方から幼女の声が聞こえないかい？」
「はっ、幻聴じゃない」
美菜は鼻で笑い、僕を蔑むような目で淡々とそう答えた。ゾクゾク、うーん、たまらない。
「というか、なんで声だけで即座に幼女だとわかるんですかねこのおちん○野郎は、みゅーん」
「な、何か怖いです……」
ミューたんは美菜と同様、ルルーは怯えた様子で僕から少し離れた。
「ふむ、気のせいかな……」
「あんたの存在が気のせいであってほしいけどね」
美菜はすかさず僕を攻めていく。
どうしたんだい美菜……今日の美菜は一段と激しいなぁ……身体の震えが止まらないよ、ウフ、フフフ……
「な、なんでこの人、小刻みに震えてるんですか……美菜さん（汗）」
「さぁ？何かの病気じゃない？」
美菜、なんて酷い、うれちぃことを言ってくれる。
あぁ、僕、僕……もう、気持ちよすぎてエレクトしちゃうよ、ママン（／／／）
『ちょっとぉ！だから聞きなさいって！』
うむん？また幼女の聞こえた……今度はさっきより鮮明に。
『き・き・な・さ・い・よぉ～～～アンタ私の声が聞こえているんでしょ？！』

今度はイライラしたような、さっきより1オクターブ高い幼女の声が聞こえてきた。
『むっきぃー！この！この！このぉ！』
何をしているんだろう、分からないが怒っている事は声の様子で明白だ。
というか、もうこれは幻聴ではない。今、はっきりとした、僕の目の前に『何か』いる。
しかし、その『何か』の声は僕にしか聞こえていない、それも確かだ。
姿、形は見えないのに幼女の声だけ聞こえてくる、いとおかし、それはこの世界にあってはならぬ存在（モノ）なのか。いやいや、そうであってもきっと僕はその女の子を受け入れるだろう、だって僕、男の子だもん。ふむ、とりあえずあちらさんは怒っているようだからこちらからも何かアプローチした方が良いな。

「君のパンティは何色なんだい？」
バキッ
謎の幼女からの返答を聞く前に美菜の蹴りが僕の鳩尾に入った。
ちなみに一瞬見えた美菜のパンティはイチゴ柄だった。素晴らしい、摘んでみたいものだ。
「死にたいの？」
にっこり
美菜は笑顔で地面に倒れる僕にそう告げた。
「兄、私は、キャラメル柄……（／／／）」
なんとっ！我が妹のパンティ柄はキャラメル……素晴らしい、舐め舐めしたいものだ。

「まちる！こいつの前でそんな事いっちゃダメよ！犯されるわよ！」
美菜はまちるにそう言った。
「犯すなんてそんな……ただ、愛でるだけなのに………」
「それが問題なのよっ！！！」
「あ、あのぅ……私も答えた方がいいのでしょうか……？」
ルルーは顔を赤らめながらそう言う。

『穿いてないわよっ！悪いっ？！』

「は、穿いてないだとぉぉおおおおおおおおーーーーーーーーーーーーー？？？？？！！！！！！」
「ひっ！う、嘘ですっ！私はちゃんと穿いてますっ！（／／／）」
謎の幼女から予想外な答えが返ってきた………う、嘘だ………穿いていない、だと………？
「冗談も休み休み言えぇぇぇえええええええーーーーーーーーーー！！！！！！！！！」
「あぅ！ですから穿いていますぅーーーーー！！！！！こ、これが証拠です！！！」
チラッ
『冗談なんかじゃないわよっ！！！穿　い　て　な　い、それが事実よ！！！』
「ば、馬鹿な………君はノーパンだと、そう言うのか………」

「うぅ、今日はクマさんのパンティ……は、恥ずかしいです……（／／／）って、直人さん?!だからノーパンじゃないですって!じっくり見てください!クマさんのパンティです!!!」
チラッチラッ
「じょ、冗談じゃない!!!証拠がないだろう!?証拠!!!君は実体が見えないのだからそんな君からの言葉だけでは証拠にならない!!!証拠になるものを見せろ!」
『なによぅ!私が嘘を言ってるとでも?!ムキーーー!!!ムカつくぅーーー!!!いいわよ!!!じゃあ、証拠って何を見せろって言うのよ!?』
「見…せ…る…?そんなものでは足りぬわぁーーーーー!!!!!触らせろ!舐めさせろ!そう、君のお（ピーー※自主規制）を触らせろ!舐めさせろ!そうすればノーパンであることを信じてやるわぁーーーーー!!!!!」
『私の身体は実体がないってあんた知ってんでしょ?!ていうか、あったとしてもそんなことさせるわけないでしょバーカバーカ!!!このど変態っ!!!』
「いやぁあああああああーーーーーーーーーー!!!!!!!!!!!!!!!いくら何でもそ、そそそそそんな変態チックな事できませんよぉ!!!（／／／）わ、わたしまだ処女なんですぅ!!!許してくださいいいいいいいいいーーーーー!!!!!（泣）」
「じゃあ、信じぬぅウウウウウウウウーーーーーーーーーーー!!!!!!!!!!」
『うっさい!バーカバーカバーーーーーカ!!!』
「いやぁあああああああーーーーーーーーーーー!!!!!!!!!!」

「いい加減に……しなさいっ！！！」
バキッ
「なうっ！！！」
美菜に後頭部を殴れられ、僕はそのまま地面にドロップアウトした。

## ひとりじゃない

「うん、彼女はきっと浮遊霊だろうね」
茜さんは至って真面目な顔でそう言った。
「え、マジですか……？こ、こいつの幻聴とかではなく？」
美菜は信じられないといった様子でそう言った。
さて、とりあえず現状を報告しておこうか。前回、突然僕の前に現れたノーパン幼女の幽霊、といっても僕も彼女の姿、形を見たわけでもなく、彼女の声しか聞こえない。しかし、『何か』いることは確か。そんな疑問あってか、僕は身近な知り合いでそういったことに詳しそうな人……茜さんにその事で相談することにした。美菜達にそのことを報告したのだが……まぁ、当然そんな非現実的な事を信じるわけがなく、代わりに複数の素敵な軽蔑の眼差しが返ってきました、う～ん、快感。とまぁ、僕1人でそんな経緯で茜さんのいる音楽室へ……わけもなく、美菜、ルルー、まちる、ミューたんもついて来た。理由は至ってシンプル、『密室であんたみたいな獣（ケダモノ）とか弱い女の子を二人っきりにさせるわけにはいかないでしょ』……フフッ、全く酷い話だ、だがそれがいい。長い長い苦難苦行を乗り越えてから、その先のある果汁がたっぷり詰まったおいしそうな果物を時間をかけてじっくりお召し上がるのだ……舐め舐め、ペロペロ、舐め舐め、ペロペロ、舐め舐め、ペロペロ……ウフフ、実に楽しみだ……
「で、でもでも！オバケだなんてそんな……！いきなりそんな非科学的な存在がいるって言われても信じられないですよぉ～！」
ルルーは何故か青ざめた顔でオロオロしながらそう言う。
「既に非科学的な塊がいくらそんな否定的な事を主張しても何の説得力もありませんよルルー、みゅーん」
「うっ……」
ルルーはミューたんにそう返され、何も言えずたじたじ。

『え～、何々？この子私の事びびってんの？おもしろーい♪イタズラしちゃえ♪』
ノーパン幽霊幼女はそう言うとルルーの傍まで寄って行った。
ん？何故、見えるかって……？さっきは全く見えないって言ったけど、実は原因は分からないがつい先ほどから僕にはうっすらと彼女の姿、形が見え始めている。見た感じ完全にロリキャラ、幼さが残る顔立ち、肩筋まで伸びている茶色のショートヘアー、白のワンピース、細身、白い肌、ちょっとじゃなくて大分控えめなオッパイ、ブラはしていないのか？服の上から可愛らしいポッチ見えておりますぞー……あぁ、あれを赤ちゃんのようにちゅぱちゅぱできたらどんなに幸せな事か……ウフ、ウフフフ……
「ひっ！何か今、背中に寒気が走ったんですけどっ……！な、直人さん！今、な、何かしましたね！？」
「僕は何もしてないよ、僕が君に興味があるのはそのふくよかなオッパイだけなのだからね」
「……何か妙に説得力のある言葉ね、それ自体は史上最低最悪なセリフだけど」
美菜はいつもより刺激的な軽蔑の眼差しで僕を見つめる。たまらんですたい。
『今度はこうしちゃえ♪』
ノーパン幽霊幼女はそう言うと、今度はルルーの耳穴にふーっと息を吹きかけた。羨ましい……
「ひぃいいい？！今度は耳穴に生暖かい空気がぁあああ～～～～～！！！！！な、直人さん！！！い、いい加減にしてくださいぃいいいいーーーーー！！！！！」
「僕は何もしてないよ、僕が君に興味があるのはそのもっちりとした太ももだけなのだからね」
「……何か妙に説得力のある言葉ね、それ自体は史上最低最悪なセリフだけど」
うーむ、怖がるルルーにあのノーパン幽霊幼女がちょっかいをかけ

る度に僕が濡れ衣を着せられる。うーん、世の中なんて理不尽。そろそろ、止めるとするかな。
「おーい、そこの貧乳ちゃん！そろそろその子にちょっかいをかけるのは止めてあげてくれないかな？」
『だぁれが貧乳よ！！！このタコ入道！！！泣かすわよっ？！』
「直人さんは一体誰に話しかけているんですかぁ！？」
ルルーは泣きそうな声でそう言う。
「あぁ、それにまだ君の名前を聞いてなかったね。教えてくれないかな？幼女ちゃん？」
『だぁれが幼女よ！！！このイカ臭男！！！私は幼女じゃない！！！永遠の１１才よ！！！』
おぉ、僕のもろストライクゾーンだ。ホームランも夢ではない……おいしく頂きます。
『私の名前は名城夕（なしろゆう）！！！以上！！！』
ぷくーっと頬を膨らませながら彼女はそう言った。か、可愛いではないか……
「ふむ……僕の名前は藤本直人、趣味はおぱんちゅ鑑賞と陵辱シーンを脳内で回想することです……これからもよろしく、夕」
『りょ、陵辱ってアンタ……（汗）って、ゆ、夕？！私の事を気安く呼ぶ……！』
「だめかい？」
『……い、いいわよ、別に。その代わり、私はあんたの事、直人って呼ぶからっ！それでいいでしょ！？ふんっ！！！』
そう言いながらそっぽ向く夕。何だか少し嬉しそうな感じがしたのは僕の気のせいかな？
「うん、それでもいいけど……『直人お兄ちゃん♪』はどうだい？」
『絶対嫌っ！！！（汗）』
「それは至極残念無念また来週……」
「あの……直人さんは何でさっきからブツブツ独り言しているんで

しょうか……？」
「みゅーん、ルルー、見ちゃダメです。汚されますよ、妊娠しますよ、死にますよ」
「えっ？！そ、それは何か嫌ですっ！！！って、死ぬんですか私？！（汗）」
「兄、何だか、嬉しそう……」
「あんたらは何も考えてなさそうでいいわね……」
『……ねぇ、直人』
「ん？なんだい夕？」
『さっきからアンタの周りにいる女の子……何？』
夕は怪訝な顔で僕にそう尋ねる。
「あぁ、彼女達は僕の大人の玩具だよ」
「コラァァァァァァァァーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！」
バキッドガッガスッメキッポキッ

『……何よ、この女たらし』

「……で、そろそろ話を続けさせてもらってもいいかな？」
茜さんは素敵な笑顔でそう言う。
……えーっと、まずいなぁ……怒っているのかな？茜さん。さっきの浮遊霊の話がうやむやになっちゃった感じだからなぁ……普段、

温厚な人がマジ切れすると何か怖いねっ！
「浮遊霊っていうやつですね？地縛霊とかいう類ではなく？」
何だか後が怖そうなのでできるだけ僕は茜さんの話に乗る事にした。
「そうだね、直人君の言うようでは彼女は登校中だけでなく、この学校内までついて来ているんだよね？そうなると、その霊の彼女は特定の場所に縛られているような地縛霊などではなく、何か辛い苦しみや悲しみを抱えた浮遊霊である可能性のほうが高いね」
なるほど……確かに夕はここまで何の苦もなく僕にひょこひょこついて来た。浮遊霊……何か未練を残してこの世を彷徨い続ける悲しき霊……
「……」
僕はふと夕の方に顔を向けた。
『……』
夕は下唇を噛み、何か思いつめた、そんな表情をしていたが……それも一瞬、僕が見ているのを気付くと『直人？どうしたの？』と可愛らしい表情を見せた。この子は……この少女はこの１１才という若さで何を抱えているのだろう……おそらく、想像を絶する重たい何か、何とも言い難い色々なものを抱えているのだろうか。もしそうだとしたら……そんなものこの子には重過ぎる。でも、それを聞く気にはなれなかった……さっきの表情……きっと聞かれたくない事、誰だって隠し事の１つや２つはある。僕だってそうだ。それを無理矢理聞き出して荷を軽くしてあげようだなんてちっとも思わない。だって、それじゃあただの好意の押し売り、自分への自己満足、そんなものドブ川に捨ててしまえ……でも、僕はきっと待つだろう、少女が、夕が、自らそれを話してくれることを、いつまでも。
「直人君だけが見えているのも……きっと、それは彼女……」
「夕です」
「……そう、夕さんと直人君の波長が近いものだからだろうね」
「波長、ですか？」

「そう、波長。人間は誰しも相性がある、合わない人も合う人も、それはちょっと極端な話だけど、身体から出ている波、そう波長に関係があると私は考えているんだ」
本当に極端な話だが……全く信じられない意見でもない気がする。
「だから、そうだね……直人君、君は彼女の声が聞こえてからすぐに彼女の姿が見えたかい？」
「いいえ……ついさっきようやく姿が見えました」
『ぶーぶー、私は朝から直人の声も姿も見えたのにひどいなー』
夕は僕の隣でぶーたれながら横に寝転んでいた。
「それは波長の噛み合わせがうまくいかなかったからだろうね。でも時間が経てば徐々に両者の波長が組み合わさっていくというわけだ、うんうん」
うーん……ちょっと茜さんの話は極端すぎじゃないかなぁ……
「だから、さらに時間が経てば直人君の波長に近しい者にも影響を与えるだろうね」
「影響？」
「あぁ、きっと美菜さん、ルルーさん、まちるちゃん、ミューさん、そして私にも近いうちに彼女の声、姿、形が分かるようになるだろうね、あくまで予想だけど」
うーん、それが本当だったら嬉しいんだけど……何故って？
そりゃあ、1人は寂しいじゃないか……夕を知ってもらえる人は多ければ多いほどいい。
受け入れてくれる人は少ないかも知れないけれど少なくとも今ここにいるメンバーは皆、分かってくれるだろう。夕は何も言わなかったが……きっと彼女は霊体になってから道を通る人に声を掛けまくっていたのだろう。来る日も来る日も……ずっと待ち続けていたのだろう、自分に気付いてくれる人を。でも、中々気付いてくれなくて……それでようやく僕にそれが伝わった。今までずっと1人だった夕はどれほど寂しかったのだろうか……それは相当なものだっただろう。

「でも、それは裏を返せば波長が全く合わない人は絶対に気付かないだろうね」
茜さんの持論に確証あるわけでもないのに、それは絶対正しいように思えてくる……本当に不思議な人だな、茜さん……
「「「「……」」」」
美菜、ルルー、まちる、ミューは黙って真面目に聞いていた……
本当に茜さんは説得力のある言い方をするなぁ……
『ねぇねぇー何でみーんな黙っちゃってんの直人〜〜〜』
当の本人には影響がないご様子。
「……夕」
『なに？直人？』

「今日からお前は僕の、いやここにいる皆と同様、僕の家族だ」

『……っ』
ポタ、ポタ……
夕の瞳から静かに、涙が流れていく。
「夕……」
『っ、馬鹿、馬鹿、馬鹿、馬鹿……馬鹿直人……ひっく』
やっぱり、夕は耐えていたんだ、今までずっと、ずっと……そうしてこれからもずっと耐えようとしていた。……でも、そんな重たいものをこんな小さな女の子が1人で抱えられるわけがない。僕から

荷を軽くする事はできないけれど……

『馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿ぁ……』

こうやって、今。彼女を抱きしめる事はできる。

それが今、彼女には必要な事。『家族』……ひとりじゃない、皆ここにいる。

「ひとりじゃない、ひとりじゃないんだ……君は決してひとりじゃない、皆ここにいる」

周りを見る、美菜、ルルー、まちる、ミューたん、茜さん……皆、優しい笑顔で微笑んでいる。

きっと、まだ夕は見えていないけれど……伝わっているはず、この温もりが。

『うわぁあああああーーーーーん！！！！！』

彼女の声なき声が泣き止むまで僕は彼女を抱きしめていた。

## 愛の形は多種多様

「……本当にいたわね」
「……みゅーん、本当、ですね……」
「キャー！キャー！やめてやめてやめてやめてーーーー！！！！！！いやぁあああああーーーーーーーーーー！！！！！お化け怖いですぅーーーーー！！！！！」
変調、それはちょうど昼休みに入ってからの事だった。
どうやら美菜、ルルー、ミューたんにも夕の姿、形が見え始めたようだ。
それは僕としては実に喜ばしい事なのだけれど……やはり半信半疑だったようで。
美菜、ミューたんは夕の姿を見た瞬間、目を丸くし、さらにルルーに至っては何故か耳を両手で塞ぎ、イヤンバカンあっはぁーーーんな態度、つまり怖がっている。
『この子、まだ私の事怖がってるし……』
当の夕はルルーの姿を見て、先ほどのように弄ろうとはせず、何故かかわいそうな子を見るような目でルルーを見ていた。
「うっ、うっうう……」
ルルーは少し涙ぐんでいた……かわいそうに、本気で怖かったんだね……
「ルルー……」
「うぅ、直人、さん？」
「本気で怯えているそんなちょっと可哀想な君の姿……僕は大好物だ・ぞ」
にっこり
「うわぁあああああああーーーーーーーーーーーん！！！！！！！！！！！」
ルルーは泣きながら教室から飛び出し、そのまま何処かへ走り去っ

てしまった。
「アホかぁーーーーーーーー！！！！！！！！！！」
バキッ
その瞬間、背中に美菜のドロップキックを喰らった。
「い、痛い……でも気持ちいいぃ（／／／）」
「あんたねぇ？！怖がっている女の子にさらに拍車をかけるようなこと言ってどうすんのよ？！」
「ドキドキします（／／／）」
「本気で最低最悪な糞野郎ね、アンタ……」
「みゅーん、今一瞬本気でこのチンカス野郎に殺意が沸きました」
『……あたしも』
美菜、ミュー、夕は僕を虫けらでも見るかのような殺意の篭った目で僕を見つめる……あ、あぁ、ああ……やめてください、そんな、そんな、そんな心地よい瞳で僕を見るのを……やめっ、ないでください、ウフフ……
『うわぁ……何であんたそんなに嬉しそうなのよ、変態……』
「ウフフ、そうだよ。僕は変態（エロ）……そう僕は変態、変態変態変態変態変態……だが変態であると同時に僕は新世界の神だ……」
『いや、違うでしょ』
「だからその小ぶりのおっぱい舐め舐めさせて下さい」
『どんな論法よぉ！？それでオチルとでも思ってんの？！』
「おらぁ、おっぱいペロペロさせろやぁ、こらぁ」
『脅してもだめっ！！！』
「ふ、ぷぴぴっ、はぁはっ！ゆ、夕たんのな、生乳、はっ、ぺろっ、ペロンチョ、させて、ほしい、かなっ、あっ、キタヨコレ、キタ、キタ、キタコレーーー」
『きてないわよっ！！！ていうか、キモッ（汗）』
「ふむん、無理か……」
『無理に決まってんでしょ……（汗）』
「じゃあ、スカ●ロで」

『じゃあって何よぉ？！じゃあって？！何その寿司屋で『キュウリ巻きで』見たいなノリ！？ていうか、私、１１才よっ？！１１才っ！！！あんたこれ本気で犯罪よっ！犯罪っ（汗）』
「じゃあ、後７年待つよ」
『そういう問題じゃないっ！！！』
「あと７年で夕たんが頬を真っ赤に染め必死に我慢しながら足腰をフルフルさせつつ僕の目の前で……『んっ、お、お兄ちゃんっ、私、私っ！もぅ！我慢できないのぉ～』とか言いながら黄金水をちょろちょろ垂れ流す……うーん、何て甘美な光景だろう、じゅるり」
『人の話を聞きなさいよっ！？妄想も甚だしいわねっ！！！』
「いや、夕。もう甚だしいじゃすまないと思うけど……」
「みゅーん、もう奴の存在自体が犯罪ですね」
突き刺さる視線、視線、死線……はぁふぅ～、あまりの心地よさにクラクラする……フフッ、フフフ（／／／）

「モグモグ……」
『じー……』
「モグモグ……」
『じー……』
昼食中、背中に強烈な視線を感じる……気になったので僕は後ろに振り返った。
『じー……』
視線の正体、それは夕によるものだった。物欲しそうな目で僕のラブ・ランチ・ボックス（藤本直人の溢れんばかりの愛がたっぷり詰まった弁当）の中身を見つめていた。そういえば幽霊は食べ物を食べる事ができるのだろうか？実体が無いので無理かもしれないが、

一度尋ねてみよう。
「夕、僕のウインナー……食べるかい？」
『えっ』
ヒュッ
トスッ
「あうっ！」
箸、正面から端が飛来してきた、僕の目を目掛けて。しかし、僕はギリギリの所で交わし、箸は眉毛に直撃した。そして、箸の発信源を見ると真っ赤な顔をしたルルーが今にも刺すような目で僕を見つめていた。
「ハァハァ、直人さん……いい加減にしてください」
さっきの出来事で根に持っているのだろうか？リアルに怒っているご様子、うーん、撫で撫でして彼女の怒りを抑えるべきなのだろうか？何を？もちろんおっぱいを。
「ウフフ……僕の言葉でそんなに興奮しちゃうなんて。君は何て淫乱娘なんだ。でも、大丈夫。僕は大好きだよ、おっぱい（／／／）」
「き、キィーーー！こ、コロ、コロ、コロスー！コロスコロスコロスコロスー！！！殺してやるですぅー！」
「る、ルルー？！お、落ち着きなさい！ルルー！！！」
「みゅっ、みゅーん！！！落ち着けルルー、キャラ変わってます」
暴れるルルーを取り押さえる美菜とミューたん……あぁ、３人共、僕を奪い合う争奪戦を繰り広げるなんて……何て僕は罪深き男なのだろう。
『むっすー……』
ふと、夕の方を見ると夕は頬を膨らまして不機嫌な様子であった。
かぁいい、何てかぁいいんだ夕。
「あぁ、すまない夕。僕の弁当……食べるかい？」
『いらないわよぉ！！！』
夕は今にも泣き出しそうな声でそう言い、僕とは反対側に顔を逸らしてしまった。

う～ん、御機嫌斜め。とりあえず今はしばらくそっとしておいた方がいいのだろうか。
「直ちゃ～～～ん♪」
その時、僕を呼ぶ女の子のような高い声が聞こえてきた。
「やぁ、楼たん。おいしそうだね、その唇」
僕の愛人、堂島楼流タン（♂）が可愛らしいウサギさん柄のお弁当を持ってやって来た。
今日の楼たんの姿はゴスロリ、黒を基調としたドレス姿は愛らしい楼たんとは真逆の存在、しかしながらうまいこと調和されてこの世界と一体となっているような気がする、電波、まさしく毒電波。
「やぁん、今日も直ちゃんにぃ、褒められちった♪えへ♪」
「僕もうれちぃ、うふ♪」
楼タンの天使の微笑みに釣られて僕も微笑みを返す。
「気持ち悪っ！（汗）」
「みゅーん、さ、さぶいぼが立ちました……」
「ところで……どうしたんだい？楼たん？」
「そ、そのっ……あのね、直ちゃん、この間、直ちゃんにひどいことしちゃったよね？私……」
楼たんはシュンと気を落とした様子でそう言う。ひどいこと……あぁ、この間の刺激的なビンタの件か。
「ウフフ……そんなこと気にしなくていいよ楼たん、むしろあまりの気持ちよさに昇天しそうだったし」
「直人は死ねばいいと思う」
美菜はシゲ〇ックスな瞳で僕を睨む。
「だから、その……はいっ、これ！直ちゃん！食べて！」
「お、おぉ……こ、これは……」
楼たんが僕に差し出した弁当、その中身は僕の大好物ばかりのおかず、まさに愛妻弁当（？）だった。
「ろ、楼たん？これは食べても……いいのかい？」
「うぅん！食べてっ！食べて！食べてぇ～～～むしろ、私を食べて

♪」
「堂島楼流とかいうオカマも死ねばいいと思う」
美菜は僕らの愛の巣を羨ましそう、じゃなくて射殺するような瞳で見つめていた。
「じゃ、じゃあ、まずこのニンジンから……」
「ドキドキ、ドキドキ」
「モグモグ……うん、すごくおいしいよ楼たん」
「きゃぁ～～～ん！あんあんあ～～～ん！すっごぉく嬉しいん♪」
「うん、この金平牛蒡も、卵焼きも。特にこのポークピッツが最高だね」
「きゃぁあああーーーーん♪直ちゃん、大好き～～～♪」
だきっ
楼ちゃんに抱きしめられる。
クンクン……ほのかに香る花の蜜のような汗のにおい、フェロモン、君は女の子だ……
「そいつは男よ」
美菜が水を差すような事を言う。
『……』
……ん？何だこの背中に突き刺さるような殺気は……ふと後ろを振り向くと、
『……な～お～と～？』
鬼、微笑む鬼がいた。
「ち、違うんだ……夕、これは、その」
『何が違うんだー！！！このすけこましぃ～～～！！！死んじゃえ！！！バカ！！！』
ガツン！！！
「あうっ！」
イスが飛んできた、モロ直撃。
「くんくん、直ちゃん、また新しい女の匂いがする……」
「ビクンッ！」

「今の『ビクンッ！』は何っ？！まさか、直ちゃん……また新しい女引っ掛けたの？！」
「違う、違うんだ楼たん。夕とはそんな関係じゃぁ………」
「夕？！ねぇ、夕って誰？！新しい女の名前なのっ？！」
ま、まずい。墓穴を掘ってしまった。な、何とかしないと……
「みゅーん、夕は直人の子供です」
「直ちゃんの浮気者ーーーーー！！！！！！！！」
バッキィイイイーーーーン！！！！！！！！

「皆さん、もうすぐ夏休みですが、我が校では今年も林間学校を行います」
ホームルームに担任の先生がそう言った。
僕の中学校は毎年、夏休みの初頭つまり7月末に全学年で林間学校という名の2泊3日の旅行がある。
無論、全学年と言ってもクラス単位で行動するので行く場所はクラスによって違う。
予算は自腹、林間学校と銘打っているものの実質それが我が校の修学旅行である。まぁ、修学旅行は毎年やらないが。
「ふむ……強姦学校か、何だかワクワクしてきたよ」
「みゅーん、何か湧いてるんじゃないんですかお前の脳内」
『……ふんっ』
最後のホームルームの時間でも未だに夕は不機嫌だった。
「2泊3日で1日目は山に、2日目と最終日は海で自然と触れ合ってもらう事がこの林間学校の目的ですのでくれぐれも浮ついた気持ちで望まないようにして下さい」
自然と触れ合ってもらう事、それが林間学校の目的であるがこんな

もの単なる形式上の決まりだ。
林間学校は毎年、山、海と行くところは決まっている。単純に山、海と言っても日本中には多数存在するので
毎年異なる山と海に行くことになる。山では主に散策が中心である者は川で遊んだり、ある者は山を散策したり、ある者はボーっとしてたり、基本的に自由行動だ。そして、海ではまぁ、決まっているがある者は海で泳いだり、またある者は砂場でナンパしてたりと割とこちらも自由行動だ、というか基本的に林間学校は生徒の意思を汲んでくれていたりするので割りとこの行事は人気がある。まぁ、欠点と言えば、マンネリ化であることだが。
「へぇー、楽しそうですね。今年の夏休みが楽しみですね」
「みゅーん、全くです」
「あ～、面倒臭いわねぇ……」
ルルーとミューたんは体験した事のない行事に楽しみにしている様子。
美菜は去年も行ったことがあるので内心『あぁ～またか』みたいな感じなのであろう。
しかし、美菜……お婆ちゃんみたいだな。
「そうだね、皆。今年は色んな意味で楽しもうじゃないか」
グループの仕切りやのごとく、僕はそう言った。
「直人さんは正直邪魔です」
「みゅーん、お前は来なくていいです」
「アンタがいなけりゃ少なくともっと楽しめたかもしれないわねぇ……」
……うーん、さすがの僕でも今の君達の反応は傷ついたなぁ、直ちゃんガックリ←（笑）

今年の夏はもう目の前まで来ている……

## 素直になれないの

『ねぇー直人ー』
家への帰り道、すっかりご機嫌になった夕は僕の首筋に腕を絡めながら聞いてきた。あぁ……何てことだ、もし夕が幽霊じゃなければ……夕の未成熟な身体の感触を楽しめるのに……あぁ、無念。
「……兄、顔、だらしない」
まちるは頬をプクーっと膨らませ、いつもと違う不機嫌な顔で僕を睨む。やれやれ、何て君は困った嫉妬子猫ちゃんだ☆ウフ、ウフフフ……
「まちる、愛してるよ（／／／）」
「…っ、ん、う、うん、私も、兄、愛し、てる……（／／／）」
するとまちるは頬をほんのり染め、少し俯いた。
「女ったらしの男が他の女を騙すときの常套句よね、それ」
「そんな……もちろん、美菜の事も愛しているよ……僕の愛は確かさ……その証拠に投げキッスを贈ろうじゃあないか……ん～、チュパッ」
「……ひぃ！何すんのよっ！き、気持ち悪いッ！」
バキッ
「やふっ」
美菜は僕の投げキッスのお返しに素敵なビンタを贈ってくれた。やれやれ、何て君は素直になれない幼馴染なんだ☆ウフ、ウフフフ……
そして、まちる、美菜の二人を攻略（？）した僕は次にルルーとミューたんの方に振り向いた。
「ひっ、なっ、今度は何をする気ですかぁ？！（泣）」
「みゅ、みゅーん、来るのか、来るのですか？！」
振り向いただけでこの反応。何て僕は人気者なんだ……ウフ、ウフフフ……

『……直人』
……ぬぅ？！刺激的な視線を感じる……そしてゆっくり振り返るとそこにいたのは……
『二度ならず三度まで……』
握りこぶしを作り、プルプル震える夕がいた。おしっこ我慢しているのだろうか？
『んなわけないでしょっ！！！このド変態ぃ～～～！！！』
「ぬぐっ」
夕の投げた石ころは僕の額にクリーンヒットした。
そして夕の方を見ると今度は少し大きめの石を両手に抱え、既にスタンバッっていた。どこにそんな大量の石があるのだろうか？
「ま、待ってくれ……夕」
『なによぉ～～～』
既に夕の右手が上がっていた、まずい。ここは何とかしないと……
「愛しているよ、夕（／／／）」
『そんなんで私が騙されるかバカーーーーー！！！！！』
バキィイイイーーーー！！！！！！
「グーグルッ！」

「えっ？水着……ですか？」
『……うん』
機嫌が直った夕が求めていたのは明日の林間学校に持っていく水着のことだった。
「無駄毛の処理はちゃんとしないとね。良かったらお兄さんがショリショリしてあげようか？」
「あんたはしばらく黙ってなさい」

バキッ
「ぐぅー！」
「みゅーん、でも夕は……」
「あ……」
「あは、あははは……」
「……ない」
ミューたん、美菜、ルルー、まちるの視点は夕のある1点に集まった。そう、THEおぱーい☆
『な、何よ何よ何よ何よ何よぉーーーー！！！！！皆して私を馬鹿にしてぇ！！！も、もちょっとしたら大きくなるんだからぁーーーー！！！！！むっきぃーーーーー！！！！！！』
夕は頬を染め取り乱し、僕の周りをグルグル飛んでいる。
「ウフフ、まぁまぁ……夕、そんなに取り乱さなくても将来的にはおっきくなるよ。僕に……揉み揉みされていればの話、だけどね、ウフフ……」
そして、僕は何となくルルーを横目でチラ見した。
「な、何で私を見るんですかぁ！？せ、セクハラで訴えますよっ？！（／／／）」
そして、次にミューたんを横目でチラ見した。
「みゅ、みゅーん……な、何ですか……」
「……はぁ～～～」
何だろう……この、胸に来るやるせなさは……つい溜息をついてしまったではないか。
「……こ、このチン●スメガネ……ぶ、ぶっ殺しますよ……」
そして、僕、ルルー、美菜、ミューたん、まちる、夕は明日の林間

学校に持っていく水着をデパートで買いに行く事に……
「わぁ～、可愛い柄の水着が沢山ありますね～」
「みゅーん、この水玉模様のビキニなんてルルーに似合うんじゃないですか」
「び、ビキニ……露出度が高すぎですっ、恥ずかしいですよ～（／／／）」
「うん、ミューたんはこっちのスク水が似合うんじゃあないかな、うん」
「……どこを見てるです、ぶっ殺しますよチ●カスメガネ」
『ね、ねっ！美菜！これなんてどぉ！』
「紅色のビキニにパレオ……大人の女を感じさせる色ね。うん、ごめん。あんたには無理」
『ガーン？！はっきりすぎるっ？！』
女性陣はデパートでの買い物を楽しいでいる様子。ウフフフ……
では、僕も近くから彼女らを視姦……
「……待ちなさい、あんた何ふっつうにこの場に溶け込んでんのよ」
美菜にすごい眼で睨まれた。
「……しまった」
「何がしまった、よ。さっさとこの場から立ち去れ」
「い、嫌ですぅ……（／／／）」
「何、赤くなってんのよ。出て行かないときっついのその腹にぶち込むわよ」
「ぶ、ぶち込むっ？！美菜……君はいつの間にそんな特殊な趣味を……フタ●リ、きっと美菜のはマンモスおっき…」
ドガスッ
「ふぉおおお……」
「もう一発いく？」
「……ふっ、フ、フフ、フフフ……だが、僕は引くわけにはいくまい。こんなもので僕の中にひそかに潜むラブ・アンド・ピースは壊れない。そう、決して。そして君達は僕と一緒に楽園という名の

ホモサピエンスに導かれるんだ……あぁ、このホットな気持ちは何だろう…あ、熱い、とっても、熱いです、ウフフ（／／／）」
「……何言ってんの？気持ち悪っ」
「あぁ！せめて！せめて！搾るだけでいいからぁ！！！お願いなのですぅ～～～！！！」
僕はその場で土下座をし、哀願する。蹴りは飛んでこない。代わりに女性陣の冷たい視線が飛んできた。
「な、何を……搾るんですか……？」
ルルーが僕に問う。
「何って……それはもちろん……」

「おっぱい」

その瞬間、目にも見えぬルルーの高速ビンタが僕を襲った。

追伸。
彼女のビンタは結構、気持ち良かったです。９８点。

## ハーレム要員名簿

藤本直人（ふじもとなおと）　二つ名『愛の伝導師』

愛、それすなわちエロティック。

主人公。

中二、だが彼は中二病には感染していない。彼の価値観は全て『愛』に委ねられている。従って、愛なき相手には決して手を出さないし、出そうともしない。だが、それは例外中の例外であって。少なくとも彼が今まで出会ってきた人物で彼の目に止まらぬ者はいなかった。そう、例えそれが男であったとしても……このような彼の人格を作り上げた人物は実は美菜。直人と美菜の過去はいずれ作中で語られるであろう……昔日は素直で明るい健康少年だったとか。

ルルー（ルルーナ・バチカン・チュパカタラナアゲインストリコラステイン・アークライン）　二つ名『乳オバケ』

貴方の願いはなんですかっ！？（／／／）

ヒロインその1、否、藤本直人のハーレム要員その1。

おっぱいでいっぱいな魔法少女。だが、魔法少女としての力は半人前でどうも中途半端な魔法しか使えないようだ。ついでに彼女自身も割りと中途半端、というか大雑把な性格である。何故彼女が直人の夢に飛び込んできたかは今のところ不明。しかし、直人と彼女が

出会ったキッカケ。それは直人の父親の父親のための父親による犯…（略）何故か学校では自然に溶け込んでいる様子。これも、中途半端な彼女の魔法によるものなのだろうか？なら、きっといつかボロが出るかも。

七瀬美菜（ななせみな）　二つ名『ツンデレもどき』

誰が貧乳よっ！！！

ヒロインその2、否、藤本直人のハーレム要員その2。
ツンツン貧乳幼馴染。オーラは割りと大人っぽいのだが容姿がいかんせん……子供っぽい。だがそのギャップが萌えるとのこと（直人談）凶暴な性格で暴力的（↑直人に対して）彼女は暴力的ではあるが決してSではない。（ちなみに直人は真性のMだ）思ったことをすぐ口にしてしまうため、きっつい性格だとクラスの同級生に思われている。だが、真面目で成績も優秀、学年での総合成績は常に10位以内をキープ。うん、これは可愛いツンだ。

藤本まちる　二つ名『危険な果実』

…っ、ん、う、うん、私も、兄、愛し、てる……（／／／）

ヒロインその3、否、藤本直人のハーレム要員その3。
直人の実妹。ブラコン（ついでに直人も真性のシスコン）基本、無口。喋っても何故かどこかしどろもどろ。なので作中であまり台詞がない。彼女自身、女たらしな兄に対してあまり文句は言わないが、結構嫉妬深い。あまり文句を言わない代わりに態度に出る。うん、これは可愛いツンだ。えっ、実妹でヒロインはまずいんじゃないか？って？……そんなもの関係ないね。愛、そこに愛があれば法律だろうと何であろうと勝てまい……ウフフ（直人談）

日向水鳥（ひなたみとり）　二つ名『ダークサイトに落ちる幼女』
直人先輩、そろそろ本気で糞キモいんでやめてもらえます？ぶっ殺しますよ♪

ヒロインその4、否、藤本直人のハーレム要員その4。
まちるの親友。登場当初はデレであったが、現在ではツン……というよりヤンツン（？）実は作者でも対処しにくいキャラ、だからわりと登場回数が少ない。多分、これからも少ないと思う。でも、だからこそ言っておこう……うん、これは可愛いツンだ。

藤崎茜（ふじさきあかね）　二つ名『女版、藤本直人』

『微妙な』味ーーーそう、『未完成な』味が……ソソラレルんじゃあないかな？

ヒロインその5、否、藤本直人のハーレム要員その5。
中一の頃の直人のクラスメイト。彼女も良くも悪くも直人同様、変人である。ピアノが大の得意でよく放課後に学校の音楽室を借りてピアノを演奏、自身の曲を作詞作曲しては直人に聞かせ、感想を求めている。わりとどうでもいい知識を豊富に持っているのでよく、彼女には説明キャラとして使わせてもらってます。学年での成績は常にトップの才女。同級生だが、皆のお姉さん的な存在である。

ミュー　二つ名『ニンジンは嫌いなのです』

みゅーん……とんだ、お盛んなモンキー野郎ですね、このホー○ー野郎。

ヒロインその6、否、藤本直人のハーレム要員その6。
ウサ耳幼女の動物人間（ハーフ）。ルルーのペット。みゅーんを語尾や最初につけるのが癖である。聴覚じゃなくて嗅覚が非常に発達している（現に直人のアレの匂いを発見したことがある）何故、風呂場から現れたのかは不明。経緯は不明だが、ルルーの中途半端な魔法のせいで動物人間になったとか。口が悪い（↑主に直人に対して）ウサ耳を取られると発狂するとかなんとか。

名城夕（なしろゆう）　二つ名『ノーパン幽霊幼女』

穿いてないわよっ！悪いっ？！

ヒロインその7、否、藤本直人にハーレム要員その7。ノーパンで幼女の幽霊。この世を彷徨っている内に直人と知り合う。一応、ヒロインの中では1番若い。彼女は結構我儘で我が強い方ですが可愛いです、と藤本直人は語る。幽霊になった経緯は今のところ不明だが、自分に気付いてくれた直人のことが気になっているようです。ちなみにまな板です。何が？アレです。

その他、直人を取り巻くサブキャラクター達。

美村友恵（みむらともえ）……お隣の独身、金髪美女。S。

堂島楼流（どうじまろうる）……可愛いオカマ。直人の愛人。登場するたびに格好が変わる。

五十嵐幸太郎（いがらしこうたろう）……ストーカー。直人の敵（とも）であり微ホの字な人、つまりバイ。

町田風菜（まちだふうな）……司会・進行の人。

下村透（しもむらとおる）……喫茶店のオーナー。耳元で女の子の名前を囁くのが趣味。

実に悪趣味。

美影千夏（みかげちなつ）……お向かいさんの小６の女の子。傍観者的な存在。

世渡邦彦（よわたりくにひこ）……裏よっぴー。ザワ…ザワ…空気……っ！何と言う空気……っ！

## 山と川と魔法少女

林間学校1日目。
バスで揺られること3時間、僕らのクラス御一行は山に到着した。
「げろげろげろげろ～～～～～～……うぷっ」
ルルーは乗り物酔いに弱い人だった。……何故だろう、そんな今まさに目の前で四つん這いで吐いている彼女が愛しく見えるのは。よし、そんな君に捧げる一句。
「森の風　ゲロゲロ女子（おなご）　いと愛し」（バイ直人）
「何言ってんの、気持ち悪っ」
美菜は僕に軽蔑の眼差しを向けた、やれやれ……どうして君は素直になれないのかな。よし、そんな君に捧げる一句。
「森の精　ツンデレ妬む　僕照れる」（ゲイ直人）
「ねぇ～、ミュー！こっちでテント張るの手伝って！」
「みゅーん、了解しましたです」
既に美菜は僕の視界から消え、遠くでミューたんとテントを張る準備をしていた。
「げろげろげろげろ～～～～～～……うぷぷっ、気持ち……悪いですぅ、うっ、うっ（泣）」
そして、ルルーはまだ泣きながら吐き続けていた。あまりの可哀想なその姿に僕はルルーの傍へ駆け寄った。
「ルルー……大丈夫かい？」
「うっ、う……直人さん」
「さすってあげようか？おっぱい」
『こぉの……変態っ！シスコン！ナルシー！色欲魔っ！鬼畜っ！死んじゃえ！バカッ！バカ！バカーーーー！！！！！』
ボロボロボロボロボロボロ……
ルルーに声を掛けた瞬間、夕の声とともに空から大量の川原の石が降ってきた。

「あ、ちょ、待って、アッ、痛っ、痛っ、痛っ！あ、何これ、この、アッ、新感覚な痛み！忘れかけていた、アッ、あっ、あの子の、アッ、痛みっ、あふっ、んっ、何か、いぃ！、アッ、もっと、もっと、あっ、それ、そこっ、アッ、アッ、気持ちいいよぉ……！アッ、アッ、アッ、アッーーー」

「げろげろげろげろ～～～～～……ぐすっ、うぅ、まだ止まりません、気持ち悪いよぉ……」

クラスの担任から支給されたテントは三人用。従って女子、男子と別れて各々が仲良し3人組でテント作りに励むという素敵なイベントが開催された。

「どこが素敵なイベントなんだよっ！何で俺がお前ら変態共と組まなきゃならんのだっ！」

何故か幸太郎君はすごい剣幕で僕と楼タンを罵った。

「幸太郎君ひっどぉ～い！クラスからあぶれたようだからせっかく私と直ちゃんが誘ってあげたのにぃ！その言い草はひどいよぉ！！！プンっ！」

「やかましいっ！お前らもクラスからあぶれてるだろうがっ！それと貴様っ！そのカマ口調やめろっ！気持ち悪い！あと何でてめぇはラ〇ちゃんの格好してんだよっ！違和感バリバリなんだよっ！背景と合ってないんだよっ！カマ野郎っ！」

今日の楼タンの格好はエロティックで刺激的な格好だった。

あぁ、あのつるつるの太ももで膝枕して欲しい……そ、それで、色んな肌が露出した部分をスリスリ、モミモミ、ペロペロ、舐め舐めっ……うっ！ぐぁぁあああーーーーー！！！！！エロイ！エロすぐるっ！エロすぎて数秒後には果ててしまいそうだ……

「ハァハァ……トイレ、行ってきます……（／／／）」
そして、夢と希望と愛の詰まった股間を抑えて僕は公衆トイレに駆け込んだ。
「そしてお前は何、興奮してんだよっ！変態野郎っ！！！きもいんだよ！お前らっ！」
「な、なぁ……俺もトイレ……行っちゃっていいかな、エへへ（／／／）」（男子Ｐ）
「お、俺も俺もっ！！！五十嵐っ！俺もトイレにイッチャって……いや、行っちゃっていいかな、ハァハァ……（／／／）」（男子Ｑ）
「な、なぁ……幸太郎、じ、実は俺……お前のこと……（／／／）」（男子Ｚ）
「うおっ？！な、何だお前らっ！逝けよっ！勝手に！俺に群れるなっ！気持ち悪ぃなっ！俺はこいつらのリーダーじゃねぇんだぞっ？！あと男子Ｚ！お前、絶対後で泣かすっ！！！（汗）」

「さて、これでテントは完成ね」
テントを組み立て始めてから一時間後、ようやく私達の寝床であるテントが完成した。私は去年も組み立てたので順調にいく……わけもなく、やっぱり久しぶりのことだったから四苦八苦、それでもミューの協力あってか完成した。周りの皆はまだ苦戦中の模様。どうやら比較的私達は周りに比べて早く終わったようね。
「そうですね、ようやく一息つけます」
「そういえば……ねぇ、ルルーはどこいったの。さっきから見ないんだけど」
「みゅーん……あそこでまだ吐いてます」
ミューが指を指した方向を見ると川沿いで四つん這いになり、ゲロ

ゲロと汚物を吐くルルーの姿があった。
「あの子……確かバスの中でもここに着いたときも吐いていたわね……それにもう着いてから一時間よ？どんだけ乗り物酔いに弱いの……（汗）」
「みゅーん、仕方ないのです。ルルーは魔力を司る者、美菜やまちるのような普通の人間とは違うのですから、魔法を駆使すれば身体が人間よりも弱くなるのは当然のことなのです」
ミューは未だに吐き続けるルルーの姿をじっと見つめていた。その表情は無表情でありながら何か思うことがあるのか、いつものミューと少し様子が違っていた。よく分からないけど……あの子も大変なのね。
「そう、それで……あの男（バカ）と幽霊ちゃんはどこいったのよ」
「みゅーん、あそこに……何やら揉めているようです」

『う～～～っ、カレー！絶対カレー！カレーじゃないと許さないんだからぁ！』
「やぁん！カレーなんて定番過ぎてちょ～つまんな～い！ケーキっ！ケーキぃ～！ケーキしかないのぉ！ねっ？直ちゃんもそう思うでしょ？！」
「お前バカかッ？！何でキャンプでケーキみたいな甘ったるい女が食うようなモン食わなきゃなんねぇんだよっ！やっぱ漢なら煮物だろうっ！？野外で食う筑前煮！これがうまいッ！」
私達のテントから少し離れたテント……直人達のテントの前で夕と堂島（オカマ）と五十嵐君が何やら今日の晩御飯のことで言い争っていた。直人は腕を組みながら黙って三人の様子を傍観していた……って、あいつら夕のこと見えてんじゃない……これもやっぱり茜さんの

言っていた直人の影響なのかしら。
『筑前煮ぃ～～～？バッカじゃないっ！何でキャンプで筑前煮なのよっ！気持ち悪いっ！あんたのその思考が気持ち悪いわよぉ！』
「ほんとっ！きもいぃ～～～キャンプで筑前煮とか、ほんとケダモノ！ゲテモノ！オゾマツ！」
「何で筑前煮って言っただけで俺の人格まで否定されにゃならんのだっ！（汗）謝れっ！お前ら全国の筑前煮愛好家達に謝れっ！」
ほんとくだらない争いね……
『「直（人・ちゃん）は何が食べたいの？！」』
夕と堂島は今まで黙って傍観していた直人に言い寄った……
「僕は君達を食べちゃいたいな☆ウフフ（／／／）」
ゾクゾクッ！……あら？何でかしら？こんなに離れているのに今すんごい鳥肌が立ったわ……
『やっぱり！直人に聞いた私がバカだったわよぉ～～～！』
数秒後、夕は直人に向かって大量の川原にあった石を投げて攻撃していた。
「や、やぁん……直ちゃんったらぁ……で、でも乳首くらいなら……（／／／）」
堂島は1人でブツブツ呟いていた。

「……みゅーん、何かそのうちこっちにまで飛び火が移りそうですね。美菜、私達は少し離れたところで晩御飯の準備しませんか？」
「……そうね、私達は川の上流あたりでやりましょ。ミューはルルーを連れてきてくれる？私は食材やら道具やら持って行くから」
「わかりました」
何やら騒がしい連中を尻目に私達は退散していくのであった。

## 僕の彼女の攻略法

小夏頃は昼が長く、夜が短い。
さしあたってこの七月の終盤の山中も例外ではないといえよう。ましてや、山奥なのだから少し薄暗くなっただけですぐに夜を感じるだろう。そんな、日もとうに暮れ夜を迎えた頃、僕らのクラスはあるイベントが開催されようとしていた。
「さぁー！いよいよっ、明日は皆さん、特に男子のイン〇連中がウハウハしてウッキーモンキーキッキキーしてお楽しみにしているであろう海に行きますっ！ですが……その前にっ、今日は山なんといっても山っ、山ですっ！山さんですっ……さてっ、ここで問題ですっ！山と言えばっ！？はいっ、そこのキザメガネっ！回答プリィーズ！！！」
司会の町田風菜さんが僕に指をさした。ふむ……山、山といえば……
「獣……山には獣がたくさんいます。そう……ケダモノという名の、ね」
「そうですっ！山と言えばっ！暗いっ！オバケっ！オバケがいますっ！多分っ！そこで皆さんにはこれからクジで同じ番号になった人同士でペアを組んでもらい、このキャンプ場を出て少し奥にある神社で今、自分の中にある想いを告白してもらいますっ！何を告白してもらっても結構ですっ！……もしかして『あ、あのっ……ね？実は私……たっくんのこと……（／／／）』なんて展開がアリアリアリアリ、アリーベデルチっちゃうかもしれませんっ！！！きゃー、桃色白書っ！まさしくこの肝試しというイベントが恋のキューピットとなりえるのかもしれないのですっ！さぁ、ではさっそく始めましょうっ！！！」
アリーベデルチは確かイタリア語さよならだとかそういう意味だったと思うのだが……もしかしたら、今クラスで付き合っている恋

人同士がペアになってアリーベデルチっちゃう可能性もあるのかもしれない。もし、そうなったとしたら目も当てられないな。恋のキューピットどころか悪魔のキューピットとなりえるかもしれない。だが、しかし。僕にとってはどうだい？これはチャンスと言う名のR18展開になりえるかもしれないのだ。フフ……ウフフ、フフ……フフ……

「……いっ、直人さんがニヤニヤしていますっ……！」

「……どーせ、コイツの頭の中にはエロイ事で満たされているんでしょうよ。ほっときなさい、まともに相手なんかしてたらキリがないわよ」

「……みゅーん、もうツッコミ遅れだと思いますが、ちなみにさっきの獣とケダモノをかけてる、アレ。全然うまくないですよ」

ルルーの僕を怯えた表情……いい、実にいいじゃないか……そう、例えばルルーとペアになったとしよう。

『ルルー……僕は君に伝えたい事があるんだ……』

『ひっ……嫌ですっ！聞きたくないっ……！聞きたくないですぅ！！！』

ルルーは神社の賽銭前で頭を抱え込みしゃがみながらそんな事を言った。そう、彼女は怯えているのだ。普段僕が彼女の事をオッパイでしか見ていないから自分自身は眼中には無い、そう思い込んでいるのだ。だが、実はそれは違う。僕は決して胸フェチではない。

『ルルー……何をそんなに怯えているんだい？話してごらん』

だが、いくら僕がそれを言葉で伝えたところで伝わるものも伝わらない。だからまず、彼女を解放してやらねばならない。そう、話を聞いてあげることが先決なのだ。

『……うぅ、ひっく……だ、だってぇ』
彼女の頬はすでに涙で濡れており、それを僕は指先ですくい、僕はそれを口でしゃぶり味わった。
『……あっ』
『……しょっぱい。でも、君の心は純粋なんだね……僕のことでこんなに悩んでくれるなんて』
『……あ、あうぅ（／／／）』
ルルーは頬を真っ赤に染めた。ふふっ、本当に無垢で汚れのない赤ん坊のような可愛らしい子だね、君は。
『……だって、だってぇ』
『……おっと、その先は……もう言わなくていいんだよ？ルルー……僕は君という世界にたった一つしかない『君自身』が好きなんだ。……それだけは分かってほしいんだ』
『……直人、さん』
そして、彼女は僕に身体を預ける。僕は彼女の身体を抱きしめ、彼女の胸に手を持っていくーーーーーーそう、僕はオッパイを通して君自身を見ていたんだーーーーー言葉だけでは伝わらなくても二人の身体を重ね合わせれば言葉以上に色々なものが伝わるーーー僕はそう信じている。ｆｉｎ（藤本直人の愛の妄想劇場その１　完）

「ルルー……僕はオッパイを通して無垢で純な……そう、君をじっと見続けているんだよ」
「な、何を言ってるんですか……何か寒気が……いつも以上に気持ち悪いです直人さん、ちょっと私から離れてくれませんか？」
ルルーは何故か身震いしながらクジを引きに行った。

いつもツンツンな君へ送る愛のラブソング……（／／／）
『なっ！何で私があんたとペアを組まなきゃいけないのよっ！』
七瀬美菜、僕の前で決してデレない僕の愛しの恋人。一方的な僕の押し付け愛だと勘違いする方々が多数いるだろうが実は違う。彼女は……実は僕の前でだけツンでいられる体質なのだ。従って、普段はツンツンでとっつきにくいタイプなのだが、突然のハプニングには結構脆い。まさしく、ジェンガ（？）のようなデリケートな女の子と思ってくれて構わないだろう。
『……僕は、美菜とペアになれて嬉しいよ』
僕は微笑み１００％な顔を彼女に向けた。すると彼女は……
『私は嬉しくないわねっ、あんたみたいな変態とペアになるなんて！ほらっ、さっさと終わらすわよっ！』
デレてくれない、当たり前だ。これぐらいの揺さぶりではデレてくれないことは分かっていた。僕はそのまま彼女の後を追って行った。
『……』
そして、森の中。結構暗くて足元はおろか周辺も暗くて辺りはよく見えない。そして、僕は彼女につかず離れず、そのぐらいの距離を保って彼女の後ろについていった。
『……』
彼女は何も言わない。僕も何も言わない。そう、この雰囲気が重要なのだ。こちらから喋ってはいけない。彼女から喋りかけてきても一切無視……それはすごく心痛いことなのだけれど。
『……ねぇ』
１０分後、彼女はついに僕に話しかけてきた。しかし……反応してはいけない。ここからなのだ、ツンツン娘の攻略は。僕は返事もせず、じっとその場で立っていた。

『……ねぇ、ねぇっ！聞いてんのっ！？直人っ！？』
彼女は次第に焦りだす。これは僕が狙っていた展開だ。『不安』にさせる。これが重要なのだ。幸い、暗いので僕が返事をしなければ後ろにいるのかいないのか、分からないのだ。
『……ねぇ！聞いてよ……聞いてったらぁ！！！』
彼女は悲痛の叫びを上げる……もう、真っ暗な闇の中で一人は不安すぎるのだろう。だが……もう少し、もう少しだ……彼女が落ちるまで。
『……ねぇ、……うっ、うぅ』
……
『うっ、うぅ……ぐすっ、ひっく……な、なぉ、直人ぉ……』
……やった、ついに……デレた。
『……美菜』
僕は声を上げ、彼女の傍に駆け寄った。
『っ！直人っ！』
彼女は僕に気付くとすぐさま駆け寄り、僕を抱きしめた……あぁ、柔らかい感触が僕を包む……サンドイッチに包まれているようだ……（／／／）
『……ごめんね、美菜。いぢわるしちゃって……』
『ううんっ！いいっ！そんなことはどうでもいいのっ！直人大好きっ！（／／／）』
そして、彼女の唇が僕の唇と重なるーーーーいいんだ、これで。君はツンツンでも、僕は君を愛している。君の、ありのままの君を見せておくれ、それが僕の願いですーーーーーｆｉｎ（藤本直人の愛の妄想劇場その２　完）

「……美菜、君は君のままでいてくれ……ツンツンな君ーーーー
僕は君を愛している……（／／／）」
「ルルーは何番だった？」
彼女は既に僕から離れ、ルルーの元に駆け寄っていた。そして、僕は先ほど引いたクジを見つめる。そのクジには『６』と書かれていた。僕はミューたんに駆け寄った。
「ミューたんは何番だったんだい？」
「……９番です」
「そうかい……それは残念、僕は６番だったよ」
「みゅーん、やったぜ、みゅーん」
ミューたんは大喜びしていた。
「でもあれだね、僕が６番でミューたんが９番だったのは残念だけど、僕とミューたんの番号を合わせれば『６９』……フフ、何だか数奇な運命を感じるね」
「みゅーん、感じないで下さい、死んでください」
ミューたんは無表情でそんなことを淡々と言った。フフ……素直じゃないウサギちゃんだ。
「嫌いなのかい……じゃあ、もしかして君は……陵辱されるのがお好みだとか……？」
「お前、本当に殺しますよ」
今度は無表情で、しかしながら殺気を僕に放ち、それから彼女は人波に消えていった。フフ、いつか君のその無表情な顔をバリエーション豊かにしてやるぞっ♪

「おーい、６番の可愛い子はどこなんだい？」
僕はペアの女の子を探しているが、なかなか見つからない。うーん

……どういうことだろうか？
「……おい、藤本直人」
僕に声を掛けてきたのは……五十嵐幸太郎君。げっそりしている……どうしたのだろうか？
「……なんだい？幸太郎君はもうペアの女の子は見つかったのかい？」
「……」
彼は首を横に振り、無言で僕に紙切れ……クジを見せて来た。そこに書かれていた数字は……『6』という数字だった。

## False Love～偽りの愛～

「……うぅ、美菜さんっ！は、離れないで下さいよぉ～～～……」
「……」
私とルルーは奥の神社に続く山道を歩いている。夜の山道は暗いし、舗装されていないので歩きにくい。それに加え、今私の腕にしがみつくヘタレ魔法少女。……正直疲れるわ。
「……ねぇ、ルルー」
「は、はひっ！な、何でしょうかっ！！！み、みなひゃんっ！！！」
私が声を掛けただけでこの反応。ビビリすぎ。
「怖いの？」
私がそう尋ねると、ルルーはビクッと反応し、ロボットのようなぎこちない動きで私に顔を向ける。
「…はっ、ははっ、い、イヤですねぇーみ、美菜さん。び、びびびびびってなんかいませんよぉ～～～……ま、魔法少女はビビリませんッ！こ、これは世界の常識ですっ！！！あ、はははは～～～～～」
ルルーは顔を真っ青にしながらそんな事を言う。……どう見てもビビッている。
「……」
「…はっ！な、何ですかぁー！その……『こいつヘタレだわ』みたいな目はぁ！？ほ、本当ですよぉ！？び、ビビッてなんかいないですっ！ビビッてなんかないんだからぁ！！！ううっ、うっ」
ついにはルルーはその場でへたり込み、グスグスとすすり泣きし始めた。……何、この可愛い生物。こんな姿見たら直人じゃないけどますますいぢめたくなるじゃない。
「うっ、うっ、どうせ私はオバケを見てお漏らしするヘタレ魔法少女ですよぉ……うっ、うっ、どうせ私は夜中に怪奇音が気になって一人で怖くて眠れなくて寝不足になるヘタレ魔法少女ですよぉ……

うっ、うっ、どうせ私はお会計の時にレジの後ろの殺気を放つオバサンにビビッて紙幣で払ってお財布の中の小銭を増やすヘタレ魔法少女ですよぉ……」

……体験談？最後のはあんまり関係ないんじゃ……それにしても、何か萌えるわね。

「……ルルー、後ろに……」

「……えっ、はひっ！？う、後ろにっ！？な、何ですかぁ〜〜〜（泣）」

「……」

「いっ、いやぁあああああああああーーーーーー！！！！！！！！オバケ怖いですぅうううううううーーーーーーーー！！！！！！！！（泣）」

「……夕がいるわ。……って、あ」

ルルーはそのまま逃げるように暗闇に消えていった。……あっちゃ〜〜〜、ちょっとおいたが過ぎたかしら。

『……何かすごく心外なんだけど』

夕は山道の脇の草むらから現れた。首だけいきなりニョコッと出てくるものだからちょっとドキッとしたけれど。

「あんた、直人の後に着いて行ったんじゃないの？」

『だってぇー、何かあの二人と一緒にいると辛気臭いんだもん』

「……そういえば、直人のペアって誰なの？」

……まずいわね、直人の対策を考えていなかったわ。もし、クラスの女子の誰かがペアにでもなったりしたら……全国ニュースなんてことに……あぁ、事前に殴って気絶させて置けばよかったわ。

『……あの筑前煮男。もぉ男二人が仲良く手を繋いで並んで歩いている姿見てたら気持ち悪くて途中で吐きそうになったわよぉ！！！あぁ、もぉ気持ち悪いったらありゃしないっ！！！今思い出しただけでも鳥肌立ってきたわよぉ〜〜！！！』

……五十嵐君ね。良かった……とりあえず大惨事は避けられたわね。

「……そう、じゃあとりあえず逃げたルルーを探しに行くわよ」

『あいあいさー』
ルルーが逃げていった方向は都合よく先の神社の方ね……私と夕はそのまま先へ進んでいった。……モノホンの幽霊と肝試しする私って一体……

一方、ミューは……
「……みゅーん、本気と書いてマジですか」
「マジマジぃ♪ヨロシクね♪みゅ～ちゃんっ♪」
堂島（オカマ）とペアになったことを知ったミューは呆然とスタート地点で立ち尽くしていた。
「……みゅーん、ところで貴方は男ですか、女ですか」
「両方だよぉ♪きゃぴ☆」
堂島（オカマ）はまるで少女漫画で出てくる美少女のような……キャピキャピした様子ではしゃいでいた。ーーー世の中には不思議な生き物もいるのですねーーーそんな堂島（オカマ）の様子にミューはそんな事を思っていた。
「……みゅーん、とりあえず……堂島、行きましょう」
「やぁーん！うさぎちゃ～～～ん！私のことはぁ、楼タンって呼んでぇ～～～」
堂島（オカマ）は横に腰を振りながら涙目で懇願する。その姿に少し殺意を覚えたミューであった。
「……楼」
「ワクワク♪ワクワク♪」
純粋で無垢なオカマの瞳がミューに向けられる……何故かミューは少し羞恥を覚えた。
「……楼……た、た……（／／／）」

「ワクワク♪ワクワク♪」
「……」
むぎゅう〜〜〜……ミューはその羞恥に耐え切れなくなり、堂島（オカマ）の両頬を抓った。
「やぁん！いたいぃ〜〜〜（泣）」
「……とっとと行きますよ、堂島」
ミューは早足でその場を後にし、森の中へ入っていく。
「やぁん！まってぇ〜〜〜ミューちゃ〜〜〜んっ！！！」

一方、直人×幸太郎ペアは……
「「……」」
……どうして、どうしてこんな展開になった。僕の予想ではかぁいい女の子といちゃいちゃラブラブな展開だったのに。どうして……嘘だ……夢だ、これは悪夢なんだ……こんなイカツイ男とペアを組むなんて悪夢でしかない。
「……ところで、幸太郎君」
「……な、なんだよ」
「……さっきから気になっていたのだが……この手はなんだい？」
僕の手を握る手、それは幸太郎君のゴツイ手だった。……痛い、それに何だか汗ばんでいるのか気持ち悪いです……
「……べ、別に……いいじゃねぇかよっ（／／／）」
何故か頬を赤く染め、そっぽ向く幸太郎君。……何だ？萌えない、全然萌えない。なのに……何だコレは……僕の下半身が反応している……全然萌えないのに。……愛？そこには愛があるからなのか？だから、こうも僕の下半身は反応しているのか……？
「……もしかして、怖いのかい？」

「……こ、怖くねぇーよっ！！！おまっ、バカじゃねぇ！？」
ますます顔が蒼白になる幸太郎君。……何だ、萌えないのに。萌えるはずがないのに……何だ、このっ……胸の高鳴りは……うっ、うう……
「……ビビッているね、幸太郎君」
「び、ビビッて何かいないんだからねっ！？」
……ツンデレ、馬鹿な……こんな……こんな、どこにも萌える要素はないのに……反応する僕の下半身……嘘だ、嘘だ……こんな、こんなツンデレ僕は認めない……うっうう……頭痛が……そして、僕は吐き気に耐えながら幸太郎君と目的の神社へ向かっていくのであった。

## The love that is arising～芽生えつつある愛～

「……道が左右に二つ分かれているわね」
逃げたルルーを追って、私と夕はさらに奥に進むと左右に分かれる二つの道を発見した。右の道はすぐそこに石造りの階段が見える。一方、左の道は暗闇で先の方までは見えない。
「まぁ、普通に考えれば右の道が目的の神社へ進む道ってことになるけど」
『……問題はルルーがどっちの道に逃げたかってことよね』
そう、問題はそこだ。たとえ右の道が神社への正解の道だと分かっても、ルルーが必ずしもそっちに行ったとは限らないのだ。見当違いの方向、すなわち左の道に行った可能性もあるのだ。
「あの子何か雰囲気からしてアホっぽいから左の道へ逃げたって可能性もあるわね」
『……美菜って結構平気で酷い事言うよね（汗）』
……？そんなに酷い事言ったかしら？思った事をそのまま言っただけだけど。
『でも巨乳の女の子って決まってアホっぽい子が多いのは確かだよね』
「……あんたもすごい偏見入ってるし、酷い事言ってるような気がするけど。あと、全国の巨乳の女の子に謝れ」
何か手がかりがあればいいんだけど……手がかり……
「……匂い」
『え？何か言った？美菜？』
「ルルーの匂い、それを辿っていけばいいんじゃないかしら」
『はぁ！？そんな……犬じゃあるまいし、手がかりにならないわよぉ！！！』
「いるのよ、犬以上に匂いに敏感なのが」
『……え？』

その頃、ミューと堂島（オカマ）ペアは……
「やぁん～暗いぃ～怖いぃ～死んじゃうよぉ～～～！！！」
「……」
ミューは堂島（オカマ）にべったり引っ付かれて暗闇の獣道を歩いていた。ちょうど、美菜とルルーのペアと比べて5分遅れで出発している。
「……堂島、そろそろ私から離れてくれませんか。暑苦しいです、ていうか離れろ」
「無理無理無理無理ぃ～～～離れたら死んじゃうのぉ！呪われるのぉ！はうぁああ～～～ハァ、ハァ……オバステヤマニカエリタクナイ、オバステヤマニカエリタクナイ、オバステヤマニカエリタクナイオバ（エンドレス）」
堂島（オカマ）は真っ青な顔で目を閉じ、何やらブツブツ呟き始める……
「……何ですかその不穏な呪文は。貴方の方がよっぽど怖くて気持ち悪いです。止めてください」
ガサガサッ
「はううぁーーー出た！！！」
「みゅーん、風で草木が揺れただけです」
ガサガサッ
「はわわぁーーー出た！！！」
「みゅーん、風で草木が揺れただけです」
ガサガサッ
「あわわぁーーー出た！！！」
「みゅーん、風で草木が揺れただけです……ていうかお前そろそろ学習しろよ、です。あとその、ま○だお○だのお○だ的なノリで驚くのやめてくれませんか……何故かイラっとくるんで」

怖いものが苦手な人間は五感（視、聴、嗅、味、触）が過敏であるとよく言われる。だが、それは正常な意味での捉え方でなく曖昧で信用できない。つまり、そこに『無いもの』を『在るもの』として捉えがちであるということである。幼児が暗闇を見て泣き出すのもコレ所以であると言われている。……もしかすると子供が泣いている暗闇の場所は……

「ぎゃぁあああああああーーーーーーーーーー！！！！！！！！！」

「みゅっ！？こ、今度は一体何ですか……びっくりするじゃないですか」

「めっ、目の前に裸の落ち武者が……」

「……何も無いですが。貴方のメルヘンな妄想ですか、分かります」

「分かっちゃだめぇえええええええーーーーーーーーーー！！！！！！！！！（泣）違うのぉ！本当に、本当にっ……いるのぉ！し、しかも……こっちを見つめて……勃起しているのぉ！！！」

「何を言ってるんですかお前は。メルヘンにもほど……？」

ボッ……

ミューが前方に目を向けるとそこには、青白い炎がユラユラと左右に振り子のように揺らいでいた。その青白い炎は何やらこちらへ赴くよう手招きしているようにミューには見えた。

「……」

「？どぉしたの？ミューちゃん？何だか顔色が悪いようだけど……？」

「……堂島には見えないのですか」

「えっ！？ミューちゃんにも見えたの！？裸の落ち武者軍団！？やったぁ！これでミューちゃんも私と同類だぁ～！」

「ちがっ、そっちじゃないです。……その、霊魂のような……」

「？」

ミューは堂島（オカマ）に問いただすも、堂島（オカマ）はワケがわからないといった表情を見せた。つまり、ミューには確かにその青白い炎という存在が

見えているのだが、堂島には見えていないということになる。しかし、青白い炎という存在も堂島(オカマ)が見える裸の落ち武者軍団同様、確信が持てない一種の幻かもしれないのでミューは強く堂島にそれを伝えられない。
「と、とにかくです……さっさと先に進みましょうです、みゅーん」
「……えっ？やぁん！なっ、何で私の背中を押すのぉ～～～？ミューちゃ～～ん！？」
「うっ、うるさいです……さっさと行くのです、みゅーん」
「いっ、いやっ！目の前に裸の御侍さんがっ……！ひっ……！いやぁあああああああーーーーーーーーーーん！！！！！！！！！！！！」
前に出ることを拒み、悲鳴を上げる堂島(オカマ)の背中を押しながらミューはひそかに己の内たる恐怖心に耐えながら目的地の神社に一歩一歩踏み出すのであった。

「うぅ……ヒック、ヒック……」
グスングスン、啜り泣く一人の魔法少女の声が寺の境内に侘しく響く。ルルーだ。何と彼女は怖くて我武者羅に走った挙句、左右の分岐点を見事クリアし神社に美菜達、ミュー達、直人達より先に辿り着いていたのだ。
「うぇ……美菜ひゃんどこ行ったんですかぁ～～～……ヒック、ヒック」
美菜さんがどこかへ行ったんじゃないのです、貴方が美菜さんから逃げ出したのですルルーさん。そんなツッコミは無論誰もしてくれない。魔法少女は一人、顔は真っ赤に涙でボロボロ……とてもじゃないですがこんな情けない姿、誰にも見せられません。だが、それ

ほど辺りは何も見えない程真っ暗……かろうじで、この付近が寺の境内であることが分かるくらい。当然ルルーさんはあわてて逃げたので懐中電灯なんぞ持っておりません。……つまりはルルーさんは今にも屍人が飛び出してきそうな真っ暗闇を体感しているというわけです。

「うぅ……お腹空いたよぉ……ヒック」

グ〜……

恐怖のついでにもう一つ。ルルーさんはエネルギー不足です。美菜が用意した夕食はまともにありつけませんでした。吐いたからです、ルルーさんはご気分が悪かったのです……とはいえ、時間が過ぎれば別。時間差でお腹が空くというものです。

「うぅ〜……うーっ」

ガサゴソ、ガサゴソ。

何か食料になるものを一心不乱に探すルルーさん……その姿はさながら玩具を取り上げられていじけている子供のよう……そうです、ルルーさんは身体は大人（色んな意味で）でも心（性格には精神年齢）は子供なのです。……おやおや？ルルーさんが何かを発見したようです。

「……食パン」

ルルーさんの下のジャージのポケットに何故かぺっちゃんこになった食パンがありました。……ですが、食パンの表面を良く見ると青緑色の何かで食パンの一面がコーティングされているようですが……これはあきらかに腐……

「あむっ」

パクッ

……ルルーさんは空腹に耐え切れなかったのでしょうか、そのまま一口で食パンを食べてしまいました。……魔法少女じゃなくてアホウ少女ですね。すみません、全然うまくないですね。

「……うぅ、足りないです」

たかが一斤の食パンごときで空腹が満たせるわけがありません。ル

ルーさんの気分は今だ優れないようです。ついにはその場で体育座りして、またシクシクと魔法少女は泣き始めました。
「うぅ、怖いよぅ、お腹すいたよぅ、寂しいよぉ……グスッ」
しかし、そんな可哀想なルルーさんの夜中の森の珍道中（？）はまだ始まったばかりなのです。

「お……おいっ！藤本直人っ！お、俺から離れるんじゃねぇぞ……（／／／）」
神社への道の途中、幸太郎君はそんなことを言いながら僕のシャツの袖をギュッと掴んできた。
「……幸太郎君、その台詞……さっきから何度も聞いているのだが」
「う、うるせぇぞっ！藤本直人っ……！お、俺はなぁ！？俺はだなぁ！！！おめぇがこぇーと思って……！一種の親切心で……そのっ、だなぁ！引っ付いてやってんじゃねぇかコラァ！！！（／／／）」
幸太郎君は頬を真っ赤に染めながらそんな事を言う。
「……僕は別に怖くないのだが」
「う、うるせぇー！！！俺が怖いんだよっ！！！悪いかコノヤロウ！！！（／／／）」
さらに頬を染め、興奮の余り上気を発した幸太郎君は僕の胸倉を掴み、ワケのわからない絡み方をする。
「そ、それとも……藤本直人、俺じゃあダメなのか……？（／／／）」
ドクンッ……
また……まただ、胸の高鳴り……や、ヤメロ……止めてくれ……その懇願するような、小動物のような上目使いで僕を見るな……ハァハァ、はぁ……はぁ……偏頭痛が……ズキンズキン……しかしそ

れでいてこの胸の高鳴り……うぅ、認めないぞ……こんな、こんな愛は……

「……かまわない、よ」

しかしそんな胸中に反して僕はいつの間にかそんな事を呟いていた。馬鹿な……そんな……僕は、僕は……あぁ……分からない、色んな気持ちが僕に入り込んでくる……分からない、しかし一つだけ言える事、それは……

『愛、それすなわちエロティック』

それを胸中で繰り返し合唱しながら僕は恥ずかしそうに振る舞う幸太郎君と寄り添って暗闇の森の道をさらに奥に進むのであった。

## 藤本直人とミューの三分クッキング

愛の伝導師「藤本直人と」

ウサ耳幼女「ミューの」

愛の伝導師・ウサ耳幼女「「三分クッキングー」」

ぱちぱちぱちぱちぱちー（↑会場の拍手）

愛の伝導師「このコーナーでは愛の伝道師こと藤本直人が愛に溢れた料理をご紹介していくというコーナーです」

ウサ耳幼女「みゅーん、そこはかとなく楽しみです」

愛の伝導師「さて、今日のご紹介する料理に移る前に一つ、料理には欠かせない要素が三つあります。ミューたん、分かるかい？」

ウサ耳幼女「みゅーん、技術と運と顔です」

愛の伝導師「君は平気で身も蓋もない事をさらっと言うね。ブッブー、残念っ！不正解でチュ～」

ウサ耳幼女「……イラッ」

愛の伝導師「正解は努力と……」

愛の伝導師「心と」

ムニュモニュ

愛の伝導師「愛です」キリッ

ウサ耳幼女「みゅーん、どさくさに紛れてどこ触ってやがるんですか」

バキッ、パリーン

愛の伝導師「ウプッ」

ウサ耳幼女「みゅーん、誰もお前の料理論なんぞ聞いてないです。とっとと始めやがれです」

愛の伝導師「ウフフ……ミューたんはいつも手厳しい……ふむ、今日作る料理は愛の溢れる藤本直人特製『ＬＯＶＥ☆ハンバーグ』です」

ウサ耳幼女「みゅーん、いきなり三分じゃこなせないような料理を持ってきましたね」

愛の伝導師「サブタイトルは破るためにあるものです」

ウサ耳幼女「どこぞの政治家が言いそうな台詞ですね」

愛の伝導師「では、さっそくタマネギをみじん切りにします」

ウサ耳幼女「みゅーん、目がシミシミします」

愛の伝導師「それは心の愛液です」

ウサ耳幼女「お前は何を言ってるんですか」

愛の伝導師「みじん切りしたタマネギをフライパンでウ●コ色になるまで炒めます」

ウサ耳幼女「みゅーん、すごく気分が悪くなりました先生」

愛の伝導師「次にボウルに挽肉を入れ、つなぎに塩を入れます」

ウサ耳幼女「みゅーん、先生。塩ってどれくらい入れればいいのですか」

愛の伝導師「自分が愛の感じるままに……しいて言うならば別れ際の切ない彼の背中を思い出して入れてください」

ウサ耳幼女「みゅーん、先生、意味が分かりません」

愛の伝導師「君もいつかセッ●スすれば分かるよ」ニッコリ

ウサ耳幼女「童貞のくせに何キモイことを言っているんですかこのチン●スは」

愛の伝導師「これを良く練ります。ここで注意点が一つ、愛を込めて練ってください」

ウサ耳幼女「みゅーん、具体的には何かコツとかあるのですか」

愛の伝導師「ふむ……強いて言うならば、彼女の萌え色吐息（※喘ぎ声）を口ずさみながら練ると良いです。あっ……あふっ、あぁ…

…せんせぇ……き、気持ちいいですぅ……あっ、やっ、だめぇ……そんなとこっ！あ、あぁんっ！はふぅ～……」

ウサ耳幼女「みゅーん、先生、会場の方々が引いています」

愛の伝導師「そして、別のボウルでパン粉にミルクを入れよく絞ります」

ウサ耳幼女「みゅーん、先生、家に牛乳が無い時はどうすればいいのですか」

愛の伝導師「牛乳の代わりに水やザ●メンを使ってもいいです」

ウサ耳幼女「何、さらっと余計なものまで入れているのですか。みゅーん、皆さんこの男の話は半分聞いておくのがいいですよー」

愛の伝導師「そして、さきほどのよく練った挽肉とパン粉と卵を練り合わせます」

ウサ耳幼女「みゅーん、いよいよ仕上げですね」

愛の伝導師「そうです、差し詰めセ●クスで言うところの最後の砦ですね」

ウサ耳幼女「セッ●スは余計です」

愛の伝導師「今日はせっかくなのでハンバーグをオッパイの形にしてみました」

ウサ耳幼女「何故」

愛の伝導師「安心してください、ミューたんサイズのちょっと残念な感じに仕上げておきました」

ウサ耳幼女「殺しますよ」

愛の伝導師「これを中火で焼きます、これで焼きあがったら終わりです」

ウサ耳幼女「……これで終わりですか？」

愛の伝導師「終わりです」

ウサ耳幼女「……今思ったんですが、お前、ふっつうのレシピどうりに作っただけじゃないですか」

愛の伝導師「ですが、僕の溢れんばかりの愛が込められています」

ウサ耳幼女「お前はさっきからそればっかですね。せめて、具体的には何か注意点とかないのですか」

愛の伝導師「愛があれば何でも出来る」

ウサ耳幼女「どこぞのプロレスラーがいいそうな台詞ですね」

愛の伝導師「僕は君らとは違うんですぅー！」

ウサ耳幼女「お前は政治家好きですね」

愛の伝導師「では、今日はこの辺で。来週の料理は『ＬＯＶＥ☆筑

前煮』をお送りしたいと思います」

ウサ耳幼女「ＬＯＶＥがついていればもう何でもいいんですね」

## Love of the eternity～永遠の愛～

1. 知れーーー愛を制するものは救われる、まず意識せよ。
2. 求めよーーー愛無き者に救いは訪れない、届かぬ愛に手を伸ばせ。
3. 理解せよーーー愛こそ試練、愛こそ至難、愛こそ不遇。
4. 触れよーーー愛は愛あれど形無きもの、イメージを掴め。
5. 具現せよーーー愛の形は無数なり、自己愛を形成。
6. 物にせよーーー愛に値する愛は無かれ、愛を確かに掴め。
7. 従属せよーーー愛に従え、愛あらばそこに邪は生まれぬ。

さすれば、汝ら共に永遠の愛を手に入れようーーー

（愛の伝導師著『愛聖』より、見開きより抜粋）

僕は『愛の七原則』を脳内で繰り返し唱えながら、己の内に潜む怪しげな感情を必死に押さえ込んでいた。うっ、また偏頭痛が……僕をこんな混沌とした感情にした原因は僕の隣で僕の腕に手を掛けながら歩いている彼いにある。

「……っ、ぜ、ぜってぇー、手ぇ……離すなよな……藤本直人……い、いいなっ！？（／／／）」

さっきからこのような台詞を数分に一回おきに呟く僕の心を惑わせる魅惑の男、五十嵐幸太郎１４才、童貞、オ〇ニー経験無し。僕は……いつから彼に惹かれるようになったのだろう……？初めて出逢った時？初めて、昼食を共にした時？それとも、今？……分からない。この感情は……この不確かで不思議な感情は言葉では表せぬほど僕の胸の中で確かに徐々に膨らんでいた。

「ハー、フッフッフッ、フー……ハー、フッフッフッ、フー……」

しかし、僕の中のもう一人の僕がその感情を拒む、恐れる。もはやどちらが本当の僕なのか分からない。苦しい……そんな時は腹式呼吸で軽減する。大した足しにはならないけれど、咄嗟の暴走状態は防げる……と思う。一度、トガが外れればもう誰も僕を止められない……恐ろしい、こんなところで童貞という名の神域を侵すわけにはいかない……もう止めなければ……だがしかし、一方でソレを望む僕もいる。これは……愛の為すパワーなのか……？

「お、おい……お前さっきから妊婦さんみたいな苦しそうな声出してるけどよ……だ、大丈夫か？」

幸太郎君は僕に気付いたのか、不安そうな声で聞いてくる。フフ……何だ、その顔は……僕を狂い殺す気かい幸太郎君？

「萌　え　ま　す　た」

「……はっ？お、おい……藤本直人？今、何か言ったか？」

「い、いやっ……何でもない、何でも……とにかく、進もう幸太郎君。あと、もう少しで分岐点……地図によると右の石段を登れば神社はすぐそこ……急ごう乳首」

「おぉ……そうだな、って乳首っ！？乳首って何だ！？（汗）」

「うっ……な、何でもないよ……コリコリ乳首」

「コリコリッ！？（汗）コリコリって何だっ！？」

「ち、違う……こ、コリ、コリコリ乳首が食べたいな、と……」

「お、おいっ！何か誤魔化しているつもりかしんねぇけどっ、全然フォローになってねぇぞソレ！？（汗）」

ま、まずい……もうこの溢れる気持ちを抑え切れない……しっ、しかし、まだ猶予は残っている。何とか折り返し地点まで我慢して……ぬぅううう……

「だ、大丈夫……とにかく急ごう幸太郎君。僕はもう……限界だ」

「あ、あぁ……だが、無理はするなよ？」

や、ヤメロぉおおおお……ぼ、僕にそんな切なそうな顔を向けるなぁあああああ……も、萌えなくないのに萌えちゃうだろう……？あぁあああ……僕の中の愛のパラメーターが急激に上昇していくのが感じる……あぁ、何てこと。もう、折り返し地点への分岐点はすぐそこなのに……

「おチ〇ポ大好き」

「うぉおおお！？今、何て言った！？お前っ！？」

「おマ〇コ大好き」

「何言ってんだお前っ！？何ふっつうにシモ、口走ってんだっ！？おいっ！しっかりしろって！おい！」

幸太郎君は僕の両肩を掴み、揺らがせる……

「ぼ、僕に触れるなぁあああああああーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！」

僕は思いっきり幸太郎君を前に突き飛ばした。

「ぐっ……」

「ハー、フッフッフッ、フー……ハー、フッフッフッ、フー……」

幸太郎君はそのまま、舗装の施されていない土の地面に倒れる……ぐぅううう……だ、ダメだ。も、もう……リミット満タン……あと、ワンアクションでもう僕は正気を保てなくな……うっ！

「いててて……」

そ、その体勢は……M字開脚っ！？かのイン〇ン・オブ・ジョイトイが積極的に広めたとされる刺激的かつ魅力的なポーズ！何と言ってもそのポーズの最大の魅力は言わずもがな、股関節を強調するところにあるっ！低位置から眺める女性の美しい足のラインは実に

素晴らしいっ！さらにはそこから羞恥の顔を同時に眺める事ができるっ！そして……シークレットポイント。言わずもがな、シークレットポイントを凝視っ！あぁ、素晴らしい……見ているだけで達してしまいそうだ。しかし、残念な事に相手は男……ふむ。だが……神なる愛に目覚めた今の僕にとってはただそれだけのこと。女だろうが男だろうが……愛に満ちているこの国においては皆、平等だ……うふふふふふふふふ。

それは、僕ーーー藤本直人が完全に『愛』に目覚めた瞬間であった。

「知れーーー愛を制するものは救われる、まず意識せよ」
そう、人が愛を持つ権利は誰にだってある。そのためにはまず……意識しなければならない、愛を。
「求めよーーー愛無き者に救いは訪れない、届かぬ愛に手を伸ばせ」
確かにーーー愛無き者、正確には愛を知らぬ者に救いは来ない。愛を求めなければ、求め続けなければ……救いは来ない。
「お、おい……藤本直人。お前、何で泣いているんだ？（汗）」
「理解せよーーー愛こそ試練、愛こそ至難、愛こそ不遇」
だが、愛は救いであって試練でもある。愛を掴むのは至難で、時には不遇でさえある。だが、僕は宣言しよう……皆、解放せよ……愛を、秩序を、美を。
「うぉおおーーー！？な、何故上着を脱ぐっ！？（汗）」

「触れよーーー愛は愛あれど形無きもの、イメージを掴め」
愛は空想上のものであって、形あるものではない。しかしながら、その個人個人が確かに持つ愛には形がある。それをまず、イメージするのだ……
「具現せよーーー愛の形は無数なり、自己愛を形成」
イメージから、具現へ。それは未知なる世界へ羽ばたくために、愛という名の羽を生み出す儀式。僕は……そう、愛の塊なのだ……
「そして、何故乳首を弄っているっ！？」
「物にせよーーー愛に値する愛は無かれ、愛を確かに掴め」
愛は多種多様、己の愛だけで全てを、世界を知ったかのような愚は禁物。己の愛を知ると同時に、他人の愛を感じ取れ……さすれば、僕は確かに愛の世界へ導かれるであろう……
「従属せよーーー愛に従え、愛あらばそこに邪は生まれぬ」
愛を従属する。僕は全ての愛を従属するのだ。愛を超えた存在……そう、Ｌｏｖｅ ｏｆ ｔｈｅ ｇｏｄ……愛の創造主として、愛の神としてこの世界に君臨するのだ……
「お、おい……藤本直人。お前、どうしたんだ……？さっきから、乳首連呼したり、シモ口走ったり、上着脱いだり、自分の乳首弄りだしたかと思えば泣き始めるし……何か悪い物でも食ったか？（汗）」
そのための手始めとして……まず、目の前の男の愛を奪い、支配する。今の僕は愛の狩人。
「……ふぅううーーー……はぁあああーーー……」
「……お、おい？ど、どうした？」
「……ふっ、うふふふふふ……」
ゆらり……
僕は未だにＭ字開脚の状態で土の地面に倒れている幸太郎君にゆっくり、ゆっくり……近づいていく。僕の愛の無双は始まったばかりだ。うふふ、落ち着いて愛を狩っていくとするか、ペロリ……
「……お、おい！な、何故……舌なめずりしながら……俺に近づい

てくるっ！？」
「おっと、これは失礼。うふふふ……」
ザッ、ザッ、ザッ。
「お、おいっ！？な、何をするつもりだ……く、来るな、そ、それ以上寄るな……なっ、何をするつもりか知らねぇが……とにかく俺に近づくなァーーーー！！！！！」
「やれやれ……貴様、威勢だけは一人前のようだな。だが、貴様がいくら叫ぼうとこうなった僕はもう誰にも止められぬ。愛の略奪者として、第二の人格の藤本直人は君の愛を奪う」
ザッ、ザッ、ザッ。
「あ、あぁ……や、ヤメロー！シニタクナーイ！アッー」

『ミューを待つ？』
「そうよ、ミューは犬並み、いやそれ以上の嗅覚を持っているわ。それを利用して、主人の残り香を嗅がせてどっちの道へ行ったか調べるの」
分岐点でミューを待ち、共にルルーを探す。それが私の考えだった。それを夕に伝えると、夕は怪訝な顔つきで口を開く。
『えー……でも、ミューってウサギよねぇ？何で嗅覚なの？』
「知らないわよ、でも以前、ミューは直人の家で直人のアレの匂いを嗅ぎとった経験があるからね」
『……アレ？アレって何よ？』
「あ、アレはその……そのっ、アレよっ！？ほらっ！アレ！」
『あ、アレって何よぉ……アレじゃあ分かんないわよ』
「と、とにかくっ……！ここでミューを待つのっ！」
ミューは私達より後に出発している、それは確認したので一本道か

らこの分岐点まで必ず来るはず。だから、こそ闇雲にあちらこちらを探すより、ミューの嗅覚を頼るのがいいのだ。ましてや、夜の森。この先の奥の道のりは地図には明記されてないし、迂闊に探し回るとこちらまで迷子になる危険性だってあるのだ。

『うーん……まぁ、美菜がそう言うなら私はそれでいいけど。でも、一ついい？』

「何？私はミューが来るまであんたが何を言おうが、ここを動かないわよ」

『いや、そうじゃなくて……ここ、頻繁に私とタイプは違うけど、霊が彷徨ってるけど。あっ、今、美菜の肩あたりに落ち武者の霊が憑いてるわ』

「……」

「うぅ、寒いよぉ……」

夏場に入ったばっかりなのに寒いとは、いやはやおかしいとは思われますが、実際夏でも山は涼しく、場合によっては寒いくらいにもなるそうです。体感温度は個人差によって感じる気温は多少は違ってくるとは思いますが……さてさて、果たしてルルーさんの寒気は本当にこの理由から来るものなのかこれいかに。

「うぅ、寒い……何ででしょうか……さっきまでそんなに寒くなかったのに……この小部屋に入ってから妙に背筋に寒気が走るというか、何でしょう？とにかく、寒いですよぉ……うぅ」

ルルーさんはあれから何とか重い腰を上げて、寺の中の小部屋に入っていました。その小部屋の内部は昔ながらの木造で、窓一つも無いただ小さな仏壇があるだけの小部屋でした。ちょっと動いたり、体重をかけたりするだけでギシギシ鳴るほどの相当古い小部屋のよ

うです。
ギシッ、ギシギシ……
「ひっ！だ、誰ですかぁ！？だ、誰かいるのですかぁ～～～！？」
ルルーさんは大変アホの子でした。自分で体重をかけてしまったがために軋む音が鳴っただけなのに、どうやら誰かがいると勘違いしているようです。
「あぁ～～～もう、嫌ですぅ～～～何で、私だけこんな酷い仕打ち……ひっく」
グスングスン。あらら、またルルーさんは泣き始めました。
「うぅ～～～うっーーー」
ゴロン、ゴロン。
おやおや、今度は横になってゴロゴロ寝返りし始めましたよ。あっ、なるほど。怖さを紛らわせるためとにかく動き回って動き回って、誤魔化しているようですね。ふむ、しかし思うのです。そもそもこの不気味な小部屋に入ったことが間違いであった、と。大人しく外で待っていればいいのに。
ギィイイ、ギィイイイイイ
「ひっ！だ、誰っ！？」
当然、ルルーさんが身体全体を駆使して動き回るものですから、先ほどより軋む音は大きくなりました。普通は気付くはずなのですが……ルルーさんは見事にそれに気付かない。不思議な子ですね、何て可愛いアホの子何だろうと。もう、ここまで来ると呆れを通り越して逆に可愛く見えてしまう。でも、もう一度言います。ルルーさんはアホです。
「も、もぉーいやぁー！（泣）早く、お家に帰りたいですっーーー！！！」
ルルーさんの叫ぶ声は空しく、寺の小部屋に吸収されてしまう。ふぁいとです！ルルーさん！

## 見えざる敵

「……止まるのです、堂島。前方に不吉な……いえ、怪しげなオーラを感じます、みゅーん」
堂島（オカマ）の背中を押しながら歩を進めること数分後、ミューは前方から何かを感じ取ったのか堂島の肩を掴んだ。
「え、な、何っ！？何なのミューちゃん！？も、もしかして……裸のお侍さんが出たのぉ！？」
「いつまで引っ張るんですかそれ。違います、暗くて分からないのですが、私達の前方に何かいます……クンクン」
ミューは磨きが掛かった己の嗅覚を利用して正体不明の匂いを探り始めた。しかしながら周囲の色々な匂いがミックスされてその中から正体不明の匂いを探り当てる事は不可能に近いものであった。
「みゅーん、色々な匂いが混ざって何が何だか分からないです……」
「ね、ねぇ……？ミューちゃん？」
堂島は頬をほんのり染め、両の指先をチョンチョンと突きながらミューに話しかけてきた。
「みゅーん、何ですか？」
「その……ね？ミューちゃんのお鼻って……その敏感なんだよね？」
「……そうですが、それが何か？」
「そ、そうっ……（／／／）」
「……？」
堂島（オカマ）は腕で胸を隠し、徐々に後退しながらミューから離れていく。
その姿はさながらケダモノに追われ、最終的に行き止まりで追い詰められた美少女が見せるような動作だった。
「……みゅーん、何ですかその気持ち悪い動きは。言いたい事があるならさっさと言えです」
「……お風呂入ってないの（／／／）」
「……みゅ？」

「だ、だからそのっ……！　私、お風呂入ってなくて……！　その、ミューちゃんが……クンクンハァハァ周囲の匂いを嗅いでるんだよね……う～っ、は、恥ずかしいよぉ～～～（／／／）」

「……」

ミューは最初堂島が何を言っているのか分からず、目の前で両手で顔を覆ったり、モジモジしたりする堂島（オカマ）を呆然と見つめていた。それも数秒後、ようやく意味が分かったミューが取った行動は。

ガスッ！

「いったぁーい！（泣）」

何故か妙にイラついたのでとりあえず堂島の尻を蹴っておいた。

「……堂島。懐中電灯を貸せです」

「ミューちゃんひどいよぉ……しくしく」

シクシク泣き出す堂島を無視してミューは堂島から懐中電灯を分捕り、前方を懐中電灯で照らした。

「……みゅーん、あれは……」

「……ひっ、ぎゃぁあああああああーーーーーー！！！！！！！死体ぃいいいいいいいいーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！！！！」

懐中電灯のライトで照らし出されたものは……ブリーフ一丁の男だった。道端で大の字で仰向けで倒れていた。

「みゅーん、死体じゃないです。この男は生きています……」ペタペタ

ミューは死体もとい肢体の手首や胸を触っていた。手首を触ると脈があったので生きている事は確認済みだ。

「ひっ、みゅ、みゅーちゃんっ……！　そんなペタペタ触って……！死姦！？死姦なのっ！？痴女！ミューちゃんはまごうことなき痴女！」

「誰が痴女か」

ぱちこーん

ミューは流れるような動作で堂島（オカマ）の左頬にキッツイビンタをお見舞

いした。
「いやぁーん！いったぁーい！」
堂島（オカマ）はその場で地面に座り込み、ピーピー泣いていたがミューは構わず男の身体を調べる。しかし真夏とはいえ何故こんな所にほぼ全裸に近い男が倒れているのだろうか？特に外傷は見られないが……さらに上半身にライトを照らすとミューはこの男に見覚えがあった。
「みゅーん、この男は……筑前煮太郎」
夕食の頃、夕と堂島（オカマ）と夕食を巡って言い争っていた男だ。
「そ、その死体（仮）……あ、あのキ●ガイおちん●野郎なのぉ！？」
「それはお前が言える台詞じゃないですよ。……ムッ！」
ビュッ、バンッ
「きゃん！」
不意に前方の暗がりから妙な気配をいち早く感じ取ったミューは咄嗟に横にいた堂島（オカマ）の身体を後方に押した。それは堂島（オカマ）を危険から遠ざけるためのミューなりの咄嗟の判断だった。
「……っ」
ミューは己の右頬に温かな鮮血が流れるのを感じた。危なかった、ギリギリの所で暗がりからの謎の攻撃を避けたが、一瞬でも自分の判断が遅れたていたらーーー……ミューは背筋に少し寒気が走った。場に緊張感が走る、堂島は自分の後ろで痛いぃ～とか唸っているが、ミューの心境は冷や汗ものだった。何かいる、しかし前方は視界が真っ暗で何も見えない。だから四方八方、次はどこから謎の攻撃が来るか分からない。唯一の安心と言っていいのか分からないが、足場は懐中電灯の僅かな光で照らされているので全くの暗闇という訳では無いこと。しかしその安心は同時に危険にもなりうる。その僅かな光が自分達の現在位置を特定し、見えざる敵にとっての有利でもあるからだ。かと言って、懐中電灯の光を消す事は完全の暗闇を作ることなのでそれはできない。逃げ場ではない、ここは攻め場なのだ、とミューの頭の中ではそれを覚悟の上で土俵の上に立

っているのだ。
「堂島、決して私の傍から離れるのではないですよ」
ミューは胸の奥で緊張感を携えながらも、反面冷静な気持ちもあった。こういう突然の事態に陥った時にどういう判断をすべきか、己の度重なる経験がミューの気持ちに僅かな落ち着きをもたらせたのだ。しかし、ここで予想外な事態が起こる。
ザッ、ザッ、ザッ……
「……っ」
前方からの謎の足音……それが自分達に近づいてくる。……まさか、馬鹿な。それ以上此方へ近づくということは姿を見せることになる。……正気か？さらなる意味不明な謎の敵の動きにミューは戸惑いの表情を見せる。そして、土を踏み締める謎の足音は近づくにつれて徐々に大きくなり……ついにはミューの持っている懐中電灯の僅かな光はその謎の何かを照らし出した……
「みゅっ、お、お前は……」

同時刻、美菜と夕は神社へ向かう階段と奥へ向かう道の二方向に分かれる位置で未だにミューチームの通過を待っていた。
「……来ないわね」
『……うん、来る気配すら感じられないよね』
もう、ここでミューチームが通過するのを待ち始めて３０分くらい経つ。美菜達がここに来るまで要したのは僅か１５分程度。いくら遅くても時間が倍かかるのはおかしい。特別、罠といった罠も仕掛けられていないし、山道は真っ暗だから不気味といっちゃあ不気味だけど何てこと無い道だ。それにもう一つ、もっとおかしい事がある。

「ここに来た他のグループにミューを見ていないか聞いてみたけど皆『見ていない』の一点張りだしね」
『美菜……グループが来る度に相手の胸倉を掴んで問いただすのはどうなの？（汗）』
「いいのよ、それやってるのクラスの男共だけだし。あんたも直人見ていたら男がどういう生き物か分かるでしょ？万年青春期野郎共にはちょうど良い薬なのよ」
『いや、直人はかなり特殊な例だと思うけど……（汗）』
そう、この分岐点まで来たほかのグループにミュー達を見ていないか聞いてみたが、いい返事は得られず皆口を揃えて目撃していないとのこと。これがおかしい。この分岐点までは分かれ道だとか迷子になりそうな道は無く、道なりに歩いていけば必ずこの分岐点に辿り着くはずなのだ。舗装されていない道とは言っても、土の道は出来ているし、懐中電灯は支給されているのでまず迷う事が無くこの肝試しは行われている。道に迷うような肝試しにすれば下手すれば遭難するチームも出てくるだろうし、そうなれば大騒ぎになってこの林間学校がオジャンになってしまう。だから、絶対遭難しないような道を肝試しの場として選んだのだ。迷うとすればこの分岐点、しかし階段が傍にある時点でゴールの神社はこの階段の先にあるのは日光サル軍団だって分かる。なのに……何故？何故、未だにミューチームはここに来ない？何故、どのチームにも目撃されていない？
「いよいよミステリーじみてきたわね」
『ミステリーとかじゃなくて道の脇でおトイレ済ませているだけじゃないの？』
「どんな痴女よ、いくら真っ暗闇でも他のチームが懐中電灯持って徘徊している最中にそんなことしないでしょ。それに、あのオカマン（※堂島）もいるんでしょ。絶対無いわよ」
『うーん……っ！？』
「うっ、な、何！？だ、誰！？」
美菜と夕が話していると先ほど通った道の方からいきなり懐中電灯

の眩しい光が美菜と夕を包み込んだ。

「おっ、やぁ。美菜さんと夕さんじゃないか、こんな所で奇遇だね、フフッ」

懐中電灯の光で美菜と夕を照らした人物は藤崎茜という意外な人物であった。暗くてはっきりとは確認できないがあのおどけたような人懐っこい笑みを浮かべる彼女は確かに藤崎茜という人物像を抽象的に表していた。

「あ、茜さん……！？ど、どうしてこんな所に……！？違うクラスだから違う場所で林間学校のはずじゃ…！」

『そ、それにその……川口浩探検隊みたいな格好は何なの？（汗）』

「フフッ、どうやら私は人気者のようだね。でも、質問は一つずつにしてくれないかな？じゃあ、まず美菜さんの質問から答えるね。私がこんな場所にいる理由は大地の神秘が私を呼んだからだよ、フフッ」

「は、はぁ……？」

「ここには相当の高密度な霊的なモノを感じるんだ。高密度な霊と言えば夕さんがそうなんだけど、もっと強いモノを多数感じる。波長が合わないから見えはしないけれど、今でもビンビンに感じるよ、フッ、フフ……」

茜は大変満足そうな笑みを浮かべて腕を組みコクンコクンと頷いていた。

『（ね、ねぇ……？美菜、この人何を言ってるの？ぜ、全然意味が分からないんだけど……（汗）』

「（不思議な人、茜さんを一言で表せばそうなるわね……つまりは変人なのだけど）』

『（……？）』
「変人は私のデフォルトだよ」ニッ
茜はいつの間にか美菜と夕の真後ろに移動していた。
「わっ」
『ひぃ！び、びっくりしたぁ……お、脅かさないでよね！心臓止まるかと思ったじゃない！』
「夕、アンタの場合、心臓止まってるのがデフォルトじゃない」
『……あ。そ、そうねっ、って何かそれ何気に酷くない？』
「フフッ、驚かして済まないね。じゃあ、夕さんの質問に答えようか。川口浩探検隊とは……これまたレトロなところを例に挙げてくれたね。夕さん、君はいつこの世を去ったんだい？』
『し、思考がレトロで悪かったわね！そ、それよりどうしてそんな格好になったか聞かせてよ！』
「おっと、また話が逸れてしまった。まぁ、先ほど私はこの地に神秘を感じてここに訪れた、とそう言ったよね？」
『……言ったの？』
「……さぁ、言ったんじゃない？」
「神秘を感じる地には無限の可能性がある。その可能性を求めて私はこの地で探検もどきをやっているんだよ。まぁ、川口探検隊みたいなやらせみたいな事は無いんだけどね」
『……やっぱり私この人の言っている意味理解できない』
夕は難しい顔をして、その辺をウロウロ浮遊している。
「……まぁ、この森にその神秘性を感じるのと同時に何か不吉なモノも感じるけどね」
茜は少し俯いてそう言った。美菜はその普段と違う茜の様子に何か不安を感じて問う。
「不吉なモノ……あ、悪霊とかですか？」
「そんなの比にならないよ。確かにそういうのも少しは感じるけれど……もっと、もっと大きな何かを感じるね……」
ビュウウ……

夏の森は冷風という名の凶風で冷やされる……その風はこれからの展開を示唆するものであった。

## 魔力の従属者

『ねーねー！茜ー！この椎茸の出来損ないみたいなのは食べられるんじゃない？』

「ん？あぁ、それはニセクロハツと言ってね、確かに見た目や形状は椎茸というよりクロハツみたいなナリをしているけど猛毒キノコだから食用には無理だね。おっ、こんな所にエノキタケ発見。フフッ、やはりこの森は神秘の大地だね。まさに感動ものだよ……（／／／）」

「……はぁ」

美菜はキノコ狩りを楽しむ茜と夕を見ながら溜息を突いた。何故、こんな状況でキノコ狩りを楽しめるのか楽観的な二人に対して呆れていたのだ。が、変人の行動が美菜に理解できるはずも無く見ていることしかできなかった。……ミューを待ってから大分時間は経つ。そろそろ先生に報告した方がいいのだろうか？何か事故に巻き込まれたのかもしれない……そう、例えばどこかの沢に滑り落ちたとか、ヒグマや山賊の類に襲われたとか、……そんな事は考えたくは無いがさすがに心配になってくる。言いようの無いかすかな不安に押しつぶされた美菜の頭の中はマイナスイメージなことしか思い浮かばなかった。

「おや？美菜さん、君はキノピオ狩りを楽しまないのかな？」

茜は両腕に狩った大量のマイタケを抱え不思議そうな顔で美菜にそう尋ねた。

「……楽しそうね、茜さん」

美菜はその質問にはあえて答えなかった。それが拒否を意味していると茜が察してくれると思ったからだ。

「ん、美菜さんは楽しくないのかい？」

「……茜さん、この状況よ？楽しめるわけ無いじゃない……はぁ」

「溜息なんかついて、らしくないじゃないか美菜さん。いつものあ

の元気な美菜さんはどこにいったんだい？」
「私は茜さんがどうしてこの状況で何で冷静というよりキノコ狩りを楽しめるか理解できないんですけど」
茜は自然体で聞いてくる。今の状況をよく理解していないから仕方ないのかもしれないが……美菜は聞き返さずに入られなかった。
「フフッ、分かってるよ大体ね。ミューさんやルルーさん達が行方不明なのだろう？」
「っ！？じゃ、じゃあどうして……！？」
何故、茜がそのことを知っているのか気にはなるが、ピピーンと何かの電波でも受信したのだろう。今はそんなことより茜の返事に対して美菜は不思議でならなかった。
「だからこそ、だよ。……そうだね、美菜さん。君は直人君の毒キノコを食べた事はあるかい？」
「ど、毒…きのっ！？ちょっ、なっ、いきなり何言い出すんですか茜さん！？（／／／）」
『？ねぇー美菜、直人の毒キノコって何？』
「お、お子ちゃまのあんたは黙ってなさいっ！（／／／）」
『ひ、ひどっ！な、何よそれー！教えなさいよー！うー！』
夕は恨めしそうに美菜の周囲をブンブン飛び回るが、美菜はスルー。というより、スルーしなければ色々アウチな内容だったからだ。
「美菜さん、私の質問に答えて欲しいな。君は直人君の毒キノコを食べた事はあるかい？」
茜は涼しい顔して引き続き美菜に尋ねてくる。自分が何言っているのか分かっているのかしら茜さんーーー美菜は顔に熱を感じながらそんな事を考えていた。
「あ、あぁ、あああるわけないでしょっ！？（／／／）……ま、まさか茜さん、も、もしかして」
「あぁ、おいしかったよ」ニッコリ
「え、えぇえええ～～～～～！？」
「……という風にね、心にもゆとりが必要なんだよ美菜さん」

「……」
「ん、どうやら私のアメリカンジョークは美菜さんには伝わらなかったようだ。ということで夕さん、後のフォローよろしくね」
『えっ、ちょっ！？何コレ！？ここで私にキラーパス！？えー……な、何か美菜の様子が可笑しいんだけど？うっ……さ、殺気が……』
「美菜さん、私が味わった直人君の毒キノコ『もどき』はこの山にいっぱいあるよ」
『だ、だからぁーさ、さっきから美菜と茜は何の話をしてるの？って、うっ……み、美菜……』
「フッ、フフ……」ユラ……
背中にどす黒いオーラを抱えた美菜はあきらかにさっきの様子とは違い、今にも誰か近づこう者がいるなら喰い殺してもおかしくないような佇まいだった。
『ひっ……み、美菜？』
「いいわよ……やってやろうじゃない……キノコだろうがキノピオだろうが毒キノコだろうが……引っこ抜いてぐっちゃぐちゃに噛み千切ってやるわよ……フフ、フ……夕ッ！来なさいッ！引っこ抜いてやるわよ！あの男のブツをッ！金的をッ！」スタスタ……
『い、いえっさー！』
そして美菜は怯える夕を引きつれ、茜の元から離れていった。茜は少し笑みを浮かべた。
「フフ、そうだよ美菜さん。マイナスなイメージを考えたってしょうがない……せめて無事を祈って今は楽しもうじゃないか……人はそれを現実逃避と称するけれど、ね……」
茜は少し寂しげな表情を浮かべ、美菜達を見つめる。
「うぉおおおおりゃぁあああああーーーーー！！！！！！」ブチッ、ブチッブチッ
けれど少し直人君に悪い事をしたかな？と思いながら茜はまたいつもの笑みを浮かべ、自分もキノコ狩りを再開し始めた。

「……」
懐中電灯の僅かな光に浮かび上がった人物は周囲の暗闇と溶け込むような漆黒のローブを羽織っており、目元はそのローブで隠れ、口元の白い肌が浮き立っている……その様はまさに物言わぬ影、とでも称すればよいのか。
「……お前は誰ですか」
ミューは目の前にいる物言わぬ影に対して警戒を怠らない。
正体がハッキリしない以上、近づけない……現に先ほど、どのような攻撃か暗闇のせいで見当もつかないが下手すれば致命傷も負いかねない襲撃を受けたのだ。この状況で警戒しすぎることは生き物としての普通の反応である。
「……その微小な魔力、貴様……魔力の従属者か？」
物言わぬ影がそう言う。
ミューは内心驚いていた。此方がいくら何か言おうとも物言わぬ影は何も答えぬことを予想していたのだ。
…が、それはミューに対する質問の答えにはなっていない。
「……お前が何を言っているか分からんですが、質問を質問で答えるなです」
「そうか、魔力の従属者だとすると……魔力を分け与えた人物が存在する……」ブツブツ……
物言わぬ影、いや、正体不明の人物はもうミューの話を聞いていなかった。
「みゅ、みゅーちゃ～～～んっ！この黒の騎士団みたいな格好をしている変態さんは誰なのぉ！？」ガクプルガクプル
だからそれはお前が言える台詞じゃないないだろう、とミューは心の中でツッコンだが今は目の前の正体不明の敵に集中しなければな

らない。むしろこの場の空気の読めない能がお天気てっかてかな発言をするカマ野郎に対して少し殺意を覚えたぐらいだ。
「……そこの、筑前煮はお前がやったのですか？」
「……？筑前煮……？……あぁ、この男の事か。知らぬ、私がここに現れた時には既に倒れていた。ただの露出狂であろう」
筑前煮で通じたのは驚きだが、この物言わぬ影は嘘は言ってなさそうだ。現に倒れているとは言っても気絶しているだけで大事には至らない。今はそれより……この物言わぬ影が何者であるか、何を目的にミュー達に攻撃を仕掛けたのか……敵の素性を知らぬ内に迂闊に手を出すのは危険だ。そう心の中で判断したミューはその場で警戒を解くことなく構えていた。いざという時に一般人もとい堂島（オカマ）を巻き込まぬよう逃げる決断を迫られるやもしれない、それが叶わぬのなら最悪、目の前の正体不明の敵と闘わねばならない……いずれにせよ万が一の時に供える必要がある。
「では今度は私から質問だ。貴様から感じる微小な魔力、宇宙の塵屑にも満たぬほんの些細なエーテル力ではあるが……魔力の従属者で間違いあるまいな？」
「……」
ミューはさっきと同じ質問じゃねぇですか、意味不な専門用語ペラペラだべってんじゃねぇですこの電波ハゲとか心の中で思ったが、それは口にしなかった。魔力というと一人のおっぱいでいっぱいな魔法少女ルルーの事を思い浮かんだからだ。そして、魔力の従属者……魔力を分け与えられた者、とでも解釈すればいいのだろうか。そう解釈すれば納得できる、自分はルルーの半端な魔力によって動物人（ハーフ）間にされた……辻褄が合う。だが、それを正直に目の前の正体不明の敵に告げるわけにはいくまい、危険すぎる。なら否定するか？しかし、少なからず目の前の正体不明の敵は何やら感じ取っている。……それは軽率な嘘をであると言えよう。どちらにせよ良好な先は見えないのなら……
「……私がお前の言う『魔力の従属者』、だとしたら……お前はど

うするんですか」
それは聞き様によっては自分が『魔力の従属者』であると肯定しているようなものだ。しかし不確かな返事でもある。その不確かな返事、すなわち肯定と拒否の中間をミューは選んだ。

「消す。魔力の源は勿論の事、魔力に少しでも関わった人間も皆」

「……っ」
ミューはこの返答で肝を冷やした。
単に台詞に、という意味だけではない。自分の返答に対しての奴の態度にも、だ。
ミューは前の返答の後、いつでも奴が襲い掛かってきても対応できるよう構えていた。
自分の返答が不確かなものであると同時に肯定的な意味を含めた返答でもあるのは自分でも十分に理解していたからだ。なので奴が自分の返答を聞いた瞬間、襲い掛かってくるのは自明の理……とは言い過ぎかも知れないがそう予想していたのだ。なのに奴は自分の返答を聞いた後も淡々と、いや堂々と構えているのだ。……それが意味する事は一つしかない、それは……『余裕』。貴様らのような宇宙の塵屑共に手を下す事等動作も無い……ミューにはそう言われているような錯覚に陥ってしまったのだ。傍から見れば、いやいや考えすぎ、つーか深読みしすぎでしょアンタ？とか思われるかもしれ

ないが、ついさっき自分達は曲がりなりにも命を狙われたのだ。そういう風な錯覚に陥るのは仕方ない事であろう。こうなれば例え動物人間（ハーフ）であるミューであろうと正常な判断が困難となる……

「みゅっ……」ヨロ……

「ミューちゃんっ！？」

後ずさる、それは動物としての本能。ヤバイ、やばすぎるという感覚……危険信号、もう目の前の正体不明の敵から逃げなければならない、が、それができない。もつれる、感覚の中では逃げなければならないと発しているのだがそれと恐怖感が絡み合って実際の行動に移せない……心配する堂島の声は届くが響かない、全身の感覚が既に麻痺しているのだ。

「……どうした？私の質問に答えて欲しいな、『愚かなる人間』よ」

それは死のカウントダウンを告げる合図であった。

## そこに愛はあるのか

ミューと堂島（オカマ）が謎の敵と対峙している一方で呑気にキノコ狩りを楽しんでいた美菜と茜そして夕もとある人物と対峙していた。

「「「……」」」

『……何よ、この沈黙（汗）』

3人（＋α）に妙な空気が流れる。それは、そのとある人物に問題があるのだが……

「……で。誰よ、コイツ」

美菜は誰に問いかけるでもなくそう呟いた。

「……いや、何ともまぁ……刺激、いや痴激的な格好をしているけれど間違いなく今、私達の目の前にいる人物は藤本直人君だね」

茜は少し苦笑しながらそう言う。茜の口調には目の前にいる残念な子に対してどう接すれば良いのか悩むような響きが美菜や夕に十二分に伝わってきた。

『……何で直人の格好、パピヨンなの？（汗）』

そう、目の前に現れた藤本直人らしき人物は目にはパピヨンマスクを装着しており、服装は胸元から腹まで地肌がむき出ており、下腹辺りに紫色の蝶マークをあしらった全身黒タイツという電波な姿だった。それはまるで何かを悟り、僕は生まれ変わったんだと言わんばかり……直人の周囲は異様なオーラが漂っていた。

「ふ……じ、もと……な、お……と……？違うね、僕、いや私は生まれ変わったのだ……愛の伝導師改め愛の救世主。そこにいるおなごどもよ。今後、私のことは愛野狩人（あいのかりうど）とよびたまへ……」

「はぁ？バカ？」

美菜は怪訝な顔でそう言った。

「……フフ、愛の数だけ乳首がある（／／／）君達の乳首は黒ずんでいるのか、な……？（／／／）」

『……何か前にもましてますます気持ち悪くなっているし（汗）』

「……君は、私の記憶違いでなければ直人君のはず何だが……ハハ、ハ……どうしようか？」
さすがの茜も直人の変貌についていけずいつもの余裕な笑みとは打って変わって枯れたような笑みを浮かべてその場に佇んでいた。
「き、きっさまぁーーーーーー！！！！！！！わっわわＷＯわわ、私は直人ではないと言っておろぅがおっぽろろろろくぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐーーーーーー！！！！！！！」
『怖っ！（汗）』
「茜さん、そこをどいて。とりあえずソイツを殴って正常に戻すわ。まぁ、元からしてアレだけど」ポキッポキ
美菜は既に戦闘体勢に入っていた。

「……ふっ、私を殴る……だと？片腹痛いわ。生身の人である子が私に触れられるはずがあるまい。私に触れられるものなんぞ私自身以外にこの世には存在しないのだからな……何故なら私は愛の救世主の証、ぷりっぷりきゅあはぁとをこの偉大なるハートにｓ」
「黙れちんぱんじー」ヒュッ
美菜は容赦なく自らの拳を直人の顔に向かって振るう。その時の美菜が振るった拳のスピードは秒速２００ｋｍを超えており、優に世界最高速のロケットをも超える蝶速度の攻撃だった、が。
「おっと」ひょいん
「なっ……！？」
その蝶速度の拳を直人は余裕で横に動いてかわした。
「……フフ、なるほど。確かに君のぱんちーは速い。しかし、私のリアクション・オブ・ザ・ラヴ☆を持ってすればいかなる攻撃もこのようにいとも簡単に避けれるのだよ」

「何がリアクション・オブ・ザ・ラヴ☆、よ……じゃあこれでも喰らいなさい！」ビュンッ
すかさず美菜は右足を用いて直人の顎に向かって蹴りを入れる。その時の美菜が繰り出した蹴りのスピードは秒速３０万ｋｍを超えており、優に光速をも超えるチョー速度の攻撃だった、が。
「むぅうん！」バシッ
「ゑっ……！？」
そのチョー速度の蹴りを直人は余裕で防いだ。すなわち右手でタイミングよく美菜の右足首を掴み、攻撃を防いだのだ。
「ふぅ～～……無駄だ、おなごよ。私のマキシマムラヴァーの前では赤子の手を捻るものよぉ」
「ちょっ……離せっ、離しなさいよ直人！」
「フフ、見える、見えるぞぉ……私の瞳にははっきりと君のスカートの下からぱんてぃが映っておる。ピンクと白のストライプとは……見かけによらずなかなかかぁいらしいぱんてぃを穿いておるではないか君ぃ！」
「や、やめっ……バカッ、見るなぁ！（／／／）」
美菜は右足を直人から逃れようとジタバタ動くが、直人はギュッと足首を掴んでいるせいでそれも無駄な動きであった。
「人は、平等ではない。生まれつき足の速い者、美しい者、親が貧しい者、病弱な体を持つ者、生まれも育ちも才能も人間は皆、違っておるのだ。しかし、人は平等を求めて今日も走るっ！だからこそ人は争い、競い合い、そこに進歩が生まれる。―（中☆略）―我がラヴワールドはそうではない。争い、競い、常に進化を続けておる。ラヴピーポルだけが前に、未来へと進んでいるのだ。我がむ☆す☆こもほぅらご覧の通り疼いておる！ラブが進化を続けているという証。闘うのだ！！競い、奪い、獲得し、支配しろ！！その果てに未来がある！！オールアイラヴフォーエヴァー！！！」
直人はどこぞの名言っぽい感じでひたすら電波な台詞を語る。その壊れた人形みたいな喋り方に美菜は不快と同時に恐怖をも感じた。

「なっ、何言ってんのよ気持ち悪いっ！気持ち悪いぃ！離せぇ、離しなさいよぉーーー！！！」

夕と茜は遠巻きから直人と美菜の言い争いを呆然と見ていた。

『……ねぇ、茜。アレ、どうしようか？（汗）』

「……」

夕は直人と美菜の方に指を差して茜に問うが、茜は首を横に振り『もうダメですにゃあ』のお手上げポーズをする。それを見た夕は、はぁ……と息を吐き出しまた直人と美菜の方に顔を向ける。夕が、あぁごめんね美菜ーーーとこれから慰み者になるであろう美菜に謝罪の念を込めているとどこかで聞いたことがあるような声が聞こえてきた。声が聞こえてきた方向を見ると泣きそうな顔でちょうどゴールの寺へと続く階段の上の方から直人と美菜の方へ走っていく魔法少女ルルーがいた。

「うわぁあああああああーーーーーーーーーーーん！！！やっぱり山の寺の中は暗くて狭くて怖いですぅうううううううーーーーーーーーーー！！！一人ぼっちは嫌ぁあああああ！！！！！」

「おふぅ！？」

ルルーは暗い中でパニックになったのか、直人にすかさずタックルを決めてくる。そのルルーがぶつかってきた衝撃で直人のパピヨンマスクがポロリと外れた。

「うわっ、僕のパピヨン！僕のパピヨンはどこっ！？どこっ！？」
直人は美菜から手を離し、四つん這いで暗闇の地面に落ちたパピヨンマスクを必死になって探す。その姿はこの先の哀れな変質者の末路を如実に表していた。
「うわぁんうわぁあん！怖かったよぉ怖かったよぉ！」
ルルーは必死の形相でパピヨンマスクを探している直人の傍で座って駄々っ子のように泣いていた。
「ルルー……あんたこんな所にいたのね。まぁ、それはともかく……」
「どこぉー！僕のはっはっはっはっ！パピヨン！僕のパピヨンはどこ！？」
美菜は未だパピヨンマスクを探している直人の方に向き……
「ちょっと調子に乗りすぎね。直人♪」

ドガバキッドスッゴキッメリッパキッボキッズボッズボッポキッ

「アッー」

## 君は誰だい？

「……で？あんた等は一体何なの？」
真夏の夜の下、意識を取り戻した僕は何故か仁王立ちしている美菜の目の前で正座プレイをさせられていた。
「うぅ、何で私まで……い、痛い。足が痛いです……」
僕の隣でメソメソ泣いているルルーも美菜に正座プレイを強要された一人だ。フフ、やはり君の泣き顔はいつ見ても素晴らしい……その瞳から零れた涙をできれば誰でもない僕の舌で舐め取ってあげたい……（／／／）
「聞いてん……のっ！？」バキッ
「フゥッ～超絶気持ちイイッ」
美菜は僕の鳩尾に蹴りを入れた。フフ、やはり君の愛の鞭が一番素晴らしいよ美菜。君が今生足で無いことが悔やまれてならない。
「あの……私何だか、さっきから悪寒が止まらないんですけど……特に私の隣にいるメガネをかけている方からの、えっと、その……」
「我慢なさい、それも一種の罰よ」
「フフ、美菜さん、それを一種の罰と一言に片付けてしまうのは彼女にとって酷だね。せめて悪霊にしてやらないかな？」
『直人はもう罰とか悪霊とか災いレベルな扱いなのね……（汗）』
何だかシトゥレーな会話が繰り広げられているような気がするが気にしない。今の僕はどんな暴力もどんな言葉責めも快感へと昇華させるスキルを身につけているからね。ふぅ～サイコー
「罰って、あのっ！私、美菜さんに罰を受ける程悪い事した記憶が無いのですけどっ！」
「……ルルー、あんたまだ自分がどんな立場にいるのか自覚していないようね。夕、『アレ』スタンバイ」
『ヘイ！おやびん、今そこの草むらで活きのいいまっくろくろ助を捕まえやしたぜーうっへっへー』

夕はニヤニヤした顔で草むらから出てきた。彼女が素手で持っていたブツは体長１０ｃｍ程の人によっては触れるのは持っての外、見るのも憚れるであろう毛むｓ
「いやぁあああああーーーーーー！！！！！！まっくろくろ助いやぁあああああーーーーー！！！！！！」
夕の持っているブツを見たルルーはいやいやと涙を流して拒絶反応を見せた。その怯える姿がもぅチョーかぁいいなぁ、もぅ。
『うっへっへー、おやびんどうしますー？思い切って奴の背中にこいつを投入してやりましょーかぁ？うひひー』
「夕、そのおやびんってのはやめなさい。あと直人、その『僕がやりたいな』みたいな顔して親指舐めるのはやめろキモ虫。あのね、ルルー？あんた、私達が今まで何してたか知ってる？」
「うぅ……ハイ？」
ルルーは不思議な顔して首を傾げる。その不思議ちゃんももぅチョーかぁいいなぁ、もぅ。でもどうやら彼女はいまいちよく分かっていないらしい。
「……夕、あと一匹追加」
『サー！イエッサー！』
「いやぁあああああなんでなんでなんでぇえええええ！！！！！？？？？？？」

「……で、次はあんたよ直人」
美菜は僕を睨みつけそう言う。
「やっ、優しくしてねっ（／／／）」
「何言ってんの、キモッ。一回氏ね」
美菜はまたもや僕に愛の鞭を叩き込む。もうこれはあれだね、クセ

になる味ですねママン。
「アンタに聞きたい事は山ほどあるけれど……」
「み、美菜……君は僕の恥ずかしいプライベートを聞きたい、と？そ、そんな……で、でも仕方ない。そう、あれは僕が小４の頃、ティッシュで陰部を」
『な、何か語りだしたし（汗）』
「ねぇ、茜さん？こいつ殺していい？殺していい？」
「フフ、まぁ美菜さん。待ちなよ、ここは私が彼に聞こう。ねぇ、直人君ちょっといいかい？」
「そう、僕は彼女に言ったんだ……『いやぁ！僕の恥ずかしい恥部をさらけ出さないでぇ！』真っ赤になった僕は彼女を押し倒……何ですか？茜さん？こんないい所で止めるとは茜さん……やはり貴方は侮れぬ存在」
「フフ、どうもありがとう。君にそう言われて光栄だよ。ところで直人君、君は『解離性同一性障害』の存在は知っているかい？」
茜さんはいつものように軽く微笑みながら僕に語りかける。様になっている、夜の森に彼女は溶け込んでいて……それでいて世界を作っている。何なのだろうかこの感覚は……神秘的なものに触れた時の感覚？そんな感覚に近いものを覚える。
「もちろん知っていますよ。一人の人間の中に二人の人格が交互で現れるといういわゆる二重人格って奴でしょう？」
「あぁ、そうだね。一人の行動を司るのはあくまで一人、もう一方の人格は傍観者的に振る舞い、ある行為によってその立場が逆転する……まぁそんなところだね」
茜さんは云々と首を動かしながら納得する。……何が言いたいのだろう？今、それと何か関係が？
「いわゆる精神的な問題でね。心理的に不安定になった時がもう一つの人格と入れ変わりやすいという……まぁ証拠は無いけれどね。さて、問題。直人君、『君は誰だい』？」
「なっ、それはどういう……？」

ガッ

瞬間、僕はフワッと宙に浮く感覚を味わった。
浮いたのではない、地面に『吸い込まれた』。

「『君は、誰だい？』」
僕を至近距離で上から見つめる茜さんの顔が映った。

## vs. ムッツリ仮面

暗雲立ち込める山奥のとある場でミューと堂島は物言わぬ陰と対峙していた。
「あえかなる心を持つ者はその弱き心隠せぬ、そこの人であって人で無いもの、あとおカマン。道を誤ったな、私がその程度のサルにも足らぬ知恵で誤魔化せると思うたか」
「……っ」
「ねぇ！？もしかしてオカマンって私の事！？ねぇ！？」
物言わぬ影の不気味な圧力がミューと堂島に襲い掛かる。それは物言わぬ影が重い腰を上げ、戦闘態勢に入った証拠である。
「（……もう、遅いです。一瞬奴の恫喝に怯んでしまいましたが、ここは玉砕覚悟で挑むしかなさそうです）」
ミューは手に汗を握りながらも今まであったいくつかの選択肢を捨て去り、一つに絞った。
それはすなわち『覚悟と死』。それくらいの気概が無ければ自分は元より、傍に居るおカマンをこの場から逃がす事ができないからだ。
「……みゅーん。堂島、私は今から奴の懐に入り先制攻撃を仕掛けます。私が地を駆けた瞬間、お前は元来た道の方向へ一気に逃げて下さい。おそらく引率の先公がスタート地点にいるはずです」
「みゅっ、ミューちゃん……そんなっ！」
「早く準備するです、もうお前と喋っている時間は無いです」
ミューは堂島にそう言うとすぐに戦闘態勢を構えた。両手、両足の先を地につけ、両の瞳の鋭い目は目の前の獲物、物言わぬ陰に向かれていた。姿は人ではあれど、その構えはまさに獲物を狩る野ウサギそのものであった。
「ウフフ、怖い顔。それでこそ、私の狩り甲斐がありますわ」
「……？（奴の気配が変わった……？）」
違和感、それはほんのちょっとした違和感……いや明らかな変化。

一瞬殺気がほころび掛けた瞬間。ミューは物言わぬ影のちょっとした変化に気付いてはいたが、戦闘態勢の構えは解かなかった。
「ウフフ……どうしたのかしら？人であって人、いや……ウサギちゃん？早く、私の元に駆けて来て下さいまし」
「……」
ミューはいわゆる天邪鬼な性格であった。そのため、他人に来いと言われてのこのこ来るタイプではなかった。むしろ余計にそのちょっとした綻びに怪しさを覚え、戦闘態勢の構えを一層強めた。いわゆる、先手必勝！で迎え撃つというわけではなく、迎撃に切り替えた。相手が来るなら、迎え撃ち、後手に回る。
「ど、どうしたの……は、早く来なさい……ハァ、ハァ……あぁ～もぅ、ムラム、イライラするわね……ハァハァ」
ミューが自分から動かない理由か、それとも他の理由かは分からないが誰が見ても明らかに物言わぬ影の様子がおかしい。
「も、もしかして……はぁはぁ、これは……今流行の放置プレイって奴ぅううう？くひゅ～、かぁいい顔してやることはえげつないわねぇ……いいわよぉ、もっと、もっとよぉ！はぁん！フゥー」クネクネ
「（何だコイツ）」
目の前の物言わぬ影は両腕で自分で自分を抱きしめ、身体全体をイソギンチャクのようにくねくねしている。その姿はさながら怪しげな宗教団体の儀式のよう。
「みゅ、みゅ～ちゃ～んっ！な、何かあの人怖いぃ～～～！」
ミューの背後にいるおカマンは物言わぬ影の狂気にも似た変化にビックビクしている。お前のその反応も生物学的な意味で怖ぇですよ、とミューは心の中でツッコンだ。
「（みゅーん、逃げろと言ったのにこのオカマは……が、奴の狂気じみた行動には何か裏があるはずです）」
ミューは未だ戦闘態勢を崩さずじっと構えていた。しかし、その直後。そんな今までの膠着状態は思わぬ形で崩されたのであった。

「……ふっフフ、今の今までこうもこの私を辱めた相手は初めてですわ……ふぅ（／／／）お礼に私の本当の姿を羞恥プレ、晒して差し上げますわっ！」
そして、物言わぬ影は勢いよくローブを満月の昇る綺麗な夜空に向かって放り投げ、その姿を露にした。

「私の名はムッツリ！ムッツリ！ムッツリ仮面！月に代わってタイーホしちゃうぞっ☆」

「「……」」ポカーン
開いた口が塞がらぬ、とはまさにこのことだろう。漆黒のローブの下から現れたのはもち肌仕様の肢体。
何と言ってもまず最初に視界に飛び込んでくるのはおっぱぁであろう。どでかい、どでかすぎる。ミューは一瞬、脳裏にどこぞのおっぱいでいっぱいな魔法少女を思い浮かべたが、それも優に超えたけしからんデストローイ。それは『このワタクシのけしからんたわわなマシュマロを是非国指定天然記念物に入れて下さいませ』と言わんばかり。次に目が行くのは素顔。癖毛の混じったパツキン美女、どことなく雰囲気からして外人さんいらっしゃーい、な感じを匂わせるお方だが顔の造形はどちらかというと日本人寄り。鼻も決して高くないし、キリッとした感じではないが、小顔が素敵。などなど、至れり尽くせりの容姿……言う事ない、が。

「（みゅっ、みゅーん……こいつ！真性の痴女ですっ……！）」
中身が良くても装備が残念でござる。
彼女の大事な部分を覆っているのは僅か二枚の水着？いや下着か？大事な部分を覆い隠すための極端に布地面積を狭くした彼女の下着は少し歩いただけで色んなモノをポロッポロッポロリンチョしてしまうような思わず性少年は目を背けたくなるほどのふぁんたすてぃっく！どこぞのジョイトイよろしく、●字開脚なんてしたらふぁんたすてぃっく！さらに装着しているパピヨンマスクもふぁんたすてぃっく！とにかくふぁんたすてぃっく！な格好だった。
「ウフフ、お嬢ちゃん達どうかしら？私の衣装、今宵を生きるまさにムッツリ本来の姿ですわよね？……ふぅ」
「みゅーん、お前はムッツリじゃねぇよ。チャック全開じゃねぇですか。全開仮面」
何故か本来の姿を露にしたムッツリ仮面はその場で正座し、ミュー達をジッと嘗め回すように見つめていた。その怪しげな視線に思わず背中に寒気が走るミューとおカマンであったが、その場でジッと突っ立っていた。
「あら、心外ですわね。私はムッツリ仮面……ふぅ。不埒な妄想など……ふぅ。全てワタクシの脳内で既に完結しておりますわ……ふぅ」
「な、何かあの人私達を凝視しながらエレクトしてるよぉ……な、何か怖いぃ～～、ミューちゃ～～んっ！」
「うるせぇです」パチコーン
「きゃふぅ！ひっ、ひどいぃ！ひどいよぉミューちゃん」
「……みゅっ」
その場で正座から足を崩した女の子のような体勢で何かを訴えるようにミューを涙目で見つめる堂島。
あぁ、こいつすこぶるうぜぇ……と思いつつも一瞬ちょっと可愛いと思ってしまった自分に頭を覆いたくなるミューであった。そんな危ない思考を消しつつ、話を続ける。

「あぁん、今ちょうど69からの3Pに入った場面……ウサギちゃん、私はね。どちらかというと、いぢめられるより、いぢめる方が好きなの。だ　か　ら　、ペロンッペロンッチュルルッチュパチュパジュックジュック！」
「最後の擬音は何ですか。あとお前の性癖とか暴露しなくていいです」
「舐めるよりね、舐められる方が好きなの私」
「聞けよオイ」
「女の子ってね、不思議な生き物なの。無くてもそこいらの代用品でズッコバッコできるの」
「おい、そろそろヤメロ。例え深夜枠でもそれはキツイです、あとお前の存在も」
「うぅ〜〜……えっちぃ（／／／）」
堂島は何故か股間を押さえてその場で座り込んでいた。
「おい、堂島。その格好は反応に困るからヤメロです、みゅーん」
「イイッ！実にイイッ！いいわよニョイ棒咥えた子猫ちゃん！今からムッツリ仮面が貴方で妄想するからまっててね！」
「何だこのセクハラマシーン」

月明かりの下でミューたちの前に突如姿を現したムッツリ仮面。
彼女の目的は……？真意は……？性癖は……？そして正体は一体何なのか？返せ僕らのシリアス！
そして次回に続くような気がする。

## おっぱいとウサ耳幼女の家宅捜索ｉｎメガネの方のお部屋

おっぱい「第一回！チキチキ！気になる♪マジカル♪あの子のお部屋はどんなのかな！？」

ウサ耳幼女「おー」ドンドンぱふぱふー

おっぱい「企画を説明する前にちょっとツッコミたいことがるんですけど……何ですか！？このっ、『おっぱい』っての！？」

ウサ耳幼女「それ以上にル…おっぱいをおっぱいと表現するするのにそれ以上の表現はあるのでしょうかおっぱい」

おっぱい「おっぱいおっぱい言わないでよミュー！そうでなくとも最近の私、過剰におっぱいキャラに定着してるような気がするのにぃ……うぅ」

ウサ耳幼女「メガネの方の御用達の性欲処理キャラですね」グッ

おっぱい「い、いやですー！私、そんな変態キャラは嫌ですっ！」

ウサ耳幼女「まぁ、そんなことは果てしなくどうでもいいんで、さっさと進めやがれです」

チチオバケ「うぅ……ミューが冷たいです。えっと、今私達は某メガネの方の部屋の前に待機しています。只今の時刻、１４時３０分。部屋の主は不在。ぶっちゃけ、えとこの企画は気になるあの人の部屋を探索してみようという、只それだけの企画です」

ウサ耳幼女「まぁ、第一回とか言ってますが、ぶっちゃけコレ以降はやんないです。単発企画というやつです」

チチオバケ「ニコニコした人達が鑑賞しているあれと似たようなのと思っていただければ」

ウサ耳幼女「ネット社会に毒された一人の魔法少女がここにっ……まぁ、魔法少女とかほざいている時点で中二全開ですけどね」

チチオバケ「さっ、さぁ！さっそく部屋に踏み込んでみましょう！」

ウサ耳幼女「逃げたなおっぱい」

チチオバケ「……えと、さっそくなのですが……部屋から妖気が漂ってくるんですが……さっそく踏み込むのが嫌になったんですけど（汗）」

ウサ耳幼女「……む、あの男、生意気にもドアノブに鍵を掛けてやがりますね……乙女ですか」ガチャガチャ

チチオバケ「や、やたっ……じゃなくて、そ、それならしょうがないですね！今日はこの辺で諦めましょう！ねっ！」

ウサ耳幼女「私のテクにかかればこんなちゃちぃドアを開くなんてちょろいもんです、ほら開きました」ガチャ

チチオバケ「……」

ウサ耳幼女「あからさまに嫌そうな顔してますね」

乳牛「……でっ、では気を取り直してご、ゴー……」

ウサ耳幼女「ゴー」

乳牛「……おじゃましまーす。……あれ、意外と普通な部屋ですね」

ウサ耳幼女「某勅●河原みたいな部屋を想像していたんですけどね」

ガンッ、バサッバサバサー

乳牛「あぁ、もうミューは乱暴ですっ！そんな人様の机を蹴って……？」

ウサ耳幼女「……」

乳牛「……」

ウサ耳幼女「……みゅーん、学習机を蹴ったら、反対側の下から二番目の棚から大量のえっちぃ本が出てきましたね」

乳牛「一体どんなギミックなんですか……」

ウサ耳幼女「えっちぃ本とは言っても、一般でいううえち本ではなくて同人誌のやつですね。中にはメジャーな二次創作系のモノも入ってます」

乳牛「何でミューはそんなに詳しいんですか……う、うわぁ」

ウサ耳幼女「言葉では言い表せない程のレヴェルの数々。とてもじゃないですが、純情ボーイにはお見せできないですね」

乳牛「こ、こんなっ……痛そうっ、うっ……ぁ、あぁ……（／／／）」

ウサ耳幼女「みゅーん、おっぱい激しい」

乳牛「おっぱい激しいとか言わないで下さいっ！……ていうかこの、同人誌……でしたっけ？なんか不自然にページの表面がシワシワなんですけど……」

ウサ耳幼女「使ってるんですね」

乳牛「な、何に……あっ、何か嫌な予感！い、いいですっやっぱり言わなくていいです！」

ウサ耳幼女「特にこの魔法少女のコスの金髪ロングの女の子のページはすごいですね。シワシワ度が半端無いです」ペラペラ

乳牛「あーあー何も聞こえなーい！聞きたくない！聞きたくないですぅー！」チラッチラ

ウサ耳幼女「耳塞ぎながらしっかりと指の間から見てるんですね、この痴女」

乳牛「痴…っ！？げふんっ、げふんっ……と、とにかくっ！ミュー！もうこんな魔窟の巣から出ましょうよ！気が狂いそうです！」

ウサ耳幼女「まぁまぁ、いいじゃないですか。もうちょっと家探しして見ましょうです。何か奴の弱みを握れるかもですよ。クックックッ……」

乳「くっ黒っ……」

ウサ耳幼女「さてさて……みゅ？机の上にあるこれは……」

乳「……ジャ●ニカ学習帳、ですね……懐かしいです」

ウサ耳幼女「何だかそこはかとなく嫌な予感がしますが、開いてみます」ペラッ

乳「ドキドキ、ドキドキ」

～ｌｏｖｅ☆ｎａｏｔｏ　ｏｎ　Ｔｗｉｔｔｅｒ～

今、起きたなう。ついでに下の方も起きた。

６：００　ＡＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから

ピー子に挨拶した。また無視された。とっても嬉しい。

６：０５　ＡＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから

美菜が我が家にやって来た。今日も眠たそうな顔をしている。

ちょっとした悪戯にリアルソーセージを咥えさせようとしたら本気で殴られた。

死にそうだった。でもやっぱり気持ち良かったです。ウフッ☆

７：３０　ＡＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから

ルルー起床なう。今日もおっぱい日和になりそうです。

７：３５　ＡＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから

ミューたんとまちるも起床なう。ひんぬーも素晴らしいですね。

７：４０　ＡＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから

お隣の友恵さんに挨拶なう。シカトされた。大好き。

７：５０　ＡＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから

ひとりぼっちで登校なう。

８：００　ＡＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから

今、教室に着いたなう。楼流たんに挨拶。

今日は露出度の高い小悪魔仕様の楼流たん。生足舐めたいです。

８：１５　ＡＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから

皆でお昼ご飯。

おかずの詰め合わせの色取り取りの弁当が日の出弁当に変わっていた。何故？

１２：５０　ＡＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから

五限目は保健体育で水泳。

間違って女子更衣室に入ろうとしたら、美菜に金的に刺激的な蹴りを喰らった。

さすがの僕でも痛かった。でも何だか嬉しかった。またやってくれるだろうか。

１：３０　ＰＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから

水泳なう。

ルルーのスク水がえらいことになっていた。

それを凝視していた幸太郎君もスク水がえらいことになっていた。

ミューたんに励ましのエールを贈ると、何故か思いっきりプールに放り込まれた。
２：００　ＰＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから
音楽なう。今日はクラス合同で茜さんもいた。何だか水を得た魚のように生き生きとしている様子。茜さんにエロティックヴォイスを言ってもらった。でも、真顔で言うものだから僕のゲイボルクは全然反応しなかった。その後、美菜に半殺しにされた。
３：００　ＰＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから
美術なう。今日は人物デッサンで美菜とペアになった。何だか嫌な顔をされた。
美菜の描く僕の似顔絵はまるで地獄から這い上がってきた邪鬼のようだった。ちなみに僕は美菜のヌードを書いた。見せたら、筆ペンで両目を突かれた。
４：００　ＰＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから
放課後なう。夕日が差し込んで赤みを帯びた教室内は何だかロマンティック。
これでエロゲーのようなシュチュだったら最高だったのだが、ふと周りを見ると自分ひとりだけだった。急に現実に引き戻された気分になって、僕はそんな妄想を考えるのを止めた。
５：１０　ＰＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから
ひとりぼっちで下校なう。
５：２０　ＰＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから
帰宅なう。家には誰も帰っていなかった。
食卓の上には一通の書置きとペヤングやきそばのカップ麺が置かれていた。

６：００　ＰＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから

夕食なう。久しぶりに食べるカップ麺は塩っぽくて苦かった。

ふと裏面を見ると賞味期限が一年前に切れていた。

６：３０　ＰＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから

トイレなう。ゲリピー。

６：４５　ＰＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから

腹痛が治まらなかったので正露丸を飲んだ。と思ったら間違えて下剤を飲んでいた。

７：００　ＰＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから

再びトイレなう。ゲリゲリピーピー。

７：１０　ＰＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから

やっと腹痛が治まり、風呂場に入ると全裸のルルーがいた。どうやら僕がトイレに引きこもっている間に帰ってきたようだ。この世のものとは思えない程の悲鳴を上げられ、後からきたミューたんとまちるに半殺しにされた。役得、役得。

８：００　ＰＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから

風呂なう。傷口が湯に染みて痛かった。

９：００　ＰＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから

風呂上りの牛乳なう。

何だかドロドロしていて変だなと思って瓶の底を見ると賞味期限が半年前に切れていた。

９：３０　ＰＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから

続・トイレなう。何だか赤いのも混じっていた。
９：４０　ＰＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから
自室なう。二日ぶりのオ●ニーをしようと思ったがティッシュが切れていたので諦めた。
１０：３０　ＰＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから
ＰＣ起動なう。Ｘフォルダを見るとブツは全削除されていた。
フォルダ内には代わりに『お兄ちゃんと妹のすゆことぜんぶ。』というタイトルのエロゲーがあった。ありがとうございます、遠慮なく使わせていただきます。
１０：５０　ＰＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから
歳のせいか最近はトイレが近い。トイレのドアを開くと便座にミューたんが座っていた。
超高速でドアを閉め、自室に逃げ込もうとしたがその前に捕まり、腕ひしぎ十字固めでノックダウン。意識が向こう側の世界に飛ぶ前に最後に見えたのは下半身むき出しのミューたんだった。
１１：００　ＰＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから
良い子はもう就寝タイム。
今日は色んなことがありましたが、楽しかったです。
おやすみなさい。
１１：５５　ＰＭ　Ｊｕｌ　３ｒｄ　Ｋｅｉｔａｉ　Ｗｅｂから

（以降、次の日へ続く）

乳&ウサ耳幼女「「……」」パタン……

ウサ耳幼女「……みゅーん、帰るか」

乳「……うん、そだね」

後日

乳「死んでくださいっ！この……エロ助っ！」

愛の伝導師「えっ……あ、ありがとうございます（／／／）」ドキッ

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2164f/

貴方の願いを叶えますっ♪

2010年11月5日02時20分発行